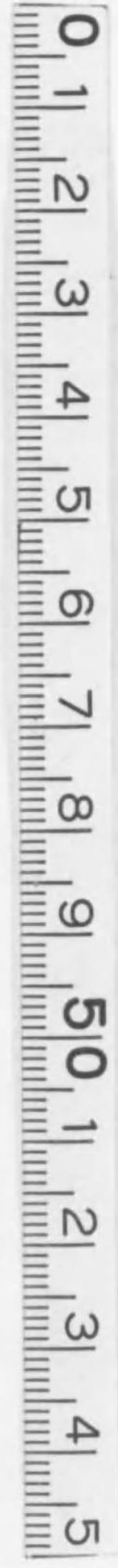


918.6-Sa856ウ
1200501968766

918.6
A856



始



199

7

省務内
18.5.-9
(版出通普)

918.6
SAB56



佐藤惣之助全集
隨筆篇



2.11
1.2.15

2.11
1.2.15

938
125

目次

女界雜誌

第一卷



室生犀星編輯及校閱

枯野の王者……………一
彼女は歸れり……………一五
水中の春……………三三
野外手帖……………四〇
——相模を歩き廻つて——
忘れ得ぬ南方植物……………四六
颱風王……………四九
道路について……………五五
世相見聞記の一節……………六六
『月に吠える』を讀んで後……………七一
座談……………七六
大樹の花・室生君……………八四
歌劇に就ての感想……………八九
花猫遊草……………九二
——泥偶の神うだつの由來——

霜夜づくし	101
陶磁器への遠望	106
美しき寺	110
雨久花科	119
一重帯	133
蘭科と百合科	137
月よし夜よし	131
春風を祝ふ	137
海扇譜	141
婦女歳事記	141
洗耳記	147
治水の聖	151
春鶯閑談	160
薔薇の秋風	170
舊横濱立版子圖	175

少年事物談奇	177
味覺に就ての論理	183
春煙記	186
遅櫻記	188
茅舎をつくる	195
月に就いて	199
自轉車	206
私の旅行法	211
言語の靈	211
露都刊「支那誌」	214
詩花一體	242
音韻	245
花と葉と	247
歌謠厄拂	249

——一六七八年に於ける——

最近歌謠談義	二五五
戦線見聞記	二六二
薩摩	二七三
南の島	二七七
沖繩の風色	二八〇
釣の探究	二八五
郷土民謡をたづねて	二九四
明日の詩歌	二九八
従軍抄	三〇四

佐藤惣之助集 隨筆篇

枯野の王者

よく人は君はどういふ土地で生れたのですか、とかどういふよいもののある美しい所で育つたのですかといふ風に私に問ひかけるが、不幸にして私は自分の生れた土地をはつきり人にわかるやうに、その人が私をうらやみ私の言葉に感動するといつた風に云ひあらはすには、あまりに私は自然力の乏しい所に生れたといつても自分から思ひ込むでしまふのである。そしてもし私が私の理想通りな所に生れたなら、どんなに私は輝かしく私の生れた土地の事を吹聴するだらう。

全く私の生れた町はあまりに雑多でちらかつてゐて、誰の眼にも見馴れてゐるやうな所なので、何といつてあらはしていゝかいつもその言葉に迷つてしまふ。そこで仕方なしに私はこの土地を、ただもう日や月や星などに燃えつくしてしまつた浅い田舎だといふ風に云つて置くが、どこといつて山嶽もなければ大きい波濤もない、ただ砂と泥でいつともなく埋まつた浅い土地なので、田と畑と草つ原と沼や入江や川が少しばかりあり地盤が干潟のやうに低くつてすぐ出水がするし、昔の海沼であつたと思へるほど、深く地を掘ると青い水成岩と白い蝶々のやうな貝殻の出てくる、いやはや水脈が非常に悪くつて濕りやすく乾きやすく、よく地鳴りのする埃っぽい所

としかいひやうがない。

木や草の花でも天然のものとは濃い美しい色をもつてゐるものはなく、目のさめるやうに優美であつたり清楚な姿をしてゐる鳥とても渡つて來た事はない。ただもうわづかに水と空氣の曙や夕陽をかんじるくらゐなもので、雨あがりに南方の雲の塊りを花でもあるやうに水に映して眺めるばかり。いたづらに雜草の穂のみわびしくもはなやかで、あたりが凡て雨水の色合ひであるから、土地の人は土着力が尠くすぐどこかへ移住してしまふ。いつもかう曇り日のアルミニウムの色や響きがあつて、水に焼けやすい立木などは女の眉のやうに哀愁的にこのつたまま、冬にでもなると辛辣な、マッチ箱の小家と汚い工場とのするどい景色が至るところにひらかれる。

ただもう凡てが雜草的だ。青萍や滿江紅がいつばいういて黼黻とか田芹とかがおひしげり、葎と蘆がどこへでもよきくと生えてくる。鴨も鴨もゐなくなつてしまつて、時々海から鴨と葎切りがとんでくるばかり、散歩でもする時はただ川を見るぐらゐが關の山、いくらかの梨の花や桃の花と月の川をみるより他にたのしみはない。子供の時にお馴染みの昆蟲や麥魚もだん／＼すくなくなり、この土地に限つた習俗やアクセントをもつた人の言葉もきかれなくなり、かつては私達が初めて世界といふものを學びだす所も、もういたづらに他國の移住者に住み荒されてしまつた。

かういふ私たちの田舎町を背景にして、この頃全く私たちとちがつた昔よく見たやうな一人の男が歩いてゐる。浮浪人とも氣違ひともつかず、さりとして乞食といひきつてしまふ事の出來ない一種寂しい幽かな氣を引いて、私たちの眼の届かないやうなものになりきつて歩いてゐる。まるで私たちが見限つた昔の土地を戀するやうに、或は子供の時のみ知つてゐたやうな野原や裏路をまるで失はれた昔の町を掘出して見るやうに歩いてゐる。しかし彼はこの土地の者ではなく、どこか悲しい家庭からか或は淋しい天國の船から墜落して來たのか、燈火をのがれ人情をはなれ町の近頃の空氣をすつぱりとはなれて、ただ一人ぼつちで野路や藪や川のあたりをちつと腕を組んで歩いてゐる。月の引力か何かで潮が引くやうに、雀や何かが人のゐない景色の奥へちつと魅入られて飛んで行つてしまふやうに男はあつちこつちと彷徨つてゐる。もし動物の神經がより陰陽の電氣をかんじやすいといふのが本當なら、彼も磁石が北を指すやうに、渡り鳥が來たり歸つたりするやうに、暖い日のあたる南へ行きさうなものであるが、彼は犬のやうに食物や路の關係で無心にあちこちと引かれて行くと見えて、いつまでたつてもこのあたりを去らない。それに土星の年動が他の星よりずつと遅いやうに、彼の回轉も私たちよりもぐつとのろい。さうかと思ふと私たちのやうにどこへ行かうといふ意志も、歸るべき時と處の記憶もないらしく、彗星が特別な自身の軌道をつくつて飛行してゆくやうに、彼は決して人の想像する道や方向をとつて行くとい

ふ事は決してないらしい。それがこの地上では見えぬ他の遊星のやうに極くこまかい神智にでもふれたやうな動き方をしてゐるのであらうけれど、私たちの眼はそれをよむ事が出来ないといつた風である。私は散歩にでるとよく彼を方々で見ると木の下にゐたり町にゐたり裏路や川のあたりや草の上や、どこかかう何のためともつかぬ所によきりとイむでゐたり歩いたりしてゐるのを見る。もし摩尼羅經といふお經の本にある「歩行鬼」といふ者が實際この世にあるとしたら、それはこの男のやうな生存の方法をとつてゐるのかもわからない。歩いてゐるうちは天然の軌道と調節がとれてゐるが、もし何かの狂ひかびたりと止まるやうな事があれば、それはもう死か他界か地上の運命を失はなくてはならない。その影は死んでしまつても人はまだ前進するかあと戻りをして、動植物にちかい特別な機能のある生き方さへ許されてゐるかも知れない。しかし私たちに普通人とは全く別な彼の運動の方向をつきとめることは不可能だ。おそろく鼠とか鮑とかよりも、風や氣流の方向よりも、狂つたとも自失したともつかない彼の動きの方が不規則かも知れない。私は彼が四ツ辻や廻り角へ来た時よく注意して見たが、一定の方向としてはなく向ふから車が来たとか眼を射るものが来たかして、左右を見ると右手に人がゐて左手に誰もゐなければ左手へ行くのだらうと思つてゐた。然しよく見ると違ふ。彼は辻や廻り角へくると祈るとも考へるともつかない風をする。暫くイむで天地の瑞氣を觀測した上で、何者にか引込まれる

やうにといと行きたい方へ曲る。何を見て何を冥想するのやらわからないが、午前は東へ午後は西へ、しかし曇り日や雨の日はどうするか、まつたく彼の神経が光線や温度や路の関係ばかりでなく、鳥のやうな別な感覚によつて自由にとんでゐるとしか思はれない。

彼は晝夜も四季の別も感じてゐないやうに見える。鳥のやうに眠つてゐるところを人に見せない。一定の樽を失つたデオケネスはどこに躑つて其夢を愛するのであらう。私は彼の歩いてゐるところしか見た事はない。路を追はれ迷つた沙門のやうに、すご／＼と腕組みをして、はだしの親指をちつと立てて首をちぢめるやうに眼を伏せて歩いてゐる。のろいやうで速力はつづく。何も願はずに歩くから路の方であとへさがる。彼はすすむ。野にわようと様子は一定不變、獸が見ようと人であれ木であれ同様に無心に見てゐるので、それ以上の祕密も暗いものもないといふ事は太陽が直接知つてゐるといつた風である。あだかも地球が非常な速度で空間をとんでゐるといつたところで、草花や私たちはそれを知らずに静まつてゐられるやうに外界がいかに變化しようとして騒々しからうと、彼はその静かな平和を全身から離しはしない、眼前で人が殺されるやうな事があつても恐らく彼はその中を風のやうにぬけてゆくであらう。彼には萬物が一度に潮のやうに流れて來ても、その中から何一つ自分に必要なものをつかみとる事は出来ないであらう。食物を拾つて食べてもその手は全く神祕な命令を實行してゐるやうに、静かな蜘蛛が下りると同様

す、つと下りる。彼を動かす磁力は動物以外のものではないかも知れない。生命の花は朦朧とうなだれて、奥底のするどいきらびやかな閃めきや、射るやうな感じやその感受性がみんな廢棄してしまつて、鈍い單純で下等な機能のみがある一線を辿つてのみ進行するばかりかも知れない。癡狂院の患者の運動が星座の運動を象徴してゐるかどうかわからないやうに、野に放たれた彼の運動がどういふ状態をつづけて、どこかの神経が中止しどんな情感が働いてゐるかそれはもう私たちに見える筈がない。

彼の年齢もさらに朦朧としてゐる。動物にある一種の（若やぎ）といふやうな夕日色もついてゐれば、又妙に蒼いやうな黄色いやうな草味としたものが塗りこめられてゐる。彼がさういふ風な鳥や樹のやうな官能をもつてゐても、地上にある限りは年齢に容赦なく犯されると見えて、どう見ても四十にちかい壯年の肉力をもつてゐるのがわかる。彼の年齢が内側では恒星でもあるやうにその年波が遅鈍にすすむでも、時には水星が八十八日で軌道をめぐつてしまふやうにはげしい遅速を見せても、ほんとうに年齢といふものが内質的なものなら彼はあんなにも若くはない筈である。季節と時間におかまひのない彼にとつては、年齢が外にあらはれようとそんな事はどうでもよい。そんな支配は受けない。孤獨な泥と沼との精には年齢の波が及ばない。それよりは年齢で運命の支配を受けるよりも先に、彼自身の鬼氣とふしぎな生氣によつて死んでしまひさ

うである。ただ私たちには彼の中に大へんに年齢や時間といふものが短縮されてゐるやうに見えるにかかはらず、彼自身には私たちの晝夜が果していかに長いか短いかが想像もつかない。冥想に溺れ朽ちてゐる者に時間がとりつけないやうに、彼は時間と年齢の網を脱して一時に五年十年と無限の生活をしてゐるとも考へられない事はない。かと思ふ又彼は一生かかつて普通人の一時間の生活も完全には出来ないと云へましょう。螢や蟬が三ヶ月で死むでも、樺や竹が千年を経ても真に時間と年齢の不幸は、そのもの自身の内部とは違つて運行するであらう。

彼の表情を見ても内からのものは外へあらはれず、外からくるものとは刺戟もなく、まるで藪や野原の晴れたとも濕つたともつかない幽鬱の色が、いつの間にやら閉ぢ籠つてそれが發散しない。無心の風に封じられて冷い無感動な筋肉が假面のやうにとりついてゐる。睫毛の先から瞳孔の底へ、それから内心の機能へ何物も傳波しなければ、感情といふべきものの流通はその流れを失つてしまつてゐる。只そこには動物の憂怖ともいふべきうら悲し氣な溫和でつめたいものが眼つきや口の端にあらはれてゐる。人が彼に向つて何か云ひかけたり危害を加へさうな振舞ひをすると、只その幽愁にみち／＼と泣き出さんばかりの恐怖の情をあらはす。私は彼に犬の吠えてゐるのを見た事はない。その顔はいくら汚れても洗はなくとも普通の放浪者のやうに穢くはない。青いやうな黄金の塵が日光にさびついたやうな顔で、頭髮や髯は時々人が刈つてやると見え

て若い囚人でもあるやうに見える事があり淋しいふしぎな清廉さをもつてゐる。眉毛には日が燃え口や眼には樹液のやうな艶があり、南方人のやうな豊かな頬や耳にはわかい香鬘色の野の匂ひがするやうである。歩き出してから何年になるか、煙草を拾つて喫む事と何かやれば食べる事とが、この世の存在の印として彼は忘れずにゐるやうだ。

更に身なりの筒袖の布子は、泥とも布ともつかない中間の埋もれた色艶をした木綿縞で、繩の帯をくるくると案山子のやうに巻きつけてゐるその色は、貧しい農婦が畑で着る古い戸板色とも土の乳色とも又雀や鶯の肌毛色の布子とも云はうか、田舎木綿が洗ひ古びて赤く褪せてくると白い土氣色と乾いた暖色を帯び、殊に日光にさらされて曇り日でも雨にでも日本の田舎の人に固有な日常の淡い地味な調子になつてくる。彼の衣物がそんな風で一年に一回誰かとりかへてやつてもすぐに街道の色と風とを染めて、多くの古い木造の家の色、木の幹の色、畦や橋桁などと同じ色になつてしまふ。田舎縞の古びたものはいかに路や川や畑と調和するか、自然は四季を通じて路上の人の目から、決して際立つた印象をよび起させないやうに、彼を日常色の塵と風で保護してゐるやうだ。

彼はそれ自身が塵埃色をしてゐる自由な日時計であつた。自然の大時計が花やら葉やら雨や雪でわかるやうに、彼を見ると日ざしや風までわかるやうな氣がした。自然は彼の自由な調子とお

のれの調子を合奏せしめて喜ぶでゐるやうに見える。そして彼を地の一角にめぐり廻らして置いて、その上に太陽や星を又めぐり廻らしめて、彼にふしぎな恩寵をよりそゝいでやるやうにも見える。彼がそんな調子で飄然と野原へ出ると、野原の路は一個の磁石を得たやうに彼の指揮に従つてゐる。野の静けさや明るい透明な空間が彼にいかにふさはしい事か、雲が流れたり森の冬の峰がすぐ彼を仲間のやうにあしらふのでもわかる。彼は木と同じやうに空中でゆれてゐる。すこしも自然に反抗するやうな調子がない。私は冬の枯野の道で彼を見たときしみくさう思つた。意識してはあんなにまで寂びた枯草の風や、落日や、枯木の群れと共に同じやうな顔をしてゐる事は出来まいと。その無心な天然との連絡が、いかに萬物の中に消えんばかりにふれて、美しくも無情な水や大氣にその生命を洗はれてゐる事か、私は彼を哀れむ事は出来なまいと思つた。むしろやくしやして町や人事にかかはりあひ、慾を燃やしてゐる私たちがへんに悲しくも恐ろしくもなつた。彼には天地の理氣があらはれてゐる。自然の中にあらゆる光と哀愁とがあふれてゐる。彼が腕を組むで水や藪を見てゐると、水や藪は彼と連絡して何とも云へない自然の味を深めてくる。思ひやうで自然の無音無律な大きい動搖と運行の線にのり入つて、涅槃とも恍惚とも冥合ともつかぬふしぎな調子になりきつてゐるやうである。彼は風の水先案内であるか、水と天地の破れた船員であるか、樹や草の囁きの合唱者であるか、星の世界からの追放人であるか、何とでも

云へるしどんな風にでも思へたり感じられるやうな気がしてくる。そして彼はまったく普通の生活の意識をはなれて、ひとり萬物と一致したやうな藪の陰や木の穴にちつと跼つて、眠つたり醒めたり、自然の動くままに被造物としての運命を甘受して一步もそれ以外の道へは踏み出さず、邪見もなく又不平も云はず、龜のやうに地をはつて辛棒してゐるのを見れば、いたづらに私たちは人間の高い機能ばかりを云々してゐられなくなつて、遂にはかゝる低音な、馬鹿々々しい生存の方法でさへ、うらやむほど生命に惱むでゐる事がわかつてくる。

そんな風に町を彷徨つたり野原へ出て私たちの町をめぐり廻つてゐる彼を見ると、そも／＼彼は何者だらうと思ふ。哀れな者とも得體の知れぬ者ともふしぎな狂人とも悲しき放浪者の影とも見える。肉親も氏素性もさりはなした廢人で、無能な禽獸にも等しい生物としか思へまい。彼の過去は何であつたか、どういふ動機で家出したかその療法はないのか、境遇といひ運命といひもう杜絶し四散しつくしてしまつた幽鬱病患者で、温い寢床も明るいランプも善きスープもなし、愛し愛される事もなくこの世から見離された幽鬼となり、餓鬼となりいつの間にかやう大自然の捕虜となり囚人となつてしまつたのだ。大昔には彼のやうな生活が流行して、地には蜜がながれ果物は熟して自由に食べられたかも知れないが今の世はさうはゆかない。彼のやうに乞食をやめてしまつてからは雀か鶯のやうに拾つたり獲つたりして食べなければならぬ。その上に彼は頑固

におし黙つて誰とも口をきかうとしないし、歩行の鬼となつて歩き廻つてゐるのだから、いつになつたら彼の無心の願望が充されるのか、或は願望といふものがなく明日にでも凍死しないとも限らず、しかもその危険も苦しみを感じてゐないので、彼は盗人のやうに人の物を狙ひもしなければ人の關の内へ侵入しようともしない。かといつて放浪者や乞食のやうに人を羨みもせず自身と比較する術も知らず、傲慢になる事も卑屈になる事すら彼は知らないのだ。欲望の機能がやぶれてゐて悪疫とか悲歎からもふしぎに逃れてゐる。人の性がぬけ運命が狂奔して、幸不幸も目的も秩序もない無明の谷をさまよひ初めた。彼はある意味で出離したのだ。風月の快美さへ自覺する事が出来ないし、又不死とか永遠とかといふ感じさへつかまへる神經を失つてゐるのだから、内心は空、外觀も虚、一切天然そのものへ生命ごと没入してしまつたのだ。彼は生の夕榮であつた。生存の殘光を肉體ごとこの世にとどめて、いつか大虚空へ向つて出發するその用意をしてゐるものやうだ。

ふつと人の窓の外を過ぎゆく彼は魔物のやうな感じを人に與へた。町角で荷車や人に挟まれてゐると哀れな子供のやうであつた。女達や放浪者とならぶやうに町を流れてゆく情景はみじめな動物のやうであつた。その癖一切の音や色にふれても彼は寂しい風そのままの塵となつて通過して行つた。躓いたり痛みを感じ寒氣に刺されても氣の毒だといふ感じを起こさないのである。し

たがつて子供も犬も女も彼を擁護する事が出来なかつた。第一彼に注意してゐる者はどこにもなく、それほど自然の巧妙さに護られて彼は町を横行してゐた。この天然底なしの婆羅門教徒が何をかんじ何を思ふか、それは枯野にて冬の天象をひとり眺めてゐるとうす／＼その調和がわかるやうな氣がする。殊に彼を見るのは枯野の夕暮にかざる氣がする。彼はその時刻になるときと一人す／＼と枯野へ歸つてゆくからだ。塵の色さびた無心の衣物をはた／＼と吹かれて、曇り濁つた町から藪と草の新らしい集へ逃げてゆく。そこに何かあるのだ。彼にもその寂寥がわかるのだ。彼の沈黙をさらにしづめてくれてその孤獨をさへきよめてくれる妙な魅力があるのだ。それがいかに無心沮喪したものの内にも一つの要求として存在するのではないのか、それが何であるかは彼も第三者も共にわからないのであるが、無心と見える天の運動をよいかげんに付度する事が赦されるなら、それはある一つの世界と樂園を欲してゐる事ではないのか、しかも非宗教的な、非人間的な、たとへば他の星の世界といったやうな豫感と自然の感情が、何ともつかずに枯野のこの行者を魅入らしてゐるのではないのか。生活がないくらゐ遠くへ行つてしまつてゐる彼には常人の見えないものが見え、物の未完成なしかし成長しない不可解な微分子があつて、そこへ行くには彼のやうに低い愚人の境地へまで墜落しなければ出入する事が赦されないのではないのか。そこでは彼が雲や虹に手をふれようと水に口をつけようと、その美は少しも損じられない

といったやうな氣のする世界である。それは彼がこの枯野の夕暮に一人そひでゐることが、透明なふしぎな一つの繪になつてゐると思はれるからだ。夕陽を額に色づけて藪の中に立ち、低い地平線の上をさまよつてゐる彼を見ると、何となくエヂプトを脱するエホバの民の一員とでもいひたいくらゐだ。彼は日没の極みに立つてゐる。夜とは太陽が地上を去るので、地球の極地の彼の立つてゐる地點から初めて暮れるのだ。影と陰が一つになつて彼を黒くするのだ。

私は彼を見るたびに、この見るものとはない私たちの生れた土地の美を、彼一人がほぢくつたり監視したりしてゐるのではないかとさへ思ふ。この土地に生れてこの日の色や月に馴れながら何一つ知らない自分の恥しさに、私は彼に負けず散歩にでるが、とても彼の根氣には敵對すべくもない事だ。彼は事實はどうでもどことなくこの天象にのみ燃えて浅く妙に開けてゆく土地を悲しみ、又愛してゐるばかりでなく、私たちの土地そのものに同化して雪やあらしの苦行をつんでゐるので、土地そのものの妖精といつてもいいくらゐである。私が何がなくとも自分のまはりの木や草や水を愛し、母の里や父の家のあるこのあたりの野を愛してゐるので、ただに無心な天の運動、四季の花、光と潮や地の波や沼や川のほとりをどんなになつかしく尊く思つてゐるであらう。一つの森が伐られると私は涙が出る。さなきだに色のない明るい水づいたり埃になり易い所なので、この無名なしかし天から見たら同等に美しいよい郷土を、運河や工場に利用される事

を悲んでゐる。がしかしそれもよい。この頃の私はすっかりあきらめてゐる。何故といつて私たちの麥魚や烏瓜や蜻蛉は決して死なないからだ。天の光を受けてゐるものは死なない。あの男も死なない、私もこの土地を愛してゐる限り愛してゐる感情は死ぬ筈がない。

日よ月よ星よ千萬にかがやけ、やがて春が到着して木や草のお祭りやお祝ひが近づく。私たちはいつもその季節の饗宴をどんなにか待つてゐるであらう。この浅い土地にも梨や桃の花がひかり、野薔薇や忍冬がいろいろとかがざられてくるまで私はあの男を生かして置きたいと思ふ。そして私たちと共にとび廻つて貰ひたい。私は彼を私たちの野の聖、草むらや藪の王者だと思つてゐる。たとへ發狂して彼の臣下になるとはかりであつても、私はこの妙な愛郷心はすて得ない。がしかしかの男か枯野に立つてゐる間意氣地のない私は室内にゐて天を窺つてゐる。もうすこし風がやむだなら私も枯野の散歩に出て、今日もかの男に遠くから無心の挨拶をして來ようと思ひながら。

彼女は歸れり

（此の廣い都會に、その故郷を思つて胸を痛めてゐる人がそも／＼どの位住んでゐるか話しても嘘だと思ふだらう。三人に一人は屹度その古里を戀しがつて暮してゐる。暢氣な田舎に生れたものばかりがさうでなく、その子までが親の悲しみを受け繼いでゐる。然し三代目になると窮屈でも裏長屋にこせついで暮した方が利巧だと云ふ事を知るやうになる。）

とグスターフ、フレイセンはその小説の中の人物に云はしてゐる。

私はこの言葉は眞實で、又戰慄すべき古くからの事實である事を感じてゐる。都會の人は移住者が多く、私の知人の三人に一人、否三人に二人は地方人でその古い故郷を持つてゐる。戀しがらないまでも、故郷の事となると思はず膝をのり出してゐる。到底他人に傳へる事の出来ない野や山の芳ばしい醜態でも持つてゐるかのやうである。もしその故郷を誹謗したならば、彼等は態面を失つても故郷の感情を傷けられるのを望まずやたらむしやに不快がり腹を立ててしまふであらう。まるで自分の母を他人に持たれたやうな氣になるのだ。平常自分からけなしてゐても人に云はれるのは恐ろしい。痛ましい郷愁といふものは慘らしいくらゐ眞剣なものである。美しい

郷愁の空氣はキラ／＼して他人に呼吸吹きかけられる事を欲しない。人は郷愁の感情だけは純潔に死ぬまで持つてゐる。そして何か獸のやうな、神のやうな、山野のやうな一種の生氣ある盲目の守護の靈といふやうなものを持つてゐる氣がする。人の心の故郷は無邪氣な幼年期の姉妹で、幼年期を失ふに従つて故郷は美しい回顧の虹を水の中へ消してしまふ。殊に生活に苦しむてゐるものが唯一つの祕密に、寂寞と悲痛の郷愁を持つてゐて、それを刺されると怒つたり泣き出してしまつてもそれは無理とは思へなう。

さういふ私も子供の時に都會へ出て、自分の仲間から自分の故郷を糞味噌に云はれた事があつて、どうしても腹を立てる勇氣は出なかつたがそれを忘れる事が出来なかつた。私はぢつと忍びだ。そして又ある時は階級の違ふ同郷の一人の老人から、淋しい小川へ他人の知らない春の日や秋の日光に照らされて魚捕りに行つた事や草の話をされた時は思はずツツと泣き出してしまつた。名もない淋しい田舎でさへ故郷であれば私の爲めには唯一のものであつた。故郷を持たないフレイセンの所謂都會人の三代目の人は不幸にしてその感情を理解しない。理解しても眞身には感じられない。

都會の眞ん中を歩くと幼い下婢や小僧や學生がゐる。彼等の多くは地方人で都會へ出たばかりである。國は何處と聞けばきつと答へる。少しその地方を知つてゐれば、彼等はとびついて夢中

になる。理髪店や洋食屋の小僧や、物堅い家の下婢など、正直で涙もろく、郷愁で一杯になつてゐる。丸の内や日本橋を歩いて注意して見てゐると、かういふ少年少女が涙ぐみながら歩いてゐる。都會の疾風に吹きまくられてゐる。

少し都會化した女や男は故郷を恥ぢる。然し無邪氣な者は遠慮しない、同縣人とか、同郷人とかは身分や階級が違つても只の他人とは違ふ。大泥棒でも何でも、有名な人になると、子供までが同郷人たるを誇る。淋しい非精神的な人程故郷に強い。零落したり年老いてくると、輕子や乞食でも、自分の故郷を愛してやまない。甚だしいのは故郷の名を自分の綽名なづなにしてゐる。まして國訛りや、國の屋號を見ると、もう彼は離れない。牛は牛を見つて、玉蜀黍は玉蜀黍と並び、同郷人はやたらに決結し牽引されてしまふ。

私の生れたこの町は都會と五里とは離れてゐない。それでも私はよく京橋や日本橋を歩くと、いきなり橋の袂か、露次から駆け出して來た少女や少年に出逢ふ。彼等は奉公に來てゐるのである。町で只顔を知つてゐるだけの事であるが、彼等は涙をながして喜びながら、とびついて來ていろ／＼町の事をきくか又黙つてにこ／＼してゐる。心は泣いてゐるのだ。私は鎧橋で一度江戸橋で一度、銀座や麴町の方では度々あつた。ある時は見違へるばかりの娘に、或る時は悲し氣な老婆にさへ逢ふ、然し青年は氣まり悪がつて決して近よらない。

私のゐる町は有名でも何でも無い、人に話す程のものは何にもない。然し永年注意してゐると、家出した人や、他郷へ行つてしまつた者が、思ひ出したやうに歸つてくる。行く時はわからない、誰も注意もしてゐないが歸つてくるとよくわかる。この頃は他國の人が無數に入り込むで來て有數な工場市にならとしてゐるけれど、まだ土着の人の顔はわかる。以前から私の近所でもいろいゝろの人が町を捨てて行つてしまつた。表通りは殆ど一町にその過半は商賣も家も變つてしまつた。家邸を賣つたり、失敗したり、又不幸があつたりすると人は見えなくなる。他郷へ行つて生活するのである。然し新聞か何かで、出水の事や何かの事件は洩さず讀むでゐるに違ひない。殊に目立つのは、他郷でその半生を送つて、そこで結婚した妻をつれ、そこで生れた子供をつれて歸つて來た老人もあれば、無一文でその兄妹をたよつて歸つてくる放浪者めいた人のゐる事である。成功して歸つて來たといふ例は殆どこの町の人にはない。不思議である。多くは不如意になつて、疲れて歸つて來て、昔の人達に逢ひ昔の土地を見て間もなく死ぬ人や、又多くは落ぶれて見る影もなく歸つて來て、ひそかに遠慮勝に、人の手傳ひでもしながら死期を待つてゐる人が多い。かういふ人は、もう土着の人とは人から見られない。かへつて移住者が家主になり、露次の奥の古い住人になり、町を代表する氣で住むでゐるので、昔町を見捨てた哀れな歸郷者は、子供を相手に話すか、稀には錢湯や、祭りの日に、昔の知つてゐる人でも言葉をかけられるとふる

へ上つて、恐る／＼眼ばたきをしながら思はず述懐する。私はさういふ人をおかなり見た。又その妻がこの町の生れなので、その夫たる男がこの町で一生を終る事がある。しかしその男の生活は、凡てその男の故郷の型を持つて營まれてゐるし、その妻は町の昔の風俗を持つて争ひ、不思議な結合をしてゐるものもある。然しそれはよく／＼の事で、多く女は町を出たら歸らない。他郷できり／＼すのやうに死ぬのであらう。多くの町の人は、何處かへ旅行してその先で町の生れの女が、悲しい賣春婦になつてゐたとか、誰が貧しい商賣をしてゐたとかいつて話す事がある。そして女は多く貧しい人へ、もしくは下層の渦へ自然と沈むてしまふらしい。それを聞くと町で生れたものはすつかり淋しくされてしまふ。

又ある時はほんの一時、女が綺羅を張つて町へ歸つてくる事がある。春の燕のやうにかへつてくる。それは何か、彼女は港へ行つて洋妾になるとか、下婢に行つてある金持の妾になつたといふのが落で、いつも極く貧しい人々の娘である。然しある時期を過ぎると、貧しい女になつて、苦勞して歸つて來るとか、そのまま消息もなくなつてしまふのが多い。又普通に嫁入しても、きつと歸つて來る時は、夫に死なれて子を抱いた母親となつて來たり、まるで性質の變つた、生活も變つた、あさましい裏通りの肥つた女やおしやべりの女や、下賤の職人の妻となり、繼子を扱つたり、犬を抱いたりして、病的な暗い四十女になつて歸つて來てゐる。又若い娘達が折角歸つ

て來ても、家庭の事情で入水してしまつたり、死亡届も出さないで、もういつの間にか死んでしまつてゐるのや、遠い國から照會があつて、罪人になつてゐたり、又死人になつてゐる女が非常に多い。

又他から貰はれて來た子供でも、町に居付いてしまつて、他郷へかへしても逃げ歸つてくる子もあるし、兩親を慕つて滿洲の方へ一人で行く子もあるが、子供も兩親に離れたら、次にたよるのはその故郷だといふ事がしみじみわかる事がある。特に子供がその兩親も故郷も失つたら、どんな人間になつてしまふか想像がつかない。

然し多く故郷へかつて來るのは、獨立心のない苦しむだ弱々しい人達である。青年や壯年の人は眼立たない。然し年寄りや女はすつかりわかる。様子を見ても濡れてゐる。特に老いたる女になると見るのもひどい。娘や息子の處へかへるのさへ氣遅れがあるのに、子供のない老婆などが生れた家の、兄妹をたよつて歸つて來て、日陰で死んでしまふのや、老人が人相も變り果てて放浪者となつて南から歸つて來る。殊に不思議なのは、家出したり出奔した人が、悉く明るい南方へ行くのは特異である。町の人は多く、大阪へ臺灣へ九州の方へ行く。北海道や東京へ行く人は稀にしかない。

若い職人や、息子や、町の仲達は、悉くといつていい程皆家出したり歸つて來たりした。放蕩

息子はきつと歸る。不幸な者、淋しい弱い人はきつと歸る。今町にゐる人でも、さうして歸つて來た人はかなりある。恥しながら私もその一人である。従つて私には、以前よくさういふ人のみ眼についた事がある。私も三度出て三度歸つた。兩親と故郷があれば人はきつとかへる。そして私のその仲間には、精神の足りない哀れな男や、何者にもなれずに歸つて來た淋しい男が特に多い。ある生れながら人並でない白痴の男は、兩親も保護者も失つて餓死して、昔自分の家のあつた近くの露次に倒れてゐたといふ事實もあつた。

まつたく淋しく爲す所なくして歸つて來て、町にゐる人は妙に遠慮勝ちでわびしい。痛められでも嘲られても靜かに町の土と觸れあつてぢつと忍んでゐる。世の中にはかういふ人がどのくらゐあるだらう。思つただけで淋しい。それとは反對に又、他郷へ行つた人を待つ老いたる兩親や孤獨な妻もゐる。そして歸るのを祈つてゐる。秋になつたり冬がくると、かういふ人の話をよくきくやうになる。さうして、いつか、淋しい日によいかういふ人は歸つて來る。待たれてゐる所へ歸つて來るのは二つの不幸が一つの喜びになる。しかし待たれない所へ歸つて來た人は、二つの不幸が二つの悲しみになるのが運命である。町にはその待たれずして歸つて來た人が多い。そして強かつた人も淋しくなり、豊麗な性質も憂鬱になり、疑り深く、陰のある人となつてしまふのが多い。そしてかういふ人が、はつと氣がついて見ると、もう四十の坂を越してゐて、何を

するもの（もう遅い）といつてあきらめてしまふ。そのあきらめは思つてもぞつとする。しかし現實にはかなはない、人はどし／＼さういふ風にしてこの世から刈り倒されてしまふ。

私の知つてゐるある人は船乗りであつた。彼は若い時家出して船乗りになつた。そして町に残つてゐた彼の妻も死し、その娘も死むだ二十年後の今日になつて歸つて來た。もう老衰したのであつた。歸るのは遅かつた。彼はあまりに長く妻と娘を置き去りにしてゐた。そして當時の知人も殆どゐなくなつた今日町へかへつて來た。顔は海の日焦げ、片手は利かなくなつて、白い外國風の髯が生へてゐる、まるで町の人らしからぬ風采でかへつて來た。それでも町は彼にどんな魅力があるのだらう。彼は小さい家を建て、養女を貰つて、孤獨な身を町の裏道に隠して、駄菓子などを賣り初め、餘生を送る支度を初めた。よくパイプを口にして、子供を相手に海の話をしたり、ぢつと昔にかはらぬ往來を眺めてゐるのを見受ける。然し永年待つてゐた彼の妻や娘はもうゐない。淋しい彼には今故郷のこの町は死と生の港のやうに見えてゐるであらう。

又ある男は相應の家に生れた一人息子であつたが放蕩の果てに家出した。そして度々家から金を送つて貰つて方々を放浪してゐた。何をしてゐたかわからないが、人のよい偽かれ易い、意志の弱い男だつたので成功はしない。そして彼が窮しきつて家へ歸つて來た時はその両親は死んでゐた。家はすぐ崩れて彼はすぐ他人の世話にならねばならなかつた。彼はそれからすつかり昔の

身分も外聞も忘れて人の手傳やら小使の如きもの、或は雇はれて祭り日や何かあると町をかけ廻つてゐた。若旦那と云はれてゐた彼は人からよびつけにされるやうになつた。出入の鳶の息子は會社員で、以前の友達は皆町の有力者であつた。しかし彼は尻をはしをつて、をかし氣な風で、まるで極く貧しい藝人のやうな風をして歩いてゐた。そして子供と話をしたり、身にも欲にもつかぬ話をして日を消してゐた。冬になると彼は、思ひ出深い町を夜番にまで成り果てて、太鼓を叩いて歩いた。昔母親の懷で、寒い晩に眠り乍ら聞いた夜廻りの太鼓を、此度は多くの幼い者の爲めに、町の爲めに叩いて、凧と寒月の中を歩かなければならなくなつた。然し彼は罪のない弱弱しい人間であつた。町の寒い晩に、哀れな太鼓を叩いて夜警するその太鼓の音と少しも違はない。それを聞けば我々は涙ぐむのである。彼はもう年老いて來た。やがて死ぬであらう。魂はもう一歩先へ旅立つたやうに思へる。非常に優しく、あまりに弱々しい。彼を見ると一個の人間といふよりも、我々の心を吹きぬける土地の、草や樹や微風か、なつかしい昔の日の霧のやうなものを感ぜないわけに行かない。ここに何か祕密がある。口に出しては通じない哀愁が我々の背後に流れてゐる。我々はそれを感じてはゐるが、口に出す事が出來ないやうな、不思議に魅力ある過去の光線をチラ／＼と發見する。

かういふ人を私は二人も三人も見た。その中でも私は、昔見た一人の娘を覚えてゐる。彼女は

色の白い美しい娘であつたが、どういふものか白色人種そのままであつた。髪は赤く眼は心持青かつた。然し混血見でない事は確かだ、他の兄弟も皆顔は美しく色は白かつた。人は現今と違つて當時は彼女を「異人見たいだ」といつて喜ばなかつた。然し資産家であつたから彼女は立派に結婚した。然し夫たる人は事業の狼であつた。事業の爲めなら妻をも賣り兼ねまじき勢ひで、詐欺的行爲を續けたので間もなく彼女は離婚した。離婚してすぐ又彼女はある男に偽かれて町を出奔してしまつた。それを後に人から聞いた事であるが、何でも彼女は間もなくその男の爲に賣られてしまつた。彼女は肉體を賣つて生きてゐた。彼女を買つた遊廓の商賣人は、白色人種の娼妓として彼女を商つたといふ事である。大阪あたりの遊廓で彼女は白人の女になりすましてゐた。珍らしいので彼女に戯れてくる酔漢や放蕩者は限りなくつづいた。彼女は榮えた。然し眼の青い、色の白い草より罪のない彼女はその六年間であらゆる生血も智慧も亡ぼしてしまつた。彼女は年期がすむで遊廓を出た。その時は彼女を引取つてくれる一人の酔狂者もゐなかつたらしい。彼女は歩き出した。何をしてゐたかわからない。何を思つてゐたかわからない。彼女を惱ましてゐたものは最後まで郷愁であつたとも云へよう。これだけは彼女を純潔に動かしてゐた。彼女は故郷へ歸らうと思つたのか、それとも健全な判断は千切れてしまつて、無意識な風のままの何者かに導かれて、昔の町の方へ流れて來たのか、彼女の意志からか、自然の感動や攝動からか何と

もわからないが、一夜で汽車は着いてしまふ町へ、三ヶ月もかかつて辿りついた、彼女は歸つて來た。町へはいつた。

しかし彼女はもうその本性を持つてゐなかつた。昔のかの女ではなくなつてゐた。見知らぬ星か、幽玄な空氣を隔ててその能力を失ひつくし、いつともなく毀れ破れた魂であつた。然しその土地は知つてゐたか感じてゐた。父母や兄弟を思つてゐた。人は狂氣しても愛する人の顔は覺えてゐる。或は瀕死の人も愛する者がくると激感する。彼女は現實をぬけ出してゐた。ぼろ／＼になつてゐた。竹の杖を持つて所きは歩かず歩く放浪の影になつてゐた。乞食もしたかも知れない、盗みもしたかも知れない。一切現實の口は閉された。彼女は無言で歩いて來た。一つの衣をつけた執念に化してゐた。郷愁そのものになつてゐた。秋風になり、雲になり、鳥になり、注意力も羞耻も、判断をも失つた、未來の、無意識な、星の匂ひのする青ざめた肉體になつてゐた。彼女は追ひ立てられた。拘留された。恵まれたり施しを受けたりしたかも知れない。又蹴飛ばされたり、石を叩きつけられたかも知れない。雨にはびしよぬれになり、森にか、街道にか、道端にか、橋にか、何處で寝たかわからない。それを自分でも知らないらしい。彼女は塵埃をあびた。月光に照らされた。もし今の世に星に導かれるといふ事があるなら、彼女は南方から北極星ばかり見つめて歩いてゐたのであらう。寒い北の空の方へ、曲つたり左右へ流れたり、何んでも北へ

北へと来たのであらう。川へはいつたかも知れない。山や池や藪へはいつて傷ついたかも知れない。さういふ冷たい青ざめた地上の風光は彼女の足の下を流れた。日は出て落陽が彼女を照らしたのは幾度だか日の方でも忘れてしまつたであらう。犬も子供も彼女が通つて行くのを吠えたり罵つたかも知れない。然し彼女は知らなかつた。全く知らない。知つたら彼女は恐れて死むでしまつたか、泣き出して餓死してしまつたかも知れない。幸ひ彼女には一番卑しい人の本能が獨り残つてゐた。彼女は草を食べたかも知れない。路傍の草花の露を飲むだかも知れない。雁や椋鳥の行く方へ廻つて迷ひぬいたかも知れない。幸ひ路は續いてゐた。街道は彼女を乗せて流れてゐた。そして白く明るく、夏から秋になつてゐた。彼女は髪も衣物も風と埃にまかした。生きた樹のやうに、難船の木片のやうに、とう／＼いつの間にか町へはいつた。彼女は歸つて來た。どうして歸つて來たかも知れない。彼女は知らなかつた。足は傷き木の皮のやうになり、藪の髪の中から罪のない昔の面影の二つの眼があいてゐるのみで、眼の奥の精神はもう彼女を離れてゐた。しかしその肉體に昔の面影が部分として残つてゐる限り、魂の匂ひはこびりついてゐた。その最後の愛着の嗅覚が、昔の町と昔の家の近くを認めた。彼女は泣き出した。夜になつて這ふやうにして昔の家へ近づいた。

時間と變化とは何であるか、それは人を狂氣にし判断を失はしめる冷たい理法であらうか。彼

女は理解もしなかつた。ただ彼女は見た。其處には見知らぬ家が立つてゐたが彼女は中をのぞいた。何人がゐるかわからないが、彼女の父母や兄弟の聲がそこらしき事はない。又しないまでも彼女はどうかされなければならぬ。抱かれるとか、泣かれるとか、何とかしなければならぬ。彼女はそれだけを感じてゐただけ思はれるまで其家をのぞいた。

がそこには貧しい乍ら夫も子供もある一人の女房がゐた。女房は夕方の食卓を作つて灯の下に夫や子供を待つてゐた。女房はこの見知らぬ土地へ來て、その家庭を作つた。そして働いて家賃を拂ひ、地上と世の中の權利を持つてゐた。幸福たるべき愛と力を据ゑてゐた。然るに見知らぬ怪しい女が、窓の外からのしかかつて内をのぞいてゐるのを見て吃驚した。狂婦か乞食ともつかぬ恐ろしい形をして、又優しいやつれた衰れた眼をして、ぢつと幸福の灯火を見つめてゐる。女房は聲をあげて誰何した。

然し彼女には理解する事が出来なかつた。何故其處に父母の家と兄弟の聲がしないのか知る事が出来なかつた。時と變化は父母の家も兄弟達をも刈り倒し、彼女の意識すら奪つてしまつた。彼女には只朦朧たる過去の家が、夜の底から其處に輝いて建つてゐるとしか思へなかつた。

その家の女房は親切にも彼女の身の上を訊ねた。彼女を知つてゐるのは近所の年寄り一人であつた。年寄りは彼女の一家の滅亡や父母の死や、兄弟の離散した事を話した。そしておむすびを

彼女に恵むでやつた。

彼女にはその理由も變化も判断する能力がなくなつてゐた。只父母の家が失はれてゐる筈はない。地象のどこかの隅か陰に隠れてゐるとしか思へない。彼女はその附近を歩き廻つた。無意識に出る涙を流しながら夜通しうろついた。知つてゐる道も樹も墓場もあつた。家もあつた。然し人は悉く變化してゐた。

その夜は又元の家の前へ来て、親切な女房の家の戸に寄りかかつて眠つた。その又翌日も附近を歩いた。彼女を知つてゐるものは哀れに思つた。然し彼女は人を認める事も物を云ふ事も出来なかつた。彼女は人の家の残り物を貰つて生命をつないでゐた。そして元の家の前へ来てはさめざめと泣いた。その聲は知らぬ人を身ぶるひさせる力があつた。そのうちに彼女にも父母の死や、事實の悲惨な變化が少しづつわかつて來たらしい。

彼女は町の裏の、藪とも森ともつかぬ草叢に身を隠し初めた。町の灯はつく、蜻蛉はとぶ、夕雲は反映し水は流れた。彼女は藪の中に座つて一日暮してゐた。私はそこで彼女を見た。全然この世から先へ出た人のやうに、彼女は眼をあいてはゐるが、何も見てはゐないやうであつた。只時々思ひ出したやうに泣いてゐた。子供達は彼女を狂人の女乞食だと思つてゐるらしかつた。

彼女はそこから何を見て、何を感じてゐたかわからない。然し私は彼女を見た時さう思つた。彼女は歸つて來た。魂は歸つて來た。そして故郷も、見知らぬ土地も、空間の奥底では同じものである事を知つたらう。然も全然この世の人に交つて生きる能力を失つた彼女は、何の爲めに生きてゐるか。それは神祕である。強烈な何物かの力である。月夜が來る。秋の曉が來る。日がくるくる廻る。地球も廻る。然し人の生活から一步出れば、もう蝗や蟻やつぐ／＼法師と違ひはない。そこに物凄き静かな境地がある。彼女は意識と現實の空間の奥底へ没した。然し猶、彼女の過去の心の幻影は深い静かな沼の中で、どんな魂を見どんな感動をもつてゐるかわからない。彼女がぢつとして、草の中で、風と空氣にぼう／＼と燃やされ、日光に温まり露や深い夜の光に濡れてゐるのは、もう我々には見る事の出來ない一つの出來事である。

故郷よ。人間の肉片と神経に最後までこびりついてゐる記憶や愛情の紅い霧よ。それは永久のものであらうか、地上の小さい個人の最後の隠れ場だらうか。よし彼女は死むでも、彼女の心持は生きてゐるだらうか。彼女は戸外の影になつた。星や蒼空の情熱に導かれて、影も見えない遠い空間に達してしまつた。もう彼女をこの世の現實に引下す事は出來ない。故郷は戀しかつた。父母や兄弟や生れた家は慕はしかつた。彼女にはそれ以外に望むものはなかつた。が今はあらゆるものが亡びた。失はれた。光ある形象は消えた。星も失はれた。

かくして故郷に歸つて來たいろく／＼の人は、再びその古巢を見つけ出す事が出來ずに死んでしまふ。さうなると戸外の幽界の人となつて、草や藪の中で、その肉體の生氣が天地に還るまで踏しまつてゐなければならぬ。彼女は歩く、迷ひ出る。樹の枝や、蔓草や、路傍の草の陰に、少しでも昔の面影と記憶のある所へと行く。太陽は彼女を透明に印す。月光は心を映す。星は悲しみを色彩する。かくして彼女は、故郷と郷愁の奥にある、猶無情な、崇高な、一種の世界に達するのではあるまいか。

赤い夕雲に曼珠沙華が咲き狂ふ。青い瞳の花が青空から水に浮ぶ。河骨の黄や白い水玉の花が沼や水地に充ちてゐる。青い森の陰や神祕な水の影が、雲の世界や空間と時間の火花で明るい大きい天空を映す。萬物は地表に映つてゐる。キラ／＼する夜光や朦朧たる黄昏の色が、彼女をとりまいてゐる。あのボロ／＼な衣物や髪には、土と水の深い淋しい匂ひもするであらう。自然は無窮で、ある目に見えぬ風は彼女を運むて行く。もう我々にはそれが見えない

故郷を失へる人々よ。この世の面影から消えて行く淋しき人々よ。いつともなく心淋しくなり、この世を迷ひ出し、無心な草や虫の世界の陰にはいつて亡び行く人々よ。そこは何とも云へずさびしい。弱い魂を突飛ばされたやうに一步この世から出ると、故郷にかへつて來ても皆彼女のやうになつて消えて行く。行く先は深い光彩に充てる自然の時間の中心點へ。物凄き必然の天

の大機關部へ精靈のやうに迷ひ行く。と云つてもいいやうに彼女はいつの間か見えなくなつた。川へはいつたといふ人もあれば、又迷ひ出して行衛も知れないともいふ。大方川へはいつたらう。一度故郷にかへる者、失意の人、不幸なる人々は、この心持を知つてゐる。彼女の行衛を知つてゐる。私にも彼女の行先が少しわかるやうな氣がする。彼女は歸つた。故郷の奥底の、我々の更にふかい故郷へ星や雲を分けて、草の中から歸つて行つたのだと。

水中の春

大きい青々とした川が深く流れてゐる。兩岸には草が萌え初めて温い蒼色した枯草の中から緑色の小さい手を出し、空は濡れたやうに紺碧に煙つて暖い水蒸氣が浮んでゐる雲の縁を淡紅色に染めてゐる。その雲の塊が川に映つたのを見ると川の水が静かに動いてゐるのが解る。もし人が此處に来て、遠い小さい雲雀や細い麥の芽や早春の空と水を見て、夢のやうな一生に一度は人々が見る事の出来る、昔も今も變化のない懐しい景色だと思ふなら、その人はもうこの景色が持つ暖かい早春の光景となつてゐるのである。遠くにつづく榛の森、畑の檜の木、卯木の枝などが、うす赤く興奮して風のない甘い川の空氣に思はず青い芽を出さうとして腕いてゐる。耕された土は深い雪の匂ひや、赤い勢ひのよい草の莖なぞ現はしてその濃い鶯色の肌を空に觸れようとする。あらゆる冬の騒々しい反抗力は消えてしまつて、日に日に天と地が愛情に夢中にならうとするやうに優しい若々しい眠りを催し乍ら近よつてくる。大地からは甘美な熱が湧かうとする。空からは光が雨のやうに降る。川は大きい母のやうにその囁きや酔心地につれて静かに流れてゐる。崩れた岸や曲つた突先の地を、この上ない柔かさしなやかさをもつて廻る。それを見てゐ

ると美しいものに含まれた静かさ穩かさは、川の生命の姿であるやうに思はれる。夏の洪水や冬の兩岸の氷も、決して川が年をとつたり意地悪くなつたのではなく、春の若々しい姿にかへる爲に、いろ／＼の苦しい働きをしてゐたやうな氣がする。何しろ春が来る度に、川や草や野や空は常世の光明から恵まれて自然に唄を唄つて進行する。人が努力し夢を見また死ぬ時でなくては聞かれないやうな永遠の面影を唄ふ。さうして何事もないやうに日常の色の中を静かに流れて來るのである。

水の深さ明るさは別である。水は光のままに流れるままに純粹な新らしい性質にかへる。酌めば別なものになる。亂れば何にでもなる。太陽はこの水を好んで一日その姿を映し乍ら通行するのである。水に映る日は何物にも觸れない新鮮の美を持つてゐる。水には波もない濁りもない、光がそつと水に忍びこんで澄ますのである。時と静かさが近よつて光のする仕事を眺めてゐる。太陽は其處へ黄金色の光輪を映すのである。草の緑や花に與へようとする色素の極く強い影を水に置いてその反映を樂しむのである。英雄が門出の兜を映すやうに、太陽はこれから仕事を始める盛装を試るのである。水はそれを感じる。そして酔心地になつて時の潮に乗り乍ら、地球と共に廻るやうに流れるのである。その水の深みに今小魚や岸の草も嘗て見た事もないものが沈んでゐる。それは若い娘の屍である。昨夜暗い水の魅力に引込まれたものと見える。然し夜が明け

て太陽は水の中まで照らしてゐるのをもう娘は知らない。心が弱つて深い夜の色に欺かれたのである。かういふ楽しい酔心地な太陽と水を見たなら娘は死ななかつたらうと思はれる。然し今は全く死んでゐるから、其の本性が望んでゐた光の岸へ浮んだと思ふかも知れない。見てゐても苦し氣な悔んでゐる處は見えない。樂し氣である。死はどんなに人を恐がらせようと思つてもこの光と酔心地の中にあつては無駄である。

「やあ、女が流れてゐるよ。」岸の小家の子供が見つつけて叫んだ。子供は鳩が浮いてゐる程にも内心では驚いてゐなかつたのも不思議である。

「何だ、何がゐるつて。」筏の上にもた男がやつて來た。小家から老人と貧し氣な女房もつれ立つてそろり／＼と歩いて來た。皆實に靜かな樂し相な足どりで近よつて來た。

水中の娘は硝子玉の中に氷つた人形のやうに小さく見える。まるで雲母の中に浮んでゐるやうに、平常一人で靜かに梯子段を上るやうな形をしてゐる。髪と肩が水を含んで水面へ出てゐる。近よると水の色が濃くなつて下の方は暗綠色に消えてゐる。飛び込む時傷ついたものか、膝を縛つた足が少し曲つて、暗い青い焰を持つた水底に白い足袋が透き通つて見える。髪は高島田に結つたのが崩れてゐる。横顔と襟足が白くこの世にないやうな光を含んでゐる。顔は美しい、水中を見つめてゐるやうである。黒い絹に青と紫との蝶がついてゐる羽織を着てゐる。着物には淺

黄と暗紅色の縞が見える。半襟は藤色をしてゐる。屍らしい色は見えない。悲惨な處も見えない。樂々と死んだ様子である。只水が深かつた故か金茶色の水藻のやうな芥がその髪と皮膚のうぶ毛の上にうすくついてゐる。水は流れるけれど娘は動かない。浮んだまま足が地についてゐると見える。手は見えないがそんなに深い處ではなく岸から六七間の中流である。

「おーい、橋ンとこへ行つておまはりさん呼んで來い。」老人が手をあげて子供にいつた。

「まあ、きれいな娘だねえ、十七位かしら、可哀相に、今が盛りなのに死ななくつてもよささうなもんねえ、お嫁に行くのが否だとか何とかいふんだらうよ。若い内は無分別だからね。一圖に思ひつめたんだよ。」

女房は感心したやうに、娘の衣裳をうらやましさうに眺めてゐた。

子供は馳け出して行つた。岸を鳶がとぶやうに、黒く小さくなつて家のある橋の方へどん／＼と駆けて行く。筏の上にもた男と岸に立つてゐる老人と女房が黙つて見てゐた。老人の眼は天を見てゐた。女房は水中の娘をまたたきもせず見てゐた。筏の上の男は何にも云はずに茫然と水中を見てゐた。水中には蝶のやうに、破れた花のやうに、冷い娘の屍が明るい大氣を透して靜止してゐた。

太陽は金色にキラ／＼と水中の娘を照らした。神祕な作り物でも見るやうに又川の精を呼び醒

すやうに。然し天地はシンとしてゐた。何の不思議も奇蹟も現はさなかつた。遙か川下の方の川船の帆や向う岸の畑にゐる百姓は美しい日の下に働いてゐた。老人は自分達三人しか知らない娘の死屍を見るに堪へなかつた。そしてそろ／＼と歩き出した。女房は一人喋舌つてゐたが、筏の上の男は馬鹿か啞か一言も云はなかつた。只手を安めてぢつと水面を見てゐた彼は田舎で育つて娘に何の縁故もない青年であつたのだ。

二十分ばかりすると子供が歸つて來た。巡査と人夫が來た。そして娘を引上げて戸板へ乗せて何處かへ運んで行つてしまつた。

「町の人だらう。」と老人が云つた。「親達はどんなだらう。」

「ああ、罪なものを見てしまつた。」女房が云つた。「もう運んで行つてしまつたよ。おまへさん何を見てゐるのさ。」

「ははあ。」筏の上の青年は吃驚して一寸と笑つた。それから黙つて又筏の上をわたり乍ら向うの方へ行つてしまつた。

水は静まり太陽は照り輝いた。静かな夢のやうな空氣が戻つて來た。それを見てゐると娘の一生が思ひ出されるやうであつた。世には一の性格がある。この世ならぬ弱々しい透明な、現實の空氣に罕なる性質がある。譬へば一人の赤んぼが生れる。赤んぼは弱くて發育しない。五つ六つ

になつても母親の懷にのみ抱きついてゐる。彼女は脾弱でその靈ばかりが生活してゐるやうに見える。口をきかない物をこはがる。いつも病氣をしてゐる。子供を見ても遊ばないで大人の話や母親の心配相な顔をぢつと見てゐる。眼ばかり深い。この子は若死するだらうと誰も彼も思ふ。妙に賢く知るまじき事を理解する。彼女は外へ出ない。暗をこはがる。幸福な脆い空氣のやうに平和な日南や灯火の下や母親の傍にゐる。家の變事を感じ易い。人の事でも傷けられるやうに恐れる。彼女は段々大きくなるとやつと一人でゐるやうになる。黙つて人の氣のつかぬやうな處に靜かにしてゐるのが好きである。おわたが飛ぶ夕方や苔の花が咲く日陰を楽しんでゐる。「この子は陰氣で大人のやうで何をしても面白がらない。」と両親は不服を云ふが、彼女は涙をうかめて家の隅にぢつとしてゐる。大きくなつても彼女は實用に適さない。十五六になつて初めて子供のやうな氣になるが、肉體は美しく娘らしくなつて人の眼につき易い。花のやうに單純である。虹や雨や月夜のやうに、彼女は消え易い美しい瞬間の運命を持つてゐるやうに見える。凡てが微温的で消極的でこの世で生活しようといふ何等の要求も持つてゐない。かうして天死するのである。幸ひ結婚近くなると彼女は驚いて水死をする。水は彼女の性質と一致してゐる。水晶のやうに透明な早春の花である。彼女はこの世の空氣に堪へぬものを持つて生れて來た。そして死んでしまふと初めて元素へ歸つたやうに調和するのである。ごく昔風のやうでもあり又新らしい珍らし

い事だと人は思ふ。然しこれはあり得る性質である。樹木のやうに生れてくるのである。彼女は極く奥深い家庭に生れてくる。人と接する事の少ない、風に當り日に當る事のない家庭を撰む。そこで彼女は眞白な肉體を日陰と衣物で包んでしまふ。彼女の顔や手足は白すぎて青や紫の靜動脈がすぎ透るやうに見える。唇も齒も人の言葉の觸れる事のない異様な神祕な色を帯びてゐる。家庭は暗く彼女には教育がない。然し常人に見る事の出来ない空氣がある。貧しい家庭にあつては彼女は白痴である。彼女は幸ひ上流に生れて一日日の光にも人にも觸れずにすむのでその靜かな柔かな空氣が彼女を導く。彼女は木の葉がそよといふ程も物も考へはしないのだ。そして物を恐れ物に弱く疲れ易く、傷けられ易く、何かの些細な動機でも彼女は死ぬやうな目に逢ふのである。

彼女の精神はやや妖性を帯びてゐる。白い紙のやうに無である。彼女は鋭いものを持つてゐない。全體が柔かさと弱さと脆さと空氣のやうな無情を持つてゐるのである。彼女は結婚の出来ないものを含んでゐる。彼女は白猫や人形や靜かな意味もないものにはしか觸れる情を持つてゐない。戀は恐怖である。死である。人はさういふ娘を見た事がないだらうか。それ程極端でなくともかういふ外見の美しい日陰の弱々しい娘はゐる。そして精神のないやうに見える程無心で無垢で、彼の水のやうに川の優しいやうに死の美しいやうに、月光色のものと、つめたいこの世なら

ぬ空氣を持つてゐる、淋しい女の性。

彼女は水であつた。醒めた光であつた。雪であつた。そして月夜の色であつた。滴つた自然の無垢な精であつた。我々は死んだ美しい子供や冷淡な弱々しい娘を思ふ時、彼女の生存してゐた事を嘘のやうに思ふが、實際は彼女が死と調和を得てゐる事を感じる事は出来るのだ。

野外手帖

——相模を歩き廻つて——

○風は歩く者を祝ふ。

○どこにでもより鮮かな日光がまきちらされてゐるといふ事は散歩する者にとつて一つの美しい信仰である。

○野原は色のついた夢と、生命が生み落すきれいな空想を拾ふ場所。

○野原はいつばいにあふれた空氣の波濤が、匂ひよい若者の肉體を季節で染める所。

○冬の野原は老いたるヨブの尊い破れた衣の引ずられたあと。

○路傍に落ちてゐる村の破れた傘は、野原から來た狂人の骨か。

○十一月の焚火。これほど静かな、聖い、自然の壁畫はない。

○電線工夫は、野天の太陽を群がった輕業師。

○蜻蛉がしづかにシャツの腕にとまると、そのまゝ海軍の徽章になる。

○白い山菊が萎れると、紫の房になる。それは二重の花の生活。

○ゲイオリンの音は街道からやつて來たものであるが、笛は村からやつて來た。しかも木深い、よい水のある、又明るい月夜の照る。

○十一月(インデアン・サンマア)の明るい眺めは、春と秋とそして冬の、大氣の三色旗をもつ。

○太平洋の海の風も、相模の谷の影へくると日本の草花に恰度よい程度の微風になる。

○あかるい谷ほど、白い木棉が出来る。

○十一月に天然咲きの龍膽をもつてゐる谷こそ、わたし達の夢見る死の床にふさはしい。

○野天で食事をする。風と空氣の甘さまで食べてしまつてまだ鳥のやうに青い食物を戀しがる。

○せきれいも藁の上にとまると鳩になる。

○十一月の眞晝の木笛、これほど氣輕な、人のよい、落葉と路との音樂はない。

○平和な十一月のあたゝかい田舎の空。白い月と赤い日と紫や藍色やもも色の渦をまいてゐながら、はつきりとは見えぬ青天の遊星、ほのかな銀の天の川。

○十一月の田舎の山、なんと明るい、なんとさびしい、なんと老いたる、地味な、思ひもつかぬ炎をもつて、ふしぎな老人の高い額のやうにかがやいてゐるだらう。

○田舎路で、うしろをふりかへつた事のある人は、いかに日常の色もないわれ／＼の日々そのものさへなつかしい、二度とないきれいな感情によつて紡がれてゐた事を、ふと思ひ出すであらう。

○どんなに激しく顔を擦られても、それが花なら決して顔に痛みはのこらない。

○田舎家の門口の棒は、冬になると石よりも白くて堅い。

○田舎の女の子は、たとへザンギリにされても、決して太陽の娘でなくなるといふことはない。

○百姓の女が藁の上にとろがつてゐる。恰度太陽の椅子の真下で。

○黄と樺色の木の葉をつつて本をつくれ。十一月の日といふ表題をつけて。

○白の音は十一月の明るい晴天の雷だ。

○食は静かな白、街道といふ絨氈のごく端にゐるところの。

○谷間に於ける散歩者の會話は、青空と風でつくられた絨氈によつて聞きとるより方法はない。

○谷間の百姓家。それは信仰をもつた貧しい女の座像。

○熱と光は青空と空の娘、そして散歩者にとつての帽子と外套。

○粗服、古靴、太い杖、荒い顔、その貧乏な散歩者にとつて、何といふ風や花や水のおかるさ、優しさ。

○田舎女は戸外へ出ると木棉の帽子をかむる。純白な光をもつた手拭といふ安價で、なつかしい日用品の。

○名もない山の木々が紅葉する。黄と紅の掛肩をして、前垂れに花をいっぱい持った田舎女の友

達のやうに。

○木樵は木の解剖學者。木の血や呼吸を手際よく調整させたところの。

○午後の青空は、美しい、姉娘、その妹の美を遠くから見る眼のやうに。

○谷の家は西方を拜む佛教信徒のやうに。

○谷の影の石佛。泥と青空で出来た寺の中の。

○晝、青竹を伐る音、もつとも新しい、もつとも月の世界にひびくやうな、憂々といふ音。

○われ／＼にも霜ばむ葉や、山がらをよぶ小枝が興へられてゐたら、もつと美しい祝祭的な行列がつくれるものを。

○谷陰の、十一月の松蟲草。淡い夕の女。

○路に金泥色がすくなくなると、その谷も険しくなるしるしだ。

○紫の葉の花。谷の空氣の線でかいた花柱。

○紅葉は金屬的である。木が礦物の世界へ反映したやうに。

○谷は日の回み、夕暮の壁。その谷の夕風ほど、ほのかなものはない。

○十一月の夕風。情愛の終り、心とつめたい自然とが一步のところと別れてゆく。

○冬の日も、日光をあびて暮らすものにとつては、自分自身の身の影より長い。

○谷の上の冬の畑、うす赤い泥のテーブル。

○鎌と鍬、嵐に對する百姓の足と手。

○落葉と枯草の谷を歩く足は、青空と山にとつての美しい簪木。

○十一月の夕の畑で、黄色い菊の束を車につみあげてゐるその人達の眼は花のランプでわれ／＼よりも明るい。

○黒い薫香、それは谷陰の杉の密林。

○左手は本をもつ手だ。しかし又花の束を累々と持つて歩く手でもあるのだ。

○龍膽は紫の火室。天へ向いて風の中の。

○自然を研究しようとして、山や野を歩き廻り、やつと何かわかつたかと思ふと、もうその人の人生そのものへも、霧や夕暮がしづかにたちこめて來るであらう。

○地球ほど色を染めかへるものはない。山づたひに一日高いところを歩いてゐると、人は七色から二十色に至る光と陰の、風と空氣から出來た偶像になる。

○外套は野を歩くものの風の幕であるが、手袋は山をかきわけけるものの強い熊手のやうだ。

○村とは、自然の永い営みに對して、いかにしばしの又情ぶかい、あたたかい露營地ぞ。

○土に伏して書け。ほんとに村と山と藪の、あらゆる不思議をかくには。

○永遠無窮といふ事はいかにつまらない事であるか、我々はそれを感じても、それを見、かつ實験する事の出來ない悲しみの強さに、大きい山々や谷々の遠眺も、それを一瞬にちぢめて、やつとかの大敵に對する。瞬間の勝利、無情に對するわれ／＼のさびしい愛。

○谷の上の村人の墓。月の近くの、夜の友の、さらに眼に見えなくなるほど明るい靈の高みの。

○夕とは、よく働いてよく疲れた、貧しい小農夫の眼のいろ。(二二九、一一、二〇)

忘れ得ぬ南方植物

太陽が夏至をすぎる。喜びをもつたおしやれな夏の季節がやつてくる。さかんな水々しい扇をひらいたやうに自然がうつくしくなる。かうなると野原や村をとびはねて詩をつくつてゐる吾々小さな野蠻人は、いつも緯度が十度もちがふ南方の植物がたまらなく戀しくなる。

牛乳をふきかけたやうな星座の下で、すつきりとした美人のやうに立つてゐる檳榔樹。あのすずやかな、きれいな線と空中の青いまつ直な等木。吾々がかう高貴な思想を科學的にならべたやうな感じがする。風がこの生きた線の建物をどんなに清らかに吹きたてるか、熱い色のついた感情を颯々として吹きさましてくれるか。

臺北の植物園にある紫檀の木、私はあの中を病める鶯のやうにさまよひ歩いたことを忘れない。白いリンネルの服に漏れる日の光、竹とも柳の葉ともつかない紫檀の葉が、やはらかい隈をとつて戦いでゐる。その刺戟的な、しかも清らかな空氣、へんに古風な色合と茂り工合、私は暑い日中いつもそこへ高音で囀る小鳥を聞きに行つた。それから香十里にひろがるといふ月橋、黄やも色の深い大峽竹。空を煽いでゐる黄色い三丈もある扇芭蕉、刺と花のある花麒麟、龍骨

木、青珊瑚、白いユッカ、五色の赤蝶の花、棕櫚竹と紅竹の雨のふるむらがり、赤いネクタイビンの實る海紅葦。空中ばかり裝飾する空想家の椰子、セイロン棕櫚。それと百人をいれるくらゐの茂りの天幕をはつて、熱い赤い大地にうづくまつてゐる榕樹。私は臺灣にゐる中、こゝほどへんに引つけられ魅入れられたやうになつてさまよつた所はない。植物園は私にとつて星辰的な友情をかんじさせてくれたものだ。

八重山群島と琉球の諸島をとびあるいてゐたときは、何といつても蒲葵（たがやさんの列）阿且の葉つば、龍舌蘭の葱いろの丘や蘇鐵の花ざかりで酔つたやうに甘い岬の風致であつた。それに琉球の田舎家に咲いてゐる番紅蘭。黃胡蝶、ゆふなぎの花、街にある想思樹の木蔭、石垣に咲く聖瑞花、セイロン辨慶草、路傍の赤い午時花、うす黄の野綿、葉までまつ赤な赤梯梧の花、愛らしい琉球尾類（遊女）のやうな茉莉花など。植物を愛しながら、星座表と經緯度をはかつてとびあるくと、植物の分布や發生の軌道によつて、南日本にひろがつてゐる自然の美くしい情熱がどんなにあかるく楽しく花やかに、さびしい私たちを色どつてくれるか。

いつも私の中の空想の風景にあらはれてくるのはあの萬壽果の、青い乳房のやうな實をぶらぶらさしてゐる姿だ。古い首里の都の街はずれの土塀の上に、又は絲滿女が素裸同然で大きい魚を頭へかせて駆けてくる黄いろい街道、蛇皮線をひく辻の尾類たちのゐる二階の眺め、支那船と山

原船とが、あふ那覇の港の南風である。夏がくると私たち北方にゐるものは北方のすずしいろいろの花や木のなかになら、より雲のある、風のある、熱風のなうつくしい植物を夢見なくなる。さうして南方人の音楽や泡酒、古酒紅酒、又は情蛇、颶風といふものまで引くるめて歩いたり夢見たり物思ふ心をいろどるために、ああいふ植物といふ静かな精神、又は空気の刺繍、色と光の陰面白い背景があつたならばと想像して楽しむのだ。(十三年五月)

颶風王

この夏こそ四五年以來計畫してゐる「海の詩集」を、どこか南方の無人島へでもいつてかきあげようといふロマンチックな考へから、私は五月から七月まで琉球三十六島を漂流的にさまよつた。奄美群島の大島では昇曙夢氏の生れたといふ僻村を見たり、那覇では古琉球の研究者伊波普猷氏にあつて、埋もれたる日本の詩歌のすばらしい古典「八重山神歌」を教へられたり、八重山列島へついでからは、石垣島測候所長で日本で只一人の暴風研究者岩崎卓爾氏にあつて、氣流や海流やいろ／＼な自然科學について教へられた。その岩崎氏こそ私の航海中に、もつとも(忘れ得ぬ人々)の一人となつた。

私は氏の仕事に對して尊敬と愛情とをかんじ、私の仕事についての教示や暗示を期待して石垣島の四箇へ上陸すると、一目散に氏を訪問した。そしてたつた一日のうちにお互の年齢や職業の差別を忘れて、二人とも小さい自然といふ小學校の生徒のやうになつて、感情も見方もびつたりと一致するほど親しくしゃべつたり論争した。私は氏に教へられ喜ばれて、ともに島を歩きまはり、昆蟲や植物についてまで實地について教示されて來た。

氏はもう二十年もこの島で、中央氣象臺から自ら好むで派遣され、年々日本を襲ふ颶風や颱風（臺灣から來るといふ意味の琉球風）を見張つてゐる。日本人はこの暴風研究者が石垣島にあるかぎり、どんな颶風もいちはやく豫知する事が出来るやうな氣がする。日本本土から七百哩の南方、北緯二十三度、東經百二十四度の地點で、南東呂宋からマニラ、カロリン群島の方をにらむで、自記風壓計やら潮流檢定機をすゑ、世界でも有名なこの南太平洋と東支那海との間の暴風の本場にその仕事の椅子を置いて、屈せぬ精神と、老いてますます鋭くなつた「風の眼」をもつて日夜研究に餘念がない。

氏がさうして愛する家族をも本土の仙臺にのこし、單身二十餘年もこのマニラ熱と颶風の本場へ來て、官職を忘れてその仕事のために一身を捧げてゐるといふ事は、われ／＼にも一種の勇壯な涙を感じさせないではおかない。私は突然氏を訪ね、すでに十年の知己でもあるやうに話したり感じあふ事の出来る喜びをもつて、氏の磊落な、單純な、さういふ學究的な態度を見るといつさう力づけられ、サブライムな感情にさへ打たれて、ます／＼氏を好くやうになり尊敬するやうな心持が昂まつて來た。氏はここから八重山十四島の海面や天空を見張つて、いそいそ忠告したり教へたりするので、群島の漁夫や船員からは八重山王とよばれてゐるが、私は氏のブロスベロ

とは反對な、光明的な感情をもつた日本颱風王とよぶに憚らない。

氏は石垣島で特殊な螢を發見し、松村博士はそれを、「はさきほたる」(Pyrococlia Iwasaki) (Mitsui) と命名した。氏は又この島の詩人的感情の唯一の持主で、島の自然美をしゃべりだしたら一寸私もそれ以上半分の美的形容詞さへつけ加へる事が出来ないほど確かで、氏の著書「ひるぎの葉」には島の民謡童謡風俗奇習傳説まですつかりあつめられてある。私は遠慮なく八重山おもしろや傳説や自然の景觀について、思つた事を吐露し、珊瑚礁岩や大龍舌蘭の蔭で、支那茶をすすり實芭蕉を頬ばつて、青いほど上等な大氣の中でしゃべりあふ事が出來た。氏は第一にこの島の空氣は確かに日本一といつてもいいほど瓏玲として清純だといふ事から、海の色について、又は暴風中の風色について、人魚（海馬）やベリカン鳥のくる、常夏の理想郷である事や、島の乙女は日本大古の曲玉の首飾りをしてゐる事から、島の山原船が第七八世紀頃にはもう既に印度と貿易し、赤道直下から南太平洋を乗廻つてゐた事や、波照間島の大自然兒「オヤケ、アカハチ」の話をしてくれたり、とても盡きる事のない興味を私にあひせかけ、島の乙女の首飾と、むかし女護ヶ島といはれた與那國島の象形文字やら、古代の船下しの歌のうつしやいろ／＼なものを贈られた。

氏は島の昆蟲、海棲動物、倩蛇の標本について、又世界一の稱ある與那の國蛾（石垣島より西

方六十哩、與那國島特産)や、漁撈についての話をしてから植物について説明してくれた。私が氏と此島で見た植物は、朱蕉、黄金合歡、野綿、蕃柘榴、岩垂草、蕃茄子、大葉シルギ(紅樹科)長春花、クワヂ芋、紅花、大たにわたり、蒲葵、福樹、想思樹、榕樹などで、最後に高い觀測臺にのぼつて、二人ともかん／＼や北方にある太陽に頭を直射され、島と海とを展望し、まるで物語の繪にあるやうな態度で、眞晝の星について方位の感覺について、天色と海色について、それから颯風についての氏の經驗談を、實地に指すやうに話されるのを、私は全く宇宙の遊覧客のやうにはれ／＼と聞く事が出来た。

氏はいふ――

「たいがいの暴風雨で、本土を見舞ふ奴はきつとちらりと此の島へ顔だけ見せるよ。何しろここは世界で有名な暴風の通路といつていい。いつも低氣壓といふ奴が幽靈のやうに臺灣沖から南東の方をさまよつてゐるし、いきなり姿をあらはして船を毀すし始末におへない。今は一年中で一番平穩な夏至の氣節風がそよ／＼してゐて島は何とも云はれず、はれやかに美しい。この南西の風が秋には北東へ廻り貿易風となつて北海の鷹の群を運むで来る。この邊の漁夫は今の氣節風の發送によつて八九月の暴風を豫知する法を知つてゐるね。あのあたりではいつも難破船が出来るが島では寅の方の海鳴りで風の方位を豫知するしどうも巽と寅の方は禁物だね。乾隆三十六年の

大海嘯には海潮がすつかり乾いて、青や赤や緑や紫、熱帯色の色も眩ゆい大小の魚族、珊瑚樹(マドレボラ屬)の蟠つてゐる根株に、島の女子供が遊びに行かれたが、この未曾有の奇觀を樂しむでゐるうちに反動が来て、浪は三十八丈、二度目が二十八丈ぐらゐの奴が島を洗つて十四ヶ村を亡ぼし、溺死者が九千四百人、この島がまるでつぶれてしまつたのだ。見たまへあの青い福樹に蔽はれてゐる廢村を。

その後は只恐ろしいのは颯風だ。明治三十年十一月の奴には風力計を破壊されたし、三十九年十月二十日から二十五日へかけての颯風には日本測候事業が始まつて以來の氣壓の下降で驚かされ、大正三年と九年の奴には百五十米突も吹かれてすつかり青くなつてしまつた。島の漁家の建築を見給へ、柱を多くして南東の風をよけるやうに、丸く葺いてある。あれでいざとなるで網をかけるのだよ。この表に線がすつかり降下してゐるところが「暴風眼」といふ奴で、一時間四十分ぐらゐ平穩でゐてその吹きかへしがこれだ。風が互にやる。その間のそよもしない平穩な時が恐ろしいのだ。其によつて又次の風の強弱がわかるからね。全く風は生物だ。宇宙の肺臓さ。世間では僕が暴風をなくしてしまふ事を考へてゐるといふがとて／＼。標識瓶を流して海流をしらべたり、各地の測候の記録をよむで見つて、とてもこの颯風といふ奴はとめる事は出来ない。只見て、豫感して注意するだけだ。いざ来たとなるとお客様のやうに、所員一同が素裸にな

つて働く、シャツ一枚でもつけてゐたら、吹きとばされてしまふほどつよい。是非その光景を一つ見てゆきたまへ。」氏は元氣よく話す。

私は琉球本土のチャンバ岬沖で、既に一箇月前に、小さい奴に見舞はれ、難破の覺悟まできめて、黄色い波濤のうねりと、灰色の煙のやうな雲にまかれて流された事があるので、この島の風とマラリヤの蚊はもう充分見ないでも想像された。

「向うに見える西表島などはその風色のよい事、南島第一といつてもよい。有名な石の屏風の唄があり古見船の出来た古い美しい島だが、マラリヤで全島が廢滅してしまつた。この石垣島でも天保年間から思ふと五千人も人がへつてしまつて、だんだん亡びてゆく様子をしてゐる。それは全く此方では大きい事業が成立しないからだ。海流もわるいし、風がよくないので、あたり南方の寶の島もこの通りさ。」しかし結局こんな美しい島が草木や魚蟲鳥のためにのみ存在して、人類に災禍を與へるといふ事も面白いと思ひます。」

「さう、人間的功利的に見なければこんなよい所はない。恐ろしいといふのは只の人間的な利己的な感情さ。宇宙の精神にはそんなものはない、いつも清朗で無朽であんなにまで美しい。それを思ふと全く涙が出る。」

「先生はさういふ意味での信仰をお持ちですか。」

「もつてゐるよ。只畏怖の二字だ。大平和、大静寂、その中にこそ神はあらう。しかもそれが颯風となり大海嘯となつたからとて、われ／＼がどうする事が出来よう。」

「さうです。」私は感動して、「凡ての美は言語以上にもつと高氣壓めいた發情をもつてゐるやうです。」

「さう、おぼろ氣にわかるところをもつてすればだ。」

氏はさういつて、又急に島の地理や、碧燦色にかがやいてゐる沖の島々や、海の話をはじめた。私はこの日を記念するだけでも、氏が日本の颯風によつてその仕事を見出されてゐるやうに、私も私の「海の詩集」を完成し、南太平洋のために、古い日本の、新しい波濤の歴史をかくために、やがて來るべき「太平洋時代」に備へようと決心し、私の詩集が出来た日には必ずこの日本の颯風王にデヂケートしようと思ひ立つた。

氏は私のその亂暴な、がらにもない壯圖に、友人がもつ同情をもつて賛同してくれ、そして根強い科學者の態度で、いろ／＼細慮をもつて船や漁撈や、日本南方の將來についてその海流や風から出發しての豫想を話してくれた。そして私は氏の背後についで、

「自然から見た日本、海から見た日本、新しい日本について」私はもつと／＼氏と語るために、眩惑しながら觀測臺を降りた。(大正十一年九月)

道路について

1

道路といふものはいつも私をかなり神経質にする日常の大きい問題だ。どんな日でも殆ど外出しない事のない私にとつては、路はその日の気分を清めたり明るくしてくる密接な友達である。私は路上にでて初めて私そのものを日光のもとに認識する。大きく云へば世界を展望し、その日の風と雲と日の光を思ふままに受用する。風の吹きぐあひ日のあたり加減、四季のいろやかな明暗を観察しながら、知らず知らず路上の詩人となり住人になる。路は詩人にとつての母だ、街道をゆくもの、漂流するものにとつてもさうであるやうに、私のやうな用のない時でも路上をさまよふ者にとつては、路ほどうれしかったのしい場所はない。そこはほんとうに世界への出発点である。

家をでるともう路は歩行するにつれて刻々とかはる。近所の人がちら／＼してゐるかと思ふと見知らぬ人々がやつてくる。路が曲り角になつて初めて風の方位がわかり、時間によつてなり又雨につけ曇りにつけあたりの風物の色が變化する。木立、垣、家並、田圃、畑、川、藪がでて來

てその時間、その晴れ曇りの特殊な色調をひらいてくれる。寧ろ世界へ向つて路は展かれ、自由な濃い空気が氣ままに流れてゐる。私たちはそこへでて初めて個人としての感情を解放される。家とか地位とか家族とかにわずらはされ勝ちであつた心が、のびのびとおのが影を楽しみ、一人の運命のぐるりを眺め、その日の吉凶をうすうす發見する。路上にでたら一時でもよいから凡てを忘れるがよい。感覺も感情もさらりと風に洗濯させるがよい。それから改めてその日の自分をとりのどし、用事のある人は用事を遂行するがよいし、その日の仕事にかかつてどこへなりと進むがよい。路上にあつていつも己れを解放してゐるのはただ古くから散歩する者だけである。人はその自由な四肢と精神の解放される散歩を昔から愛してゐる。何らの理由も心もない人々ですら、犬をつれたり小兒をつれて歩いてゐる。歩くことが歩くことをたのしませる。さういふ時に路は生きたパノラマであり長い遊園地である。庭もまたない貧しい人でも路上にあれば路の王であり主人である。彼は兩の手に自由をもち、心を大きくふくらまして新らしく呼吸する。風と時とが描く光の模様を鑑賞する。まして喜びのある人、悲しみのある人、愁ひのある人にも、路はおとなしくしつとりしてゐる。人はさまざまの心と、さまざまの意味を踏むである。早く、遅く、自由に、逃げるやうに、追いつくやうにある。そしてそれはまた悲劇とも喜劇とも名のつけられない境地にゐることであつて、その人の自由の姿と運命のやうに神秘なものに導かれてゐる。

る。故に路は自由の友である神秘の入口であるといつても差支へがない事になる。かれは私たちをたのしめ喜ばしめる自然への静かな階段であり、また世界を心のままに交通せしめる天然のあかるい川であるとも云へる。

2

といふことはホイットマンの「大道の歌」以來誰にも感じられる筈の、それが抽象的にも現実的にも通ずるあかるい事實である。しかし東京の近くにゐる私たちにとつて、この頃の路はかなりに神経と靴とを苦しめる刑場に等しくなつて来たといふことを、私は私と同じ苦しみを見てゐる人々に訴へたいのだ。

私たち都會のまはりにゐる者は、もう何十年となく味もそつ氣もない迷惑な道路に惱まされて来た。震災後の東京は又この騒ぎで何年苦しむ事であらう。私たちは又この先それを見なければならず、徒らに外國模倣の新道路にいちめられるのだ。今は日本の道路地獄である。私たちと時代を同じうするものは誰れも彼も遂に「善き日本の路」の建設を見ずして死んでしまふであらう。情ない事である。さびしい事である。そして私たちは郊外の霜どけ路とあたらしい面白くもをかしくもない悪い路で、車輪にかけられた犬のやうに斃死しなければならぬのだらうか。

やむなく路といへば私たちは昔の路をさがして、それを慕ひ愛するより路に對する方法がない。有難いことに世はまだ古い美しい路を市の悪技師どもに興へ惜しむでゐる。工費の不足から昔のままに放擲されてゐる路が澤山ある。私たちはあきらめてその古い日本の國道、縣道、里道、村道、廢道、舊道を愛するにとどめよう。私に時と金があるなら日本のその古い街道を隈なく歩いて見たい、とても進んで街道のへんな美學や力學を説くこともならず、又所謂私たちにはその實設問題に口は入れられないのだから——私はそんな悲しみを抱いて毎日歩いてゐる。歩けば私は空想家だ。そんな功利的な改築不平論をさらりと忘れてしまつて、どんなつまらない村道にゐても、その路の影ゆるやかな興味に浸つて、私自身の感情と夢とを思ふが儘に遊ばせさせよふ事が出来る。私は目をふさいで停車場附近、新住宅附近を通りぬける。そして半日なり二三時間なり舊道や村道をおるき廻るのがたのしみである。幸ひ東京の西方や南方にはるい／＼たる樹があり丘があり畑がある。目黒の奥、千住の果て、大宮附近、又は横濱の西方もよい。さらに神奈川、埼玉、千葉の三縣には、十年歩いて歩ききれないよい路が、花の蔓のやうに澤山捲きついてゐる。私たちは一生どうやらそこで樂しめるであらう。そして時々遠い旅をした折には他國の名のある古い街道を見て歩かうと思つてゐる。友よ、東京は震災であくまで道路に苦しむがいい。私たちは當分村の路で辛棒しよう。又精神からいつても、それが身に相應してゐるといふことが、

私たちを安らかに歩ましめる唯一の慰めであるから。

昨日、私は友だちと多摩川のほとりを歩きながら、今まで気にもしなかつた一つの路をふと發見して喜びあつた。

それは砂利舟を川上に曳きあぐるために自然に出來た「曳き船の路」である。何といふ隠れた愛らしい路であらう。うね／＼と見え隠れに川とならむで盡きることなくつゞいてゐる、そこは二人と肩をならべては歩けないのだ。若いものの繪にあるやうに、一人の男が長い綱を身にまきつけて、ながい春秋の日をゆる／＼と船を曳きのぼる路である。いつもシャツ一枚にはだしのまゝ黙々として歩む生業の路である。誰か涙なくしてこの隠れた淋しい路を慕つて歩けよう。そこは旅行者も歩かない漂流者もあるかない、ただ一人の砂の砂利掘りときり／＼すや蝸や蛇のあるく路である。路といふ路ではなく、いつも芒や葭や茅雜草におひかぶされ、誰の眼にもそんな路があるとは氣がつかない路である。

友達と私ははだしになつて長いことその路を歩いた。多摩川の北岸にはこの路が七八哩もつづいてゐる。そこで私たちはあたらしい川の眺めをほしいままに貪ることが出來た。川を見ること

は一つの自然の路を見る事である。川は決して人工のまゝには流れはしない。水は自然の力をよろこび、人工にそむいて川自身の路を歩くからである。川こそその地形にとつての眞の路である。悪く掘つた川は死ぬ。よく掘られた川は生きてゐる。この頃の直線一點張りの耕地整理の川が少しも流れず、曲りくねつて埋かけてゐる昔の百姓たちの川があふれるやうに流れてゐるのを見てもわからう。川は一本調子の整理を喜ばない。川は自然の屈折と曲りくねりによつて勢ひづく、路もその通りである。新道路の一直線にあつては、どんな辛棒づよい旅行者でも散歩者でもあきてしまふであらう。現に私たちは耕地整理の直線的な路には弱つてゐる。川も路も實際にはかり就くものでなく、人も只に便利と實利にのみ就くものでない。どんなに不經濟な廻りくどいやうな昔の路でも、今いふ川の理に基づいて出來てゐる。その土地を流れる川と共に、その山や丘や畑について路は流れてゐる。さう正しく田舎路は流れてゐるのである。自然の風物に押されて流れてゐる。すこしも自然に逆らふ事なく優しくたのしく出來あがつてゐる。それに引かへ新道路は實利一點張である。天然にさからひ村にさからつてそれを遂行してゐる。私達はそれを目のあたりに見て村々を歩いた。この特殊な「曳き船の路」から眺めると實にそれがよくわかる。私たちは路の歴史を考へ生命を云々して歩いた。今の設計者の頭から見れば實に不自然きはまるやうなこの狭い薊の路も、川の生業者川の理の展望者から見れば全く自然である。足は傷つき衣

は野ばらにからまれ、石の路をよぢ胸まで芒に没して歩きながらも決して川に逆はうとはしない。そして幅一呎ばかり、兩の足が、やつと相互にかはるくらゐの尺度をもつて、うね／＼とつづき、笹の中、芒、葎、砂の上といへどもはつきりとして路の印象がついてゐる。何といふ不自然の自然、忍耐ぶかい平和な路であらう。路にはそれだけの困難と勞苦があつてその生命をつづけてゐるのである。そして自然の風致と一致し必要と永久の忍耐とをもつて成立つものでなくて何であらう。

もう一つは海岸の路と山道とを見ればさらによくわかるであらう。

古い街道、そのほか小さい里道にしたところで、必ず山道は谿川について出来あがつてゐる。高みから低いところへ水の落ちる理をとつて、曲りくねりながら姿おもしろくその長い帯をつけてゐる。山道のおもしろさはそこにある。千仞の巖壁をめぐつて谿川を見おろし、一座の山を堂々めぐりして次の山腹へ出る。いかな悪技師も山を穿つて例の直線の意志を貫かうとはしない。路は氣ながく山の姿に並び谿に從つて通ぜられる。海岸もさうである。突出した岬をめぐり回める灣をめぐつて路がついてゐる。まゝ鑿道を造りトンネルが出来てゐるものの、路は所詮自然に

勝たれない事を承認してかゝつてゐる。然るに村の路、平地となると技師どもは只直線一點張の暴威を振ふ。距離が短く經費が安いといふ一點であたら古い村を新らしく裂き割ることを何とも思つてはゐない。凡てが鐵道的、自動車的で、この東西の狭い、中央に山脈のある日本を、只車道としてのみ考へ、歩道として、風流の致として、日本特有の風致を配して愛することを忘れてゐる。鐵道は疾走のものであるから、どんな山中、又は村、谿、平地をも瞬間に駆けぬけるのもよからう。そして今まで街道で見る事の出来なかつた山腹や深林を展望し俯瞰して、新らしき風景の切斷面を發見せしめるであらう。車窓の眺めについては全く歩行の眺めと別種のものであるから暫くあづからう。私は今又局部的ではあるが懐かしい村の路について歸へらねばならぬ。

路を愛する者にとつては、その路が古いといふ事が大きい深い美の要素になる。どの筋に日出が見出され、どのあたりを月が航海するかといふことと、路それ自らの自然の苔をよろこび、路が描く品格と風致を目的にして歩くのだ。路は風韻そのものである。いかなる墨畫筆蹟よりも青々として天然圖の氣凜があつて、しかも漠々として彩管も及ばぬ朝暮の燦光の中に没してゐる路は四季に彩られた自然の形象文字である。文物のすすまなかつた祖先時代からの長い苦勞と必要

とにせまられて、いろ／＼の人々に昔から踏み馴らされた足跡の連続である。かれ等は村をつくり都へ通ひ、路にひたとその精神をつけて生活して来た。路は生の舞臺であり港であつた。車馬を通じて郡を造り縣を境して他國と交融した。山を裂き川を渉り丘をめぐつて、木を切り草を拂ひ一條の帯を地に描いた。そして天然の命令にしたがつて幾度とない變遷に處した。最初の路は山に崩され河底に没した事もあらう。次の路は洪水と風とによつて原野に埋もれたのであらう。それにも屈せず自然に必要と忍耐とによつて踏み馴された處が路となつた。人は路に従つて村を劃り家を建てた。そして人はその郷里の歴史と傳説のなかに幾世紀も埋もれてゐるうちに路は長い春秋の風雨につれ夜と晝のめぐり廻りにつれ、深く寂びしく、しかも根強い自然の練磨をうけて来た。雨にも霧にも消え失せる事のない辛棒を経て、花の開く人の門口から、山をのぼつて雲のなかまでつづく、長い善き地の線を保存して来たのだ。

まつたく古い美しい路の影は何にたとへよう。うね／＼と村から村へつづくこの陸の航路の深い寂びやうは何と説明しよう。古い村々の路のすずやかな心易さ、のんびりとし深閑としたのしさ、春夏の色のおもしろさ、遠慮もない人目もないあぢきないくらゐの伸々しさ、どうにもかうにも仕様のないやうなふしぎなをかしさ。路を愛する者にとつてそのつまらなさ味氣などが一つの古い愛らしい風情になる。田舎の古い路の有難さは例の直線でない事である。曲るとも

うねるともなく自然と趣きを變へて、先へ行く人の影は木立にかくれ思はず角の一里塚から馬なぞが現はれたかと思ふと、古い寺の夜の木があかるく燃えてゐたり、白い障子の家がよいほどつづき、また藪となり畑となり田圃の眺めとなる。一つの村を越すと次の村の趣きがいかに、楽しみであるか。寺と社と木立をもつて次ぎ／＼に現はれて来る村が、路に添つて、あらゆる生活の風景をも陳列し眉のほとりにせまつてくる。そして舊道の楽しみは、より濃き四季の風物を愛翫する事が出来ることである。裏に入り横に曲つて一つの村のもつとも深いあたりをぬける。私たちはほんとの四季の花暦がひらかれてゐるのを、露と匂のまま受取ることが出来る。古今のうつり變り、事物の新舊の趣き、生活と自然との密接な暗示の働きを眺める。女たちや動物たちの音楽をきく、天然の科學と藝術の意飾を學ぶ。むかしの日本人は生涯かかる路をゆく自然の旅行を愛した。かれ等は人生を解放して思ふがままに寂しき自然の慈愛を求めた。かかる路は世を厭ふ者の詩となり宗教となつた。ほんとうに出来る事なら私もかかる旅行の歩行者となつて後半生を風と雲の中に没してしまひたいと願つたこともあつた。そこにはまだまだ冬の時雨、春の花、夏の白雨、秋の夕映があり、そして旅行者にとつてのさらに哀情の松明をつくす古い鐘の音と日没がある。

と云へば月並の文句で、私もお他分にもれぬ都會兒の田舎論を説く一人にすぎないかも知れない。そして田舎者の、百姓の、ほんとうに孤獨な人々が、秋の鳥のやうに寂然としてその路をゆく心を理解する事の出来ない一人かも知らない。然し幸ひにして私は私と心を同じうする友達を三四もつてゐる。そしていつも三月と十一月の田舎あるきをする事にきめてゐる。

その歩行のたのしみは、私の冬と夏との勞苦から甦らせてくれるのに十分だ。町にくすぶつてゐる私たちは、いつもそこから今更に新鮮なものを汲むでくる。名所をたづねるのでなく歴史を求めたでもなく、ただ古いよい路を選むで彷徨ふのである。時には路のない山懐に入る畑をよぎり雑木林をくぐつて、名も知らぬ村々をめぐつてくる。相模の東南、東京の西部、或は中山道近くまで歩く事もあるし、近くの一村をめぐつて日を暮らしてしまふ事もある。暑い日にも出てゆく、寒い時にも又ゆく、しかし理想的なのは十一月と三月の歩行である。三月はみづ木の花に始まり、まだ見ぬ春が淡々とながれてゐるし、十一月のよい日には夏と秋と冬の三期にわたる景色が感じられる。五月の春と夏との間の時はいつも遠く旅行する事に限られてゐるが、三月と十一月は普段着のままふらりと出られる場合に限られてゐる。その不用意に歩きだして思はず遠

路をしてしまつた時ほどうれしい事はない。十一月の山菊と龍膽の花ざかり、五月の淡い瓜の花ざかり、三月の名もない木の花ざかり。さう思つただけでも古いよい路が目の前にうかんでくる。かと思ふとこの連中で又舊の横濱の山手のあるく事もあるし、東京の古い場末を歩いた事もあつた。そしていつもそれは古い落つた影のある静かな路に限られてゐる。全く路は古いほどよく自然の情愛がしみでてゐるからだ。

そんな風に私は極く舊弊の眼で路を觀、かつ批判する。そしていらしなから新郊外の路や改築中の道路をながめてゐる。全く今の道路設計は言語道斷だ。都市の水の美、街路の放射線、店舗と大洋館の配合といふ事にかけては大きなことはいへないが、一寸した小さい路、防風林、草地、垣、池、村と小さな町との配合、さらい局部に限つて私はあくまで舊道保存主義をとる。それは毎日の歩行の一步々々に直接神経を苛立たせるからだ。文化村もいやだ。埋立もいやだ。今の郊外の路は残忍極まる人の庭をつきぬける思がしてゐる。かくしていつになつたら直接我が家の軒からよい路上に出られるやうになるだらうか。それとも私のやうな古い日本の路の好きなきな者は、いよ／＼電車の便もない山深くの路へ追放されてしまふ運命だらうか。私は今の路を憎む。そして古い村の路を小兒のやうに戀してゐる。(十二年十一月)

世相見聞記の一節

人の戸口程無氣味なものはない。いかに親しい家の戸口でも人を無氣味な不安な感じにする。戸口はいろ／＼の人間の腹や吐き出した空気に浮動してゐるとしか思はれない。長屋の格子でも、玄關構への門でも、店でも、何となく強い人臭と暗の味がこびりついてゐる。戸口は盗人や戀人や掛乞や強請人でないとも、恐ろしい不安な危懼疑ひの瀬戸際だ。勝手口には風俗や境遇上の親しみがあるのでそれ程でもないが、戸や格子や門は恐ろしい他人の因果と宿命へ足を入れる第一歩だ。しかし門や垣はその人を幻に見せないが、雨戸や硝子障子はその人の氣を直接に見るやうで異様な感じがする。自分の家でさへ深夜や白晝ふと氣がついて見ると、自分の汚れを見るやうに奇怪な寂漠を見る事が出来る。まして白い眼のやうな深夜から曉へかけての戸口の雨戸はいやな深い光が出てゐる。

戸口へ平氣で立つものは乞食と門賣のみだ。それも戸口に來て初めて新米だか馴れた者だかがわかる。その舉動や注意力に、戸口は奇怪な想像作用を及ぼすのだ。盗人が戸口では小蟲のやうに意氣地なくなり、強盜も殺人者も戸口を一步出ると、普通の人間の状態にかへる。戸口を恐れ

ないものは狂人か泥酔者で、戸口に立つてゐればいかに胡麻化さうとしてもその家の人であるかないかが直ぐわかる。人の戸口に立つてゐれば怪しまれる。戸口はその家の構造にもよるが、その家の主人の肉體の感じをあらはしてゐる。同じ用件で人を訪ねても、金談、親遊、争鬭、秘密の心持によつて訪ねる人の戸口が、さまざまの幻影、想像、邪氣、妄想で自分乍ら異様な感じを與へられる。少し注意して見ると、その心持の裏に、人性の魔氣と、現實によつて亂れた人の宿命と境遇が、物質の働きによつて観取される。

空家はさらにいけない。まるで人の骸の中へ氣を忍ばせるやうな思ひがする。同居人を訪ねるのも、留守の家へ行くのも、皆戸口がそれ／＼の不快と無氣味さを持つて人を刺さうとするやうに思へる。それを氣にしない人は自分の意志さへわからぬ人だ。少し自分の心持や感じに眼があいてくると、人の戸口から、人の意志へ足を踏み入れる事が、どんな氣持であるかよくわかる。開いた戸口は間抜けさと無氣味な感じを示し、閉ぢた戸口は秘密と奇怪な想像が、唇を動かし聲を吞むでゐる。全く友人の家でも、高貴な人や下等な人の戸口でも、戸口といふものは人を平靜な感じにしないといふのは不思議だ。どんな夢中でも、戸口を出入した事は知つてゐる。又どんな人でもその家の戸口へ始めて來た時の感じは覚えてゐる。これは平常の印象や心理作用が家や戸や垣にまで幻影となつて擴がり、その人を想像せずしてその家を訪ねられないと同じ理由で、

その人になれる心持が、直接戸口で露骨な姿を見せるから、人は自分を其處で検査し、その感じをあまり喜ばないし、又意識にふれるので、平静な観察が出来なくなる理由だ。

全く戸口には魔がある。氣がある。あらゆる善悪が行き通ひ、人間の戦慄や怪氣が迷つてゐる。軒と戸口には何となく方位や地靈や異象が現はれる。どこの國でも魔物や咒術や占ひは戸口を重大な呼吸器のやうに取扱ふ。そして凡ての幸不幸が其處から出入する。一日注意してゐると、戸口を通過するものの思ひが、その家の運命にどんな交渉をしかけるかを見たら、どんな人でも棘然としないものはあるまい。まして送り火、迎ひ火、節分の日本の戸口の祭は、何か家庭と大自然との交渉を清めるやうに、鹽を盛つたり火を焚く、飾り、軒提灯もさうかも知れない。考へると戸口は貴重な人間生活の口で、日月や、雨や嵐の中に、古さと眠りの門をなしてゐる。戸口をはひると初めてほつとする。そして家族や自分の身がはつきりする。實際の戸口は心や自然の戸口以上に恐ろしいものである。私はこの戸口で引きかへしたり、又立聞きしたり、まご／＼する度に、いつも無氣味に感じる故か、その家の中より、主人の心持より、その戸口といふものが一番恐ろしい感じがするのだ。

「月に吠える」を讀んで後

どうも僕には批評といふ事が出来ない——といふのは藝術の高い度量計か比重計といったやうな、ふかい標準が、どうも時代とも、近世的なものとも、一般とも異つてゐるやうで、人のものを批判する權威もなければ定見もない。いやむしろいつでもあくのぬけない自分の好き厭ひで、それがいつさうはげしく亂されてゐる。

しかしむづかしい議論のわからない僕でも、蝸牛や甲虫が持つてゐると同じやうな、妙な觸角は持つてゐる。であるから悪いとは思ひながら、人の詩集を頂いても、その觸角で二三度チクタクとあたつて見てから、縁のあるものとなないものとすぐ見分けてしまふ。誠に困つた事であるが仕方がない。今のところより多作をしようとする僕は、いち／＼世界の詩壇の歴史や傳統と比較研究して、その作品を忠實に評價するなんて事は思ひもよらないのだ。

それに實をいふと、僕はまだ詩の初心者で、當時定評のあつたこの「月に吠える」を知らなかつた。室生氏の「愛の詩集」あたりから、初めてシンに詩をよみ出したり、身にしみて感ずるやうになつたので、この再版を頂いてから讀んで見ると、前に雑誌で讀んでゐた萩原氏の詩の印象

が、逆に映つて来た形である。それもよい。かまはず読んで見ると、僕の觸角は妙にびりりとふるへた。室生氏のものを読んだときは又別な、同じ冷徹した字句をもつてゐるやうで、これは又少し病ひの「所謂清純の凄さ」と云はうか、奇異な竹の味のやうな、冬の世界と又一種冷めたいなかにある春のあたらしい霧がある。一體僕は感じの鋭くない、生き／＼した本能のないものは大嫌ひだが——この中には僕にとつてまるで未知な異常な切れ味がある。これは驚きだ。

本来僕は健康性のない、人に快適な、發散するやうな、生新と、清らかな味のないものは嫌ひなのだが、この作者の病的——といふ感じの中には、妙にきたなきがない。生温さがない。どこかムンクの初期の作品に見る「青さ」がある。するどい、趣味性と神韻がある。僕はそこに水禽のもつ冷い美しさと、細緻な昆蟲などがやきと、大へん上品な貴公子の神經圖譜を發見する。

これは僕とは反對側の、高貴な、陰影的な世界の人だ——と先づ思ふ。同じ月光を扱つても佐藤春夫氏とは又異ふ。その色感、感情などが妙に老いて又妙に若い。そして生理的にふしぎな恐怖を帯びてチカ／＼生きてゐる。あの生理的な生きた感じ——それが萩原君の根本から氣質と一致した自然性である。つまり感情そのもののシンから根ざした藝術感で、一番大切な、一番人の胸にひびく、只一つのを萩原君は清い鐘の音のやうに人にひびかす天稟をもつてゐるといふ

事だ。思想といひ感情といひ何といつても、この「匂ひ響き」のない人はいい藝術家ではない。今の詩壇にはこの匂ひ響きをもつてゐる人は、萩原、千家、室生——の三人ぐらゐではあるまいかといふ事を常に感じてゐる僕は、ここで萩原君の初期の、やや氣取つた、多少表現の金屬的な作のなかから、その匂ひと響きを嗅ぎいだす。

とはいふものの僕には、あの病氣と、あの腐つた「腰から下に草が生へ」とか、蛤から手が出るといふやうな感覚は氣味がわるい、どうもいけない。この頃の明るい「閑雅な食欲」とか「新しい慾情」の中の、すばらしい幽雅な冥想風のものを見せられて、それに身をふるはせてゐる僕は、又萩原君のもつ肉感に決して嫌ひでない。一體どんなものでも萩原君の手にかかると一種の陰影にうたれ、透明なぐりぬぎにされた精巧な幽愁を帯びる。萩原は天成の陰影と月光の作家で、夜の色や水の感じがその思想の中まで沁みてゐる。只むしろそのありのままで一致してゐる表現が恐ろしくうまい。とても敵はない。萩原君ので褒めても褒めたりないのはあの匂ひと情緒との氣稟と、それから二拍子揃つた陰影の透明な表現力であらう。

匂ひといつても萩原君のは「有明」の、又は深夜の、幽艶なもので、それが發散的でなく、沁みるやうな、ひびくやうな匂ひだ。それにつれて色感も皆うすい月光につらぬかれてゐる。萩原君には大へんな觸感や情緒のよりこのみ、ぬきさしがあつて、黄金でも少し輝しがなければいけ

ないし、鮮紅色でも、白晝の自然色でもが悉く、萩原君の内部から来た色の影を帯びてゐなければ承知が出来ない。あすこが又好きなものにはすばらしくよい。それに野蠻性はなし、雑漠な描寫がなし、議論がなし、詩句が皆生きて一つになつて、思想も形もあらゆるものがその情緒の音樂性に統一されてゐるところが心地がよい。萩原君ほどその音樂性の言葉のうまい人はない。リズム論はさておいて、詩がその清純な發想法によつて、あらゆる分析や批判を超えてゐるのが、何よりうつくしい。

僕はこの「月に吠える」を何といつてよいか今言葉を知らない。只萩原君の第一詩集として五年後の今日でも、恐るべきものとして讀む事の出来る魅力に驚く。そして萩原君の思想風に洗練された匂ひや色や音樂に身をふるはせる。その點で僕は萩原君の第一の讀者だ。僕は同君の新作が待ち遠しくつてたまらい。恰度ルドンの白と黒との清らかなマツペを見たいやうに——さうだ。萩原君はルドンの「月下地上をさまよふ巡禮」とか「人獸天を狙ふ」とか「新らしき妖怪」とか「或夜神祕なる瞳の天に現はるるを我見たり」といふ畫に似てゐるといつても失神ではあるまい。ルドンには僕は驚嘆してゐる。萩原君には敬服してゐる。多田君のいふ意味の新秘主義からいつても、僕の共鳴しないではゐられない、深い、星座のやうな、陰と光との奇蹟を見るやうな、ふしぎな藝術感がそこにあふれてゐる。

それに古典味のない古雅なもの、新鮮な近代的な教養とが、うつくしい智慧といつしよにつきまといつてゐるし、いふに云はれぬ複雑さを、單一にすつきりと表現する點で川路君とは又違つた一歩鋭いものを持つてゐるし、萩原君ぐらゐ恐怖の圈内にぢつと蜘蛛のやうにとまつて詩の世界を見つめてゐる人はない。あれは外見ではない。きつと肚から藝術と一生とを劍にかける人の態度だ。「新らしき慾情」をよんでも、そのニイチエ式な表現法の他に、實に得も云はれぬ魅力がある。あれが恐ろしい。さういふ點で僕はもつと書いて見たいと思つてゐる。(十一年)

座談

(もとよりえ、こひいき、獨り合點と繁屋落多くあるべけれど、こころ易く氣にもとめぬ風にて過とよみ流されたし)

* この頃は詩の批評も、詩そのものもむづかしくて、やかましすぎますね。かういふ時代にはよほど心をしづめてよまないといひ詩を見のがしてしまひます。何故詩を深めることに専念しないでへんに解釋することが流行るのでせう。詩は愛さなければ死んでしまふものです。

* 「青猫」と「忘春詩集」いい詩集ですね。時代がどんな背景をもつてゐようと、しづかに親しみ得る、又おのづと魅力をかんど得るものは、五年や十年たつたところで忘れません。表面の年代に衰亡するものと、内部の非時間的な感情に強くふれるものとは、自づと違ひます。

* 常に誰しもがもう一步ですね。圓滿具足といふことが一生のうちにあるものでせうか。

* もう一步、もう一步、常にそれを感じ、そしていつも失望してゐます。そして一生あがき通す僕は、全くどんな悪い多作家、亂作家といふ汚名をのこすでせうか。しかしそんな名が何でせう。只常にもう一步、もう一步!

* 自由に、思ふがままに、そして時代や仲間の約束をはなれたいものですね。ほんとうに心から

自由に生れて來た詩は自分自身の信仰のやうな氣がします。

* 皆誰もかれもへんに幽鬱ですね。物思ひにか、或は時代にか、或は理智にか、思想にか煩はされがちですね。腹の底はもつと野蠻でエゴイズムがあるのでせうか。

* 地方の詩の雑誌はめざましいものですね。皆一步を初めそして進むで來てゐます。そして皆よく「詩についての教養」が行きわたり、時代思想につれてゐますね。珍らしく馬鹿な、のんきな又へんに狂つたといふのはありませんね。

* へんに狂つてもダメの詩は困りものですね。反抗と淫猥と變調とを看板にされてはたまりません。思想を藝術に移さうとは罪悪です。一人はまあよいとしても百人のダメイストはたまりません。

* プロ派といふものは大變な宣傳黨ですね。しかしどういふ作があるのでせうか、一體誰がその派の巨頭でせうか、何だか大勢して一つの發明品を市場で賣るやうな騒ぎですね。

* 僕はどつちかと言つたら平和を愛する男です。生活上にはプロ的行爲も思想も交つてゐますがもつとやさしい、もつとあかるい、もつと自由に平等に生きられる方法をとりたいと思ひます。

* 破壊するのが能ではなく、建設するのが目的ですよ。ちと口幅つたくなりますが、まづ自分を建て、からそれから社會云々ですね。批評もさうです。一切が切實に同感され得るまでにはその

訓練と夢想が基礎です。

* どこか内部に人を發情させない詩は詩ではありませんね。情緒と自然とが靈活に運轉してはじめて詩としてのハツミや弾力がついてこそ、言葉が一つの生き物となつて、人をいつの間にか魅入らすのでせう。いい詩人は何よりもこの藝術的な魅力にあふれてゐますね。

* この頃は支那の詩が好きになりました。支那の詩にはすつかりその生活と精神なりが、詩としての絶對と神韻にむかつて旅行してゐるやうなところがありますね（つまり全我的に詩に魅惑され、熟しきつてゐて、春情とか秋艶とか大自然を背景にして詩の王國的生存を極彩色にひろげてゐます。そしてその大きい深い一致が、民族とか歴史とかいふものから、一つの理想郷へ向つて直線に飛行してゐるぢやありませんか。

* 詩には思想も理想もいらない——感情さへあれば、現實生活そのままに、或は情緒の音楽さへあればよい——といふ考へは一つの陥穽ではありますまいか。現實を直寫すれば、又情緒の運動をあらはせば足りるといふものではありませんね。人間本能の最高部の活動はその感情が智慧となり思惟となつて、一つの靈の探求に向ふ——つまり發見と探求のない詩は舊い世界の詩です。（しかし詩が宗教となり社會思想となる時には、靈の詩的活動が變色する時です）

* つかむ、生かす、發情する、魅惑する、迷亂させる、暗示にかける——それが主觀藝術の大切

なところですね。まるで自然力そのもののやうに、平凡にうみつかれた胸へ、この上ないふしぎな靈的活動の反射を射込む術を會得する事です。

僕にはある一種の幻影、幻想は生理的に不愉快です。どんなに價值ある實狀態であつても、新らしい呼吸、日の光、靈の氣温、風のやうな快い熱情、喜びの力、ふしぎな色と愛との世界。さういふ味のない、腐つた實感をもとる汚物や思想は感じて我慢が出来ません。深刻張りの寫實呼りや、へんな肉感や、又混亂した無理を強ひる青白い腥い幻想曲癖、あのうまさとりすまし方はたまりませんよ。

* 人生の深刻、苦悶、狂氣、貧窮、冥想などといふものは問題としては好ましいか知りませんが、その實靈魂にとつてどのくらゐ價值のあるものか不可解ですね。人生はそれほど樂天的でなく功利的でもないといふ事は、百も知してゐますが、その感情の氣凛と精神の發光力のないものは受け入れたくありませんよ（苦痛が靈魂を清めるといふのは宗教で、藝術では喜びが清めるのです。従つて喜びを保持するといふ事ほど、この世でむづかしいことはありません）

* 悲壯の讚美——いつまでたつても崇高な新烈な思想、莊嚴な感情、神韻のある性格といつたものはいいですね。（感覺は革命されてもです）そのふかい、いつもわからない靈感の流れあひ、それは病的であらうと變態であらうと又それが自然の明快、健康、戰闘をもつてゐれば猶

更、(天下はその自然から送り來された愛らしい息子ですね。)

かうお思ひになりませんか。自然といふものの深淵、陰影、暗黒といふものは、人生のそれらにもまさつて冷く恐ろしく又無情であるといふ事を、さまよへる氷島人のやうにいろ／＼と感じ試み、その感情的性格の一面に洗禮を受けて來た者にとつては、最早普通人の深刻、苦悶、社會の慘忍といふやうな種類の個別の宿命や境遇の苦しい表現には馬耳東風になり易いといふ事を。その點で僕は一般社會苦と運命苦にさいなまれるのを賣物にする眞劍論者や弱者には同情出來ませぬよ。僕はさんざ海と山と野をさまよつて來ました。それから社會をも。ですから(汝もし汝の運命境遇に不満ならば、何故に一切をすてて山谷と荒野へ走らざる——といふ事を主張してゐます。僕は乞食しても藝術の信仰はすてたくありませんね。)

* 人生はしかく苦しい、不如意、不満、不平にみちてゐるでせう。果して暴力革命でそれが改造されますか。社會なんて正面の建物が何でせう。個人のなかには鬼がゐます。何故その靈魂の窓から追ひ出す事を先にしませんか、そして窓に青空をむかへ、自然の四季の飾り、風の自由をまつて、絶對の戦闘と平和との美しい個性を自ら創造しようと思はないのですか。

* かるが故に藝術は尊い氣がします。その苦痛、哀惜の上に立つて、百花照りまざる感情の花のかがやき、精神の自然圖の展望をひらいて、古代から未來へ飛行するこの上ない善良で辛棒づよ

い宗徒です。その一員である事が僕には社會改造家であるよりも自身に名譽なのです。

* 非時代的であること、潮流にのりおくる事をどうしてさう恐れおののくのでせうね。日本の詩潮、現代思想、八人流行、本流か支流か、プロか是非か。何故に喋々と人を批判するや？

予は現代の本流とは逆流なるか。よし、予は予の逆流をやがて本流となさんのみ——とまあ少し啖呵をきりますかね。

* 無産者の詩、反抗の、火の、煙突の、ハンマーの、生活苦の、生きてびん／＼してゐる現代詩。といふがさてその生けるが問題ですね。いかに躍動し、虚吼すればとて、使騙する強烈な文字とリズムが、作者の深い胸からうかみ上つて來なければ、血だ眞劍だといったとて、左様でしかと答へるばかり、只の宣傳、喧騒な詩文字の遊戯でせう、藝術は特に詩はもつと一徹で眞率です。無駄とから騒ぎのない直接の開眼、眞氣の流露がいつの間にかひびいてゐるものです。生活苦を訴へた詩と、野遊びを喜むだ詩とは題材でなくて作者の如何によつて眞偽が鑑別されるといふ事もわかりきつた事でせうに。

* ついでですが、圓滿具足、圓光的表現、それも嘘の嘘ですね。古代の詩はさうであつたか知りませんが、未來はもつと破れ進む、眞情眉宇にせまるべき詩が生れるでせうよ。あらゆる機能を吹きこんで、より生新なる發情燃ゆるが如きものとなるでせう。と思ひながら、さて一步、一步

寂しい路です。喧嘩をしないで同行させよう。死の荒野の四辻まで。

* どうも僕は巷街に説かるる芭蕉、辻に賣らるる親鸞、あの小乗的諦觀に反對しますね。小器圓満たらんより山野の藁束になれ、海洋の流木たれ、既成詩の世界より出でよ。とつひ云つて見たくなつて、ガラにもなくしくじりをやりますね。へんに僕は若造氣どりです。

* つひ脱線しましたが、近時、詩作者としての自然觀、人生思想の熱情を、個人的に披瀝し、又衆を超ゆる者幾人ぞともいひたくなりませう。あまりに常識でせう。お座なりでせう。流行でせう。あまりの詩感の安賣から手も足も出ないでせう。むしろ鬼異たれ、妖精たれ、あまりにも類型的なる不可思議なき日本詩壇——といひたくなるぢやありませんか。

* 情緒が豊かで、氣分の自由な者は、いつの間にか浪漫主義を奉ずるやうになりますね。それが時代錯誤であるといつて引返すやうでは、自分を信じない蠅のやうな男ですね。かれ等は自分が殻だといつの間にかメカニズムを奉じ、社會的、經濟學的に、現實主義と個人主義を混同し、現代の氣運によつて自身を左右する晴雨計になつてしまひます。しかし浪漫主義者は常に表現主義的になると、又情熱豊麗なる古學的なるとを問はず、いつも原因としての性格と感情との基礎からその生活様式を藝術にまで高め得る力を會得してゐますね。そして夢見る者、神祕を信ずる者、新らしき意識に形態を與へんとする者、生氣と鮮新なる感情主義によつて、個性を營むところの

思想的な貴族であつて、又自由と勝利との世界的市民のゆとりがあらはれ、おもしろをかしく、微に入り、細を穿ち、ふしぎなる個性の底から、一つづつ珍らしい世界を築きあげます。

* ちと退屈しましたか。では歩ませよう。もう四月ですね。この季節といふ奴が、まるで戀人のやうに化粧してつけ廻してくれるうちに歩ませよう。面白い、ゆつたりした四月、いい月ですね。いくらでも作の出来る時です。亂作はよしたまへつて、いややりますよ。僕は精力的でなく過激的なんです。作をしなくなつたら三文の値打もない夢の街のゴロツキですからね。どうしてうまい講義なんか出来るもんですか。仕方なしに一生懸命歌ふ稽古をするだけです。(十二年四月)

大樹の花・室生君

室生君の事を遠くから考へると、限りなくなつかしい優しい人に思へる。自分のやうな粗雑な頭ではふつくりと室生君の面影を傳へる事は出来ないが、自分は室生君の事なら思ひきつて書いて見たいと思つてゐた。

室生君は自分にいつもはつきりした印象を残してくれた。といふと自分のいい友達を店卸しするやうで少しヘンだが、自分が本気でさうだと信じてゐる事を書かして貰ふのはよい心持だ。自分は室生君に逢ふといつても静かに心を澄まして話す事が出来る。聞く事も出来る。室生君程安心して人を心持よく落付けてくれる人は少ない。室生君には草木の肌や幹が持つてゐる優しきといふやうなものがあるに違ひない。寂しいよい滋味がある。幽かな優雅な血が働きかけてくるのだと思ふ。それでゐて親切で丁寧で、今時珍らしい禮節のある人だ。

よく百田君を誘つて出掛けて行くと、歸りには遠い山莊から下りてくるやうな心持がする。清く静かに住む事にかけては室生君は名人の一人だ。自分達から見ると室生君の家庭には馬鹿に美しい微妙な秩序がある。蘭のやうな静けさである。あの空氣で仕事をするのだと思ふ。竹の葉が

二三片綺麗な古い陶器の陰でさや／＼と鳴る。手水鉢の干酌に仲秋と六朝風に書いてある。室生君は金澤の人だ。色のよい九谷焼を澤山持つてゐる。駒鳥のやうに優しい眼をして古い陶器で茶をすする。水と木の葉の匂ひを楽しむやうに。室生君には自分達などには見えない平明單純なものの中に、はつきりと形の美や静かな色彩を捕へる清純な眼がある。他人の窺ひ知れぬ独自の優美な光りでも物を見ては捕へる。言葉もはつきりとして、容貌にも何處か大樹の花のやうな優しさ、新しい典雅な風致がある。室生君には確かに澤山の花や大きい泰山木の純白な花に似てゐるところがある。その匂ひ響きがある。藝術も一流の織匠のやうな的確で、靜肅な世界の花園を設計してゐる感じがする。室生君には純日本といひたいくらゐな天稟がある。昔の淡々とか乙由とかいふ人は加賀にゐたかどうかよく知らないが、何處か芭蕉系の風韻を持つてゐる所が似てゐる。

室生君は樹や花や魚や陶器や水や女性について特殊な感能と、幽麗な寂然としたやうな愛を持つてゐる。いつも一緒に歩いたり話したりしてゐると、突如として室生君は不思議な類推を持つて新しい形容詞でものをいふ。室生君にとつては生活するといふ事と新らしく認識してゆくといふ事とが一つになつて藝術となるのだ。その表象的な描寫が、特別ではつきりした獨立性をもつてゐて、自己の響きと繊細な官能以外なものを受け入れない處によい個性があるのだ。自分は

いつも室生君のよい空氣と趣味を尊敬する。形と質と性に眼に見えぬ意圖と、嶄新な精靈的なものが織りこまれてゐるのには感心する。

このあひだ夜の兩國の鐵橋の上を歩いてゐた時、まん／＼とした水勢や、星や燈火がギラ／＼して妙に怖いやうな煌めきが出てゐるのを見て、

「僕にはかういふ處は書けない。」と室生君がいつた時、自分は「何故？」と訊ねた。室生君は「僕はある意味で田舎者だから……」と考へ／＼静かにいつて又「否、どう思つても書けない。」と強く振りきるやうにいつた。

自分はその時わからなかつたが後に室生君のいふ意味がわかつた。自分は（新しい田舎者）として（優雅な寂しみと澁みを持つ人）としての室生君が、いかに狭くともよく自分の道と領土を知つてゐるかに驚いた。又ある時自分は同君に「何故脚本をかかないんですか。」と訊ねた時、「僕は會話の藝術にはまだかからない。今の僕は地の文に精神を入れてゐる。」といふ意味の返事をした。全く室生君の今の藝術を知る者は構造とか企畫を第二にして地の文を見て、そこにいかに努力と静かな美しい手法があるか讀みとるのがいいと思ふ。然し自分は今藝術論をするのではないから、この位にして置くとしても、室生君くらゐ仕事と生活とがびつたりしてゐる人は一寸ない。ものゝ隅から隅まで、影と響をよく心に入れて、豊かな朝の光りで、克明に毛彫のやうに

物を見る。室生君にとつては物は宇宙の織物だ。新らしい宇宙は藝術としての金鑲なのだ。室生君の中には慘忍がない。奸嫉がない。惡慾がない。呪咀がない。闇黒がない。そこが室生君をして無限に物を美化させる精神だ。逢つて心持よく、安心して正直に静かに思はせる心の力だ。そこになつかしさと、優しさと、大きい深い平明さがある。自分はそこが好きだ。室生君に牽引されるのはその莊重な典雅なよい教養に風化されるからだ。自分は室生君が詩をかいても小説をかいても少しも狂ひのない、むらのないのに驚く。室生君は出來不出来はない。

一方又室生君は非常に苦しむで來た人だ。よく「僕の落魄時代に……」といふ。比較するのもかしいが室生君にいやな西洋臭のないのは何よりで、強ひて求めると何だか佛蘭西のカミイユ・サンサンといふ人の音樂は、何處か室生君のものに似てゐやしないかと思ふ。勿論少しあてずつぼうだが、大きくいふと國民的な情操といふものがよほど出てゐはしまいかと思ふ。さうして室生君は十餘年も苦しむで來てゐる。これからは材料に窮する事はなし澁く豊かに簡潔に進歩して行くと思ふ。その點でも室生君は人に決して疑問を抱かせない男だ。白秋氏は室生君を若い栗の木に譬へた事があつたやうだが、危つ氣のない意味でも室生君は深山の樹だ。何故か頼もしい力になる。闇黒に陥つても汚れ朽ちないところがある。意志が深く沈むでゐて見えなさが生涯の仕事と生命とを貫くよい精神を持つてゐる。秋のやうな豊麗な輝きがある。あの上により現實味

や宗教味が加はつて來たら一寸恐ろしい。

室生君はよく「自分自身の分。」を知つてゐる人だ。その點で個人的にも信じられるし、長い生涯の尊敬する友人になれる人だ。よい世評を別にしても自分はしつかり裏書きが出来ると思ふ。全く室生君は深山の大樹の花のやうな寂しい愛があると云はうか。静かな品位高い匂ひがあるとも云はうか。一寸自分達に届かないものを持つて生れた人だ。(大正九年)

歌劇に就ての感想

近頃必要があつて自分は二三の歌劇を見ました。五六年前の「熊野」や「燈籠大臣」より素敵な進歩のやうに思ひます。然し日本製の歌劇は感心しません。まるで歌詞作者の低級な亂舞です。作曲家は個性もなければ、發見もなく只科白に唱歌を附随したばかりです。

自分は歌劇に期待を持つてゐます。歌詞作者は三流四流でもかまひません。一流の作曲家が出ればよいのです。ベートーベンの「フェデリオ」のやうなものを早く見たいと思ひます。あれは作曲家から發して、歌詞作者が従つたのです。樂想が主で、戲曲的動詞は二位です。文學者は歌劇では從僕で音樂者の勝利です。ペルリオは「さうです。私は音樂が誇らしく自由であり戰勝者の様であり、無上のものであることを欲します。私は出来るなら戰から出來上つた善い詩句を望みたいのです。」といつてゐる。ワグネルなんぞのもさうではないかと思ひます。動作や科白は皆音樂の下位にするものです。叙情的な詩句、舞臺上の熱情的効果さへ皆音樂が主導するやうに思ひます。何といつても歌劇は魔力的です。戲曲よりも神祕で、管絃樂や發聲法や、新らしい音律の眩耀でなければならぬやうに思ひます。凡てが音樂的構造の基に立てられた、感情の戲曲的光

景です。タンホイゼルの臺詞だけ讀むだけでは詩韻も何も感じられません。然し曲調と交響的音律に燃えて演奏されたら燦然たる感動に充たされるだらうと思ひます。

自分は時々音樂會でやる歌劇中の一聯の管絃樂や詠歎の獨唱きりきいた事がありません。然しこれからはいいものが見られるでせう。ロシニーやメンデルソンもよいが、自分はワグネルのオペラを早く見たいと思つてゐます。それと同時に日本でも独自の歌劇が創作される事を望みます。あらゆる樂器と合唱隊戲曲と音樂の大擾亂、詩と樂想の結婚。朗詠や吟誦や歌曲の熱奏。又は愛らしい聖らかな喜歌劇、單純で音樂の嵐と大祝祭に焰のやうになつた詩的歌詞のすばらしい光景。自分は歌劇を書く事が出来ないが樂者の美しい魔のやうな仕事を熱望するものです。

オペラはよい歌ひ手と、新しい作曲家のもので、音樂の叙事詩で、陶醉と魅力の舞臺的な音律と光の嵐です。然し茶番や道化や軽いアレゴリーのやうなものでなく、極く理解され易い單純な動機のもので、音樂さへ強く彩りと魔力をもつてゐたらオペラはどんな人をも引込むだらうと思ひます。我々日本人の奥底に秘めてある音律的な憧憬や音樂の自然性を表現してくれる作曲家があつたら、舞臺の勝利は戯曲家のものでもなく、最高の意味で音樂者のものとなるでせう。然し二重の幻像は破壊され易い。音樂が動作と科白を持つといふ事は作者には恐ろしい危険だらうと思ひます。ワグネルの「シエグフリード」さへトルストイを吹き出さしたといふ事です。

自分は悲劇的情熱のあるオペラのシーンも好きだが更によい喜歌劇を望んでゐます。少しも筋や動作に無理のない、そして音樂にびつたりとした喜ばしい叙情的な光景、戯曲の幻影と音樂の幻像とが、一つの彩色に塗り込められた奥深い情緒。曲調と情調の快い流れ。さういふ喜歌劇が見たいと思ひます。

今の淺草やその他の劇場のオペラも見物が悪いのでなく、國民的な、又歌劇を生かしきるだけの作曲家がないのが原因です。歌劇と詩句は、材料で堆積してゐます。よい作曲家が出てそれに歌劇の生命を吹き込むのを待つてゐます。自分もその見物の一人です。作曲家よ。早くよいオペラを見せて下さい。

花猫遊草

—泥偶の神うだつの由来—

またく泥偶の神うだつの祭會をやんべといふことになる、いつも花猫子が慈姑のすくない寄せ鍋の原料を折につめて、大森の奥にゐる丘陽先生のところへゆく。即ち孤鬼の計略である。かくて夫人は夫君とともに夜のおとり膳に水焜爐をたて、帆立貝の鍋に家庭圓滿の海市を彩らうとすると、ちよと散歩をといつて先生を生獲つてしまふ。かうなつたらいかに夫人が閨怨の炎をあげようと、鍋は空しく十二時過ぎまで空聞の伴奏者となるだけである。花猫子と先生は烏瓜の飯をぬけだし相顧みて欣然。莞爾として結城の袖を羽搏きながら、さて改めて小春日和の街上艶隠者、八幡黒のすがつた日和下駄から、からん／＼と新らしい木琴を打ち、途上美人の品定めを土産にやつてくる。

—やあ、紅葉の幹に白猫だよ。

私が二人の風俗に縁描詞をかく。ふふんと笑ふ丘陽先生は學生相撲四本柱の初代、力者大戸岩の酒友、腕は紅葉よりも樗、それでゐてひよどりのやうに可愛い聲をだす、花猫が酔ふと貞ちやんといふ幼名でよぶ。花猫も本名は忠ちやん。一名如鷺。青樓の小旦那とは見えない。二人はほんとうに竹馬を半分づつ乗つた仲間である。

—でて来いよ、うだつ日和だ。

そこで、私といふ又無能な物體が加はつて、一人が御神體うだつの一軸を羽織の下へ落ざし。舊弊な格構をしてふらりとでる。

折から茜染めの日和ならば、まだ蘆荻のあるところ、如雨露でまくやうな露時雨でもくる模様なら、櫻落葉のいちはやいとこ。羽田か鮫洲か目黒、道玄坂から大森あたり。都の辰巳をはづれて、いなさといふ季節風のくるあたり、場末の古風な一室を物色してまづ杯盤よろしく、おとほし物の海鼠腸をつるりと舐めた唇に、黄金の入日が明滅し、二人の肩が片々づつ落ちて、籠の中の蟲のやうに勝手な姿型につんばると、花猫が下手な癖に附合をやらうと、筆硯と用紙をとりよせ、いつの間にか後ろへ妖現したお酌が墨をすり、

歌澤の流れの末の夜商人

番町をとよ提灯は何

といふやうな江戸座末流の俳諧が裏にまはる。丘陽先生は筆が嫌ひで、株屋めいた羽織をぬぎ、人がほんとうにしない事實談の、倫敦の歸路蘇士あたりで阿刺比亞人を投げとばし、世界の人種をあつめた船の甲板で、日本の武勇を表現した話に、嬌阿共が感じている頃になると、徐ろに腰の一軸をとりだして床に懸ける。梅嫌か牡丹の活かつたやつをどけて、新しい三寶を買はし、お供物の豆ねじに烏賊の足、季節の蔬菜に一句宛を附し、三人で頓首三拜する。その祝詞を書くのが私の役であるが、苦吟一ヶ年まだ筆がつけられぬ。

——まあ、何でせう。

三流どころの美婦が訝しげに首傾けると、

——拜めよ。これがうだつ様の御神體だ。あらたかで、めつたに拜めないものだ。

——でもまあいやだ。泥偶の坊の首が一つ書いてあるだけぢやないの？

——と云ふから、おまへさんもうだつがあがらないんだ。そも／＼うだつ様のお由来といふのを知つてゐるかい。

——そんなもの知らないわよ。

——ぢやあ云つて聞かさう。さてよ、かうつと煙草入れを忘れて来たが、いいや素手で——なあ姐さん、かういふわけだ。

花猫が死んだ菊石の荒次郎のやうな手付きで、うだつの由来を説く、その實説は以下……。

二

清親の版畫以來、火輪船と岡蒸汽が名物、古くはいつも濱淺黄の雨がふつたと花猫がいふ芝浦に、小秀といふのがあつてお當人情火を盡した。十日一ヶ月とお座敷をつけ、「むらさき」といふ待合へ置いて、幾日か屈託するといつしよに散歩しよういふ。小秀が女學生ぢやないわよと賛成しないので、やむなくではお詣りに行かうといふ。小秀がよろこんで堀の内や柴又へ同行する。さうするといつも一時間、その御本堂で小秀が拜むのを待たされる。如鷲亞宗一本足で立つてみたり、洋杖へ帽子をのせて廻してみたり、横體に張つた千社札の中に最員の鮪屋を発見し、文化三年といふのはいつだんべと考へてみたりするのがつらいので、よし俺も一つ信心をしよう。特別誂のお神體を拵へて小秀に復讐してやらうと思つたのが初まりで、丘陽先生に相談する。私に話をする。と、ある時私がかういふ話をした。

（春の煤拂ひ。春季清潔法といふ奴をやつた時に、私の見きのところで、もうこんな汚ねえものはいらねえといつて、一つの小さい額を芥溜へうつちやつてしまつた。私が通りかかつて小僧に拾ひ出させ、はたきをあてて見るとへんに面白い。古い牛が刷つてある木版であるが、その牛が

いかにものんきでよくでてゐる。すぐ裏の自家へ歸つて母にきいてみると、それはお牛様といつて、何でもおぢいさん時代から火事にも焼けなかつたものだとはなし。ふふん、こんないいものをうつちやるなんて兄貴の奴うだつをすてやがつた。よし俺が拾つて置かうとそれを書齋にかけた。友達がみんなほめる。そこで自家ではこれをうだつ／＼といつてみんなに拜ましてゐる。)

(が、さてだ。卯辰と書くか宇達であるか、この俗語にいふ正體はわからないが、かういふものは何處の家にもあるもんだといふ事を、諸君お感じになりませんか。何でもよい。たとへば根つけとか金銀の一寸ついた毀れ物とか、何かしら今必要もない、さりとて捨てるのも惜しいといふやうなものが、箆筒の引出しか長持かにはいつてゐる。出して賣つたとて一文にもならず、もう誰がいつ買つたのか解らないもの。煤けた神祕の破片。少々妖怪めいてさへ來るもの。さういふものがきつとある。まあ、それがうだつともいふかい、ほかに云ひやうがないぢやないか……と。)

——へえ、何だい、そのうだつてえのは、解らないやうだが面白い、一つそいつに衣裳と繪の具をつけるかな。

(ところで、ところで、だ。もう一つ枕詞があるんだ。それは曾祖毎にきいた話だが、下世話にかういふ教訓話があるんだとよ。)

三

(何でも、大江戸の大火の時木曾へ材木を買ひに行つて儲けたといふ男の話の、その又續きだらう。ある男がもうすつてんでんになつて、どうもかうも百計盡きてさ、高輪から八つ山の波打際に腰かけてぼんやり思案に耽けつてゐたんだ。と、お盆が過ぎたといふ翌日だらう。折からのあげ潮にお精霊様の馬にした茄子や白瓜がぶく／＼流れてゐる。ざつと見積つても江戸中のだから數が知れない。男はそれを見てぼんと膝を叩いた。彼の胃が空つぽであつたが爲に、彼の食慾が泥海の茄子や白瓜をいかにして食すべきかを考へてゐた爲、男は加工食料品の一大發見をした譯だ。「勿體ねえ、あいつを食はずにそのまま腐らすなんて……」男は急いで馳けだしながら考へた。で、すぐ今の青物横丁のあたりだらう。その家へ歸つて、まづ大家さんに打明け、その茄子や白瓜を夜陰に乗じてすつかり拾ひ替め、何十樽となく酒の粕を入れて漬込んだ。さあ、そいつをばつと賣り出すと大變な賣れ行きだ。白瓜や茄子に奈良漬といふ羽が生えた。關西にはもうあつたらうが、關東にはなかつた。籠甲いろで、よい匂ひで、その上おいしい。大家さんでも、みいちやんきいちやんでも食べられる。わあ／＼といふので賣れた。

(そこへ不定冠詞のついた話の動線が挿入される。即ちその樽の中に、茄子と白瓜に交つて一個

の泥偶人形の首がまぎれこんでゐたといふのだ。男はそいつを勿體ないといつて、神棚が荒神様の傍に飾つて置いた。それから話の因果律が應用される通り、とん／＼拍子に家運があがり、八百屋市場をつくり、家作を建て、すつかり成金宗のよい顔になつた。で新築の住居にでも移る時に、あれ、こんな穢ないもの……か何とかいつて、新きの女房が泥偶の首をぼんとすてる。下婢が海へうちやりませうよ……とでも云つて、又もとの品海へぼしやん。御主人、もうそんな些細な事にはお氣がつかない。庭の檜葉がよいの悪いのと云つてゐたらう。よいかそれから商賣に競争者が出来る。より優越品がでる。お精霊様の馬を喰はしやあがつたといふので人がべつ／＼——女房が死に、家が焼ける、それはどうであつたか、たうとう又すつからかん。自棄になつて飲み倒れ、又八つ山の波打際にやつて来て、七年前のやうにぼんやり海を見たが浮いてゐるのは芥ばかり、で、ここが話した。よく海面を見るとどうだらう。以前の泥偶人形の首が、どこをどうしたか又ほくほく浮いてゐる。さうだあいつを捨てちまつたから悪いんだ。あいつさへあれば、家は又とん／＼拍子に運が開かう、といふので「おい／＼うだつよ、うだつよ、もう一度拾はれてくれ」といひながら、拾はうとすると、泥偶の坊の聲として「いやだ／＼」といふ。そんな事を云はないで、此度は一生大事にするから、と涙をながして男が叫ぶと、泥偶はぶく／＼と首をふる。「やい、うだつよ、ではどうでも来てはくれないのか」といふと、泥偶の曰く「いやだ

よ／＼、二度とうだつはあがらない」といふかと思ふと、ほんとうにぶく／＼と沈んでしまつて、市が榮え……。

——そいつあ、うさや、一つそのうだつ様を世の中へ出さうぜ。何代目かの安本龜八をさがしだして跳へべえ。

花猫がすつかり悦に入つて、どうかしてうだつを世に出さうといふ事になつた。

四

ところが、更に蛇足が蛇足を生み、その春私が、奥州は青根温泉へ行つての歸り、遠刈田の湯場で、ほんとうの泥偶の坊の首を五本も買つて來た。そいつを友達に預けて、うだつだから、孫子の代まで大事にしろといふ曰くつきで送つた。

——さうだ。貰つた／＼。

丘陽先生が家へ歸つて捜す。そいをもでるに尺五の絹本が出来上つた。表具師の横波が千代紙で表装して、いかがでせうと花猫のお機嫌を伺ふ。上出来……

——いよう、御神體だ。

花猫が悦んで、それを三人でうだつ會と名づけて持ち廻る。たうとう小秀にも拜ませた。御符

だといつて鮎の黒焼をのませる。が以來花猫も女房運がわるく、丘陽先生も繪が落選する。私は詩が賣れず、景氣世直しの爲めとあつて、兒戲百態を盡す、理も非もない。只泥偶の神を拜んで、泥偶の圓滿具足の器たらんとする。即ち、のんせんす・らいふ。一度はダダ開宗の千々甚も宗徒に加はつた。

——えい、まだ只今の東京が江戸と申しました時代、品川は東海道の振りだし。その八つ山の波打際に……。

と、花猫が小秀の事は棚にあげて、それから説きだすうだつの由來は以上の通りで、もうこの會は數回にわたつたが司祭者どもはいつかうだつたが、あがらず、尺五の絹本の淡彩うだつの圖も、駄句と二三流どころの美婦の名でいつばいになつた。

——そこでだ。來年の七夕にはいよ／＼うだつさまの草紙も洗はうぜ。もういつべん初春の福壽草を飾つたら……

近頃花猫はしほれてゐるのである。

霜夜づくし

露伴先生から贈られた、そいつは「はづれつこなし」と商標にある英國製釣針。そつ鋭い臆に又鑿をかけ、二日月より細い青銀の鉤にした。釣絲は人造で素麵ほどある。沈子が三匁。それを懷中に忍ばせて宵に家を出る。

しかも月夜、菊より白い霜の月、濃藍の空は劇薬めき、川まで行くと微薰も全く散じ、額と鼻は石となり、手足が氷のエレキテルだ。ごかいを買つて九尺の竿を繼ぎ、兀として砂利船の舷に踞る。外套と襟卷の包帯、まるで山窩もどき、箱餌の傍に手提洋燈を置き、さて竿をたてどぶんと沈子を投げ込むと、母から借りて來た懷爐が、臍深くほやく、その恩愛の茄子火灰は霞酒よりあまろ。

月下の美魚、その霜と氷の盈量をぬきんでて、すき透つた天蠶絲が弓と張り、鉤にかかつたやつと一心に争ふ。その一二分間の腕の感覺といつたら、義理も糸瓜も忘れてしまふ。ぶると來て、ぐい。それがたまらぬ。まさに戀愛以上、心臟がひらめいて、全身の感覺がぶるとする。

霜夜のその目的の魚は、うぐわより不味いまるたであるが、秋水一尺、水を離れると空中の雀刀だ。船に落ちて潑刺と珠を吐く。と云つたつて僕はいつも臨時雇、彼等に云はせると「場所あらし。」稀に一疋でも三年以上のがあがると、竿を振廻して格闘するやうな騒動、石のやうに黙つた仲間が、ははあ又荒し屋が来たと呟くといふ。全く彼等は狂人か苦行者である。今に今にと空想し乍ら夜半まで跼つて、たとへ一疋もあがらないでも、その熱望はます／＼昂まる。月に鉤針を磨き、霜に天蠶絲を張る。世間も生活も千里を隔てた心持。ただ魚だ。その月霜に輝いた美魚。そいつを引提げて川から上る。月と氷に劈かれた快樂だ。鱗鱗と骨に徹する、その微妙な感覺一つだ。さあ、そいつが忘れられない。

二

つりに行けない夜は三の日七の日、花猫と二人で俳諧定座の看板をあげた六々庵へ、その附合の稽古に行く。

松こそないが、霜に白むだ菊に袖が觸れ、紫苑の枯葎や枳が帽子にさわる。月影のある處に拍子木のやうな下駄をぬぎ、上框からすぐ席へ着くと苦茗一服「喫茶去」の偏額の下でまづ床の「はせをのみこと」の軸を拜み前回の懐紙を展べ、さて庵主が文臺の前へくると白猫ほどの

陶手爐を抱き、初裏の三句目又は月の定座と注意され、花猫が「霜夜の巻」にかかつてゐる内は、僕も「枇杷の花の巻」にかかる。長短三句目毎に變つて来る。小短冊へ書いて、へん、この附味はどうですと差出すと、それ一句前に背中がとありますよ、胸と云つてはつくからいけない。ほら、ここに生類があるのに蟲を出してはぶち毀し、花前だからさら／＼とやりたまへ、いやそれが例の観音開き、それはがらりと附味を變へて——と、俳句では談林江戸座を切り捲くうといふ花猫もいよ／＼手足が出なくなつて額を叩く。僕が欠伸すると庵主に叱られる。——信仰は類に星をとすなり——へんな附味だが、まづそんなところとなり、最後へ来て、——春雷すぎし圓のせせらぎ——といふ調子で終りになるが、庵主が七句、花猫と僕が五句ぐらゐでもう霜夜も更ける。蕎麥湯でもあげようといふのを辭退して、花猫と濃いものを食ひに行かうと約す。下駄の上には花のやうにみつしりと霜だ。

三

次の夜は古い淨瑠璃。からりと目先が變つて、霜も雪となり花も涙になるといふ。義理と忠義と恩愛。音曲界の硬派で、今はお湯屋の露路ではなく、電車で登松さんの隠宅まで浚ひに行くのである。

もう十年もやつてゐるが、相不變初歩の端場物、それが木つ葉師匠にはない、まだ酒屋も日吉も御殿も知らない。死むだ岡登さんに毛削だの俊寛だの山婉だのといふのを習つた。が、近松が海音がいつたところで、壺坂が駄作だといつた處で、先代政太夫が播磨といふ事になり、曲節と意氣の音律的世界だ。みんな仲間は徳川期の遺物、納會には箱屋が来て肩衣を着けてくれるし、鮎を通してお禮に困る。煙管と前掛け、若い師匠の珊瑚の珠が、小指の撥肉腫たぶにちらく。

ラジオで巖太夫を聴き、羊羹で昔の人情斬。懸崖の菊が茶箆の上から夢の繪模様、お歳暮の相談をして、お砂糖か青い茴香酒でも、師匠に贈らうといふほどの事。又節づけの本を膝にのせ、文彌落し、うき播磨、網戸といのがありましたね。ええ、合邦のあれは縫ひつぷしといふのですつて、へえ半太夫だ林清節だといつても、私は戀十のけいじ節といふのが好です。あすこは矢張り鹿踊りで出たいもんですね。さうです。あら、寒いお月夜だ。まるで殺し場のやうです。

その歸途又は必ず花猫につかまる。つりかお稽古をしてゐればよいが、俳諧か悪食をやつたあとは、二人とも月下の破戸漢である。花猫が愛飲する虎骨木瓜酒といふのをやつて、まだ足りず何か悪食がしたいといふ。牛の膝骨の中の膩だの尻尾だの、一時牛めし屋のボクとチャキとい

ふのに精を出した。

母が涙をこぼして、おまひは此頃お酒が悪くなつたといふ。殆どこの霜夜の夜半だといふのに家にゐた事がない。これが病である。夜の鬼、悲しい詩を縫ひつぷして酒に唇を赤くし、夜半の霜の菊花を啖つて酔ひを醒ます、火の番に注意され、鍋焼きに跡をつけられる。そこで花猫のいふには、かうして年をとると思ふとへんだよ。また年の瀬だ。六年の晩には、あの生れて三十五年、且つて聴いた事のないあくどい三四流の浪花節といふのを聴いて、それから霜の月のある野原を歩き廻らう。來年は足下の當り年の寅ではないかと、戀無情の先輩たる彼が、愚かな僕の肩をぽかりと叩くのだ。

陶磁器への遠望

幽かに、かすかに見えて来た。秋と冬の清芬とした空あひのやうな、又谿の色あひ、雲と山との肌あひのやうな、あの古くてあたらしい陶磁器の世界が、冷くつや／＼として眺められて来た。

陶磁器は古りていよ／＼あたらしい世界の藝術品である。陶磁器がほんとうに見えてくるのは、他の動的な藝術を見飽きた眼でなくてはならぬ。あの「うつくしくはかなきもの」は、常に破壊のまへにふるへてゐる。静寂として澄みきつてゐる。それを手にとつて愛さうといふのは、よほど風と空気に寂びた手の持主でなくてはならない。かれは石の粉と泥と玻璃との娘である。うすい肌、かがやかしい釉、かよい口、圓い静かな姿をあらはして、いつもはつきりと座つてゐる。僕にはやつとそれが見えて来た。

ほんとうに、もうろうとして古い時代の壺の姿が見えて来た。あの推古朝のうつくしい觀世音の木彫の、片手にさげられてゐるやうな水壺から、一つの地球を寫してゐるやうな青磁製のもの、或は泥のままの、火のいろをふくめるもの、空気よりも深くうつくしい線を生かしてゐる

もの、あの形相、重み、静かさ、色あひの匂ひとそのひびき——といふやうなものが、僕のかの夢や感情とともに、花がふくらむやうにふくらむのを感じる。壺を見てゐると、神祕な人體の原型をかんじ、いつも古き代の娘たちの、もの云はぬ肩や腰の圓い月のやうなものを、ほのかにも思ふ。僕にはまだ七寶の燦爛としたものはわからぬ。近代のセーブル、極彩色のより意飾的なものはわからぬ。わかるのは古く日本の百姓たちに用ひられてゐる水壺から徳利やうのもの、藍の唐草のまきついた安ものから何の飾りもない古い時代の、すつきりとして殆ど捉へどころのないやうな線の、豊かな、静かすぎた、得も云はれぬ形である。

それから鉢やうのもの、どんぶりめいたもの、いつも色のよい釉で飾られ、或は天然色の素焼きにちかひものまで、どうもその陶工の意図が、はつきりとあらはれすぎて、うかつな事の云へない、技術や年代のむづかしさ。誰の作でどこの産で——と云はれると困る。それにはセーブルもよい。九谷もよい、又日本の古い名産地の、古いものがよいといふよりほかに知りはしない。が皿、皿はいちばんすきだ。どうして皿が好きだか自分にもはつきりしないが、しかし支那のもの、和蘭陀のもの、又古い時代の皿は、得も云はれぬ味がある。最も危険で、毀れ易くつて、その癖大きく小さく、うすく、一枚づつ愛することの出来る圓い陶磁器の月、或は池、ふしぎな圓盤、そしてつとも色のよい繪や模様のある、意想の古雅な、幽艶なくらゐなも

の、又は淡々として、閑寂で、ほんのりと侘びしきもの、それはうつくしい皿である。藍のか
るい筆致、山水、静物、人物をあしらつたもの、一つの唐草、柳、草、山、花鳥、とりどりに
自在をきはめ、赤釉、金泥、青と黄、しかし僕にはただ藍がよい、水をよび風をうかべて、そ
して清酒としてゐる藍のかるい線畫がよい。そして支那製の古いのんきなものほどよい。

それから茶碗、腰もありふくらみもある、もつともうすい、はかない形をたもつてゐる茶碗。し
かし茶道専門の、黒釉を塗つたもの、樂焼風のもの、あの醜怪なうちにある美しさ面白さを愛
するにはまだ時がある。僕にはすぐ用ひられるやうな、その癖一番毀れやすいやうな茶碗しか
わからぬ。そして陶工と畫工とが一致し、風韻のある、淡々としたもの、のんきなもの、蕭々
たるもの、牙もあるもの、それから盃、もつとも泥にちかいかい掌中の水盤、酒をたたへる一寸の
器、朝顔のやうな花の臺たいのやうな、蕙菜の葉のやうな、愛らしくて智慧のある面白さ、そのか
るいたのしい制作。盃をみるとほしくなる。皿を見ると毀れるのが恐ろしいが、盃をみると酒
をいれたままでも、うれしい友達になげつけて見たい。

が、いまだしである。僕にはやつと陶磁器の世界が見えて來た。日常のものから、幽かに古い
時代のものが、そして東洋的な、もつとも美しくしてはかなき一つの愛らしい藝術の中に、動
中の静、龍虎の勢ひ、又ふしぎな觀念の陶化といふやうなものが、秋が沈むやうに、雨がはれ

るやうに見えて來た。自分達の忙しい膝のほとりに、こんなにもうつくしいふしぎなものがこ
ろがつてゐるのに、どうして自分はそれに対する愛も恐れも感じなかつたかと悔みたい……。

美しき寺

僕はいつもあるうつくしい寺を夢見てゐる。それは別に黄金の柱や瓦があるといふのでもなければ、瑪瑙や寶石がちりばめられてゐるお寺といふ意味ではない。日常ありのままの、しかもどこにでもあるやうな田舎の寺でよいのである。

今の世の中では、古いお寺ほど自然に對してよい位置をとつてゐるものはない。片田舎の山ほとりに、木深い谿に、或は村の奥まつたところに、昔ながらの夢を抱いて温まつてゐるもの、佗しげにも悲し氣にさへ見えて、その實靜かで豊かなるもの。それは風致に恵まれた古いお寺である。しかしそれを護り住んでゐる人々に、なつかしく樂し氣なる人々はめつたにゐない。今、日本の寺々は過去の怨靈につかれてゐる。かの聖けくもうるはしき佛敎は、偶像となり形式となつて喘いでゐる。ほんとうに佛陀の感情と思想を慕ふものは、印刷された書籍の頁によつて冥ざるよりほかになく、お寺はただ古い建築として夕榮のなかに没しながら、その美術も歴史をも鬼狐の類にゆだねてゐる。

或る人は、今日の寺はただ死靈魂への祭壇としてのみ存在してゐるといふ。もしくは死體を處置する自治組合として、偶像と墓地の管理所として、その古い習俗によつてのみ政府から許されてゐる營業制度だといふ。寺をもつといふこと、本山と末寺の關係、檀家と寺領制、さういふ事を發いたら想像以上に堪へられぬ紛擾を極めてゐるといふ理由で、さういふ不經濟な死靈の旅館は廢してしまふがよいといふし、又千遍一律の不可解な梵音の讀經なら、蓄音機でさへすませるといふし、あの演劇めいた儀式、擬古的な法禮、兒戲に等しい年中行事の不經濟をたすけるため、もうわれ／＼はあの債鬼のやうな祭司をたのむ必要がないといつてゐる。これはもつともな言葉である。僕としてもあの死人への祭祀が、職業として行はれてゐるのに飽きてゐる。負しい人と富者の死が禮物によつて區別され、精神の修養より生活の活殺に喘いでゐる僧侶をあまり多く知つてゐる。

しかも猶うつくしき寺を夢みるは何故か。僕は一二の寺と親しき人を知つてゐるといふ理由でか、否である。僕は自然の中に於ける寺の精神、寺そのものの風韻を愛してゐる。初めてこの世に寺といふものを創立し、自然に對し人生に對して隱栖する心持、さらに名もなきほどの片田舎に、ひっそりかんとしてゐる古いお寺がたまたまなくなつたかしいのである。

昔からお寺といふものは、歴史に對してたいへん貴重な役目を果して來た。お寺は皇室から指定されたり、又時の政治に干與したといふ理由ばかりでなく、お寺は日本の美術や文學をも深めたり大きくしたりした。のみならず名もなき片田舎では、直接にお寺といふものがなくてはならなかつた。お寺は辯護士も書記をも又精神病醫をも兼ねてゐたのである。

いつも各地の大きいお寺や古寺をたづねて、それとなく感謝するのは、かういふ小さい聖地(?)があつて兵火をのがれ、世の利害から離れてゐたために、多くの藝術品や古文書が保存されたといふことである。そして一山の開祖ともいはれる人々は、必ず深い自然の中にその象徴的な建築をもつて行つたといふことである。

お寺といふものの建立が、いかに夢想的なものであつたか、いかに信仰と智慧とに基いてゐたといふにもせよ、その美術的な組合せ、又印度支那の精神の渡來と、日本郷土の靈と夢とのふしぎな繪模様であつたか。僕はいつも科學者のやうにびつくりする。しかしここでそれを控へよう。僕のいふ美しいお寺とは奈良や京都の大きい美術的なものを評論するのではないから。推古時代に、又は飛鳥時代にといふのを控へよう。

僕はあたらし一つのお寺を夢見てゐるのである。それは何處でもよい。山の中でも海岸であつてもよい、今迄のものたちとも變つてゐなくともよい。ただより原始的な、よりめんどうのない、しかもよい人々のゐるところ、人に静かさと深さをあたへ、自由に出入の出來る、殊に貧しい藝術家に寢室をあたへ、いつも清閑として幽棲するにふさはしい場所といふ意味である。

三

寺もしくは蘭若といへば、罪人もここに入れば世の掟をものがれるといふ——それは古い世のことであるが、すくなくとも僕のいふお寺は、宗務局と藝術の組合が管理するものであつてほしい。そしてどんな村にも町にも又市井にも、他の干渉をうけない限り自由で清閑であつてほしい。禪宗のやうに沈黙してゐてもよし、眞宗のやうに安樂な心をもつてゐてもよい。ただよりよく自然を愛することが出來、自然を呼吸し水と血液とを調和し、亂れた精神を調節してくれる休息所、又は清き仕事場として、貧しい藝術家を容れるもの。時には昔のままに、旅行者も孤兒をも收容するもの。寺といふ精神と風韻を害さぬ限り何人のもでもなく、又何人のもでもあるもの——即ち大きい佛教といふ匂ひと色によつて、東洋のもの、日本のもの、古きとあたらしきを問はぬ精神の金剛經、花と夢との涅槃、生と死との寢臺。そして出來るだけ美しい自然の主旨

にのれるものであつてほしいのだ。

かういふ自然の観測臺、もしくは人生ののんきな休息所、それは至る所に散見することが出来る。田舎へ行つて看給へ、いかにそれに適したお寺が、南畫のやうに蕭條として、山の蔭にか、林の奥にか、又は廢驛の傍に隠れてゐることであらう。僕はあれを見るといつもうらやましいと思ふ。いつも自由に家といふものを持ち得ない小藝術家にとつて、ああいふ修行場があつたらばと思ふ。そしてうつくしい自然の中の寺々を、あつちこつちと旅して泊めて貰へたらどんなによいか、宗教と藝術とが一致して、たのしい清らかな愛情が湧かうものをと、いつとなく考へるやうになつた。

四

寺は生と死の境界線にある佗びしくも清けき旅館である。もしくは死を觀じ、この世の虚無を感ずる人々の小さい涅槃である。そして死靈への祭壇であるよりも、生ける靈を眺める隱栖所であらう。ぐるりの庭、深く大きい建物、そこには幽邃な空氣がながれ、いつも靈的な何物かが暗示されてゐる。金色の美術的な佛像やその裝飾を別にしても、どこか精神へあたる深い空氣がひそむてゐる。あの空氣はいかに古いものであつても、僕ら生活に苦しむ者には、いつも

清芬とした深山幽谷の匂ひをあたへてくれる。

殊に冬の寺。滿目蕭條として、石と枝のみあらはな庭、たま／＼冬青科植物の温い一と群れ、愛らしい窓、寂黙たる堂宇、貧しい人々や幼いものを、動物のやうに冬眠せしめる日向。一二輪の歸り花。自身の生活のぐるりに、その静かさと寂しさをもつことが出来たらどんなによいか。僕はそこに自身の騒々しい空氣をすつかり洗ひ清め、りん／＼たる北風の翼にうたれて、あたらしい精神の力を鍛へようし、いまはしき生活の夢をふるひ落さう。

そこでは一汁一椀の生活も出来る。孤座冥想の生活も出来る。人の世の音樂の代りに、松や枯木を吹く自然の奏樂、冬の蠅や蟻のやうに、リズムののろい、のんき極まる時間も迎へられる。そして思ふままに冬眠し、冥想し又書物の國に遊ぶ。天地は自在である。出ては自然の書を眺め入つては思想の深い谿間を遍歴する。古人はそこに彷彿として彷徨つてゐる。聖人も詩人も、王も囚人も、もうろうとして机上を漂ふ。僕はその靈にいつでも話しかけることが出来る。靈は又僕にふしぎな思想や感情を放射し、書は變じてうつくしい夢幻劇を演じてくれる。その白日の夢又は夜半のおぼろげなる世界、僕はそれに堪へそれに魅入られ、長い冬を辛棒する。そしてあまりにも浪漫的な經文の中の比喻や極樂を夢見る。うつくしい花、愛らしい鳥のゐる、天人や菩薩の散歩してゐる園、黄金の木や寶石の殿堂や、いつも玲瓏としてすき透つてゐる清淨な世界へ遊

よ。

それにも倦めば庭へでる。古い日本の造庭術や建築をながめる。どうしてここへ石を置いたか、水を呼んで、木を運んで来たか、冬はあらはにその造庭者の意企を見せてくれる。水に蘆と菖蒲、北庭に竹と蘭、南庭に何々、そして東に花畑西に藪と林、その冬青科植物の美しさ、深い年輪、空との関係、日光との明暗について、僕は鳥のやうに鋭敏になる。そして花の蕾を秘密でつくつてゐる枝や、地中の昆蟲や種子を愛し、雪景を喜び冬夜の燈火を慕ふ。

五

春の寺。それは清らかな花と匂ひの夢の園である。三月のうすいみどりと早春の木の花、もしくは畑のもの、藪の貝母、斷腸花やらほんのりした山櫻、寺には埃りもなく、又何らのひびきもない。誰の眼にも賞さるる事なくして、花はちり昆蟲は育つ。殊にそれはわびしく貧しい田舎の寺で、いつとなく雨がふり、おぼろ気な月さへ木の間にさしいで、徒らに古い世の有様が思はれるやうな時、ひとり心の傷を愛しながら、あかるい春の風にふかれて寝てしまふといふやうな僕はその田舎のお寺の春を愛する。名もなく埋もれた夢のやうな場所を愛する。僕はあゝ一冊の詩集をさういふ寺にゐて書きあげた。

そして夏には晝寝にゆく、木蔭をもとあ、すずしい風を身につける。厭になつたらいつでも歸れるし、生木の椅子をどこへでも携へられ眠れるところ。そして花を愛するのもよし、昔の人のやうに夏書や夏断をするのもよい。夏は簡単な生活ほどうつくしい。畑の苜をたぐへ梢の枇杷をたぐへ、そして青いうまい野菜がうんとあるところ——それはやつぱり片田舎である。

するともうすぐ秋である。百鳥のむらがる、植物の金色を愛づる秋、しかもその夕暮の寂寞は何にたとへやう。おのれの靈を木の間にさがしおのれの聲に驚くやうな静かさ、鐘をついて見ても他人の淋しさがわかるやうな時、僕はどうしよう。生涯の清算をしようか、佛教の幽かな深い世界へさまよひ入るか、さうして自身の孤獨と靈にめぐりあひ、うつくしい無常感の上に立つことはよい事である。あたりは千蟲譜の音楽。そして夕には清らかな若い月がでる。月を観ることは神經にとつていちばんうつくしい事である。

六

僕はさういふ自由なお寺を夢見てゐる。そして何らめんどろな事のない、しかも善良でのんきな人々があつまるといふところ——その要求は決して難題ではないのだ。

今のお寺の人々が、少し理解さへもつてくれたなら、女の人もし小兒もよし、殊に風致のよ

い所で、圖書館にも公會堂にもなるし、あたらしい精神の谿間が出来る。僕はさういふ點でお寺を開放してもらひ、その人々によりよき藝術的な心をも抱いてもらひたいのだ。

いつも旅行をして、さびしい山の間や野原のある片田舎へ行つて、一つの寺を見るたびに僕は昔の人のやうにそこに泊りたくなる。そして佛教のうつくしさと、寺といふもののゆかしさを思ふ。日本はその寺に恵まれてゐる。そして至る所の大自然の中に、しかも時代を経たうつくしい寺がある。そして相應の周圍をもち樹木をかかへて、あを／＼と静座してゐる。中には尊い美術をもち、又宗派々々の福音をもつてゐるのに、それを示さうともしないで沈黙してゐるのがあつた。僕はそれをもつと開放してもらひたいと思ふ。そして僕のいふ自由な寺としてくれないうまで、あの建物や庭や樹木や、自然の一角のある勝地をもつとあかるくたのしく、そして萬人のものとして門を開いてもらひたいのだ。歌人や俳人はどう思はれよう。が、僕はたださういふ寺を夢見てゐる。そして夢見てゐるといふ事を人々に告げれば、もうそれでもよいのだ。

雨久花科

——このころ、美しきもの感覺的なる宵の婦、見えがくれの雨中の花。その凄冷な雨の色にまぎれて、さつとした朝紅の魚肉、ほう／＼と燃える野の黄雀風。陸水草をまじへた魚軒の皿に、染付の藍の花がひやく。

雨雲に精神がうつるほど物に倦みつかれて、とつしりとかぶさつた茂りを見ても、まん／＼たる水のある田の面へ出ても、枝の奥に水の陰に、ひつそりと咲いてゐる雨の花が、ものに燃えつかれた感情をすずやかに洗つてくれる。

——洗、竹繞、花興有餘。

さう口誦むと心は水だ。花過ぎのうつ／＼とした曇りと違つて、青豆の莢がばつとひらくやうに感覺があたらしくなる。

うつつに浮むで来るのは、いつもの卵の花、許六の「百花譜」に——卵の花月夜の夕すずみにしろめなる衣裳に黒き帯仕なしたる女の——とある、その古風な日没と雨の色あひ、いやしき惣嫁の花として昔の人の棄てたる長春、野薔薇、その野ばら石竹の類こそ近世の感覺が発見した野

の娘である。鮮やかな小さい唇と清げなる風致、身にいつか風をふくみ眼は細緻にあたらしくなる。

その中には又若い唐草模様を風に描く合蒔、青い豆を乗せた莢の船、ぬか穂のうす黄なる、秋の萍草科類の若くしてうれし氣なる。知風草、畫眉草、殊に思はぬ燈心草科類の花が、いつかひら／＼とでて、蓼や澤瀉の中にまじり、人の眼に榮えぬ淡い色あひも見せてゐるのは、何とも云はれぬ涼やかなうつくしさである。

さらに片田舎のうれしさは午前の静かな雨である。拘括のするどい匂ひに襯衣を白くして、木深い藪にはいと、貝母はもう花を失ひ、百合や蘭科の類が鬱々と生活を強めてくる。殊にあの無氣味な天南星科の類が、ぬつきりと浦島草の花の舌をのばしたり、少々鬼氣を帯びて、雨雲の木下暗を深めてゐる。そのあたりから明るみへ出ると露草の類、螢草の空色の花の羽がみらく。畑には煙ほど半夏がよろ／＼して、もう忍冬花の甘い花の酒場がはじまつてゐる。大雨めいた青すかんばの葉の濤に、水の近さを知らせる鴨舌草、川鯪の匂ひが感じられて来るあたりは、もう一面の雨久花科、水龍科の世界である。

雲と草と、水と風との半圓球の突端へ出たら、もう僕等は自身か風信機であり、やわらかい大氣の藝人である。凡ては水に映り風に生きる。そして雨の中の花、水の中の花の生活が、ぱつと

感情に映りでて来る。僕の好きなのは、その雨久花、その水龍の青い心臟形の葉、そしてその世界から一段と低い村の外の水澤地帯。

そこは情痴に倦むだ觸覺を優しく空氣でときほごしてくれる。熱かつた感情の色をひやくと洗つて、心を微温の平和にかへしてくれる。その色は雨久花、空いろとうす紫の莖の花、水のやうにさつと伐れて、しかも雨の匂ひにひろがる葉、青い蘭よりも蘆よりも、かの花はをんなである、あまいつめたい空氣をふくむでゐるをんなの夢である。

色つぼくて、又水のやうに移り氣な僕の熱情は、いつも其の花の群がりの風のなかにひそむてゐたがる。宵の感覺的な婦に傷められては、無爲の雨の日を其のあたりにひそませる。そして昆虫のやうに遊びまはるのが僕の知覺である。

——うれしきもの雨の中のひそかに癸かんとする水の花。

あまりに熱き風をさまし

古び行く日々の夢を洗ひされよ。

そんな氣になつて、一莖の雨久花をちぎつてくるこの頃の僕である。

一 重 帶

一夏、一重帶のままで生きたいものだ——と感ずるやうになつた。起居がすずやかで、自由氣儘に雨をかんじ風をふくみ、うすくれなるの花のやうに、どんなに幼稚でもよし、又少しの食しさをも辛棒する。そして幽居名を用ひずといふ程でなくとも、あたりかまはずに生きてゐられる暮しが望ましいのである。もう決して巷の仇な情鬼にふれたいとも思はないし、さりとして人の世が重荷になつて、隠棲を欲したり、批評の白眼をより廻さうといふのではない。ただ安易である。たやすく静かにゐるといふだけでよい。何をかんじ何をしようとかまはないのだ。只人を傷けず、自分も又傷けられないで、甜瓜のやうに碧天の蔓にぶら下つてゐられたら、何を望まう。身にはよく洗つた麻か木綿一枚、それに藍の竹が染めてあるのもよし、又雨の模様がついてゐてもよい。座つて暑くなく、歩いて涼しいといふ程度のもの、それにくるくると蛇衣ほどのかるい帶、それを強く締める必要もなし、ししむらの瘦せを氣にすることなく、のんきに腹へ巻きつけて、いつずるくくと落ちようと、晝顔の蔓ほども氣にかからないといふ風で、朝と夕をむかへ

たいのだ。客はすぐあぐらをかいて寝そべるくらゐの用件しか持つて來ず、酒あれば輒ち設け、酔へば我眠らんとす、卿よ去るべしと云つた陶淵明の放言あたりを戒として、一日詩一篇、冷汁、膾、豆腐は三季にわたるもよしといふから、卵に川魚ぐらゐで、あまり女房も叱らず、母や下婢は宵の燈に遠くあるもよし、窓あけ放つて、星を蚊帳の螢に、あら樂しや——ぐらゐのことをいふ。詩を説く必要のない。賣る悲しみのない生活がほしいのだ。

然し煙草のけむりは夕顔ほど白く、髪や髯はいつも蘆荻を刈るやうにさつぱり、眼は針の穴ほどの花萼もよく映して遊び、耳は生れたての蟲の肢音をも愛さうし、齒は生桃をがくりとやれるくらゐ壯健でありたい。それでないと精神は、山野の草木の響きに調和しないのだ。

二

行かれたら田舎へゆくのもよい。氣易く居られる。いつでも歸れる。さういふ處でお寺の居候もよし、地主の逗留客でもよく、又偏邊な田舎宿でもよろしい。特に名もない村に限るといふことを條件とする。何も幽人めくといふのではないが、人の行くよき山よき海といふものは、刺激が多く、風光が明媚な處ほど長くは居られないものである。よき風光を持つ窓には竹を植ゑ、又常は閉して置くやうにいふのは眞實である。山も海をも一望の裡に收める大ホテルの露臺などと

いふものは、宴會や豪酒の場にふさはしい。人はその精神に比して三尺の窓で足りるものである。そして門に花樗の木が一本、垣に雜草、稀に安價な花卉があつて、蠅の歌もよし、蚊の唸りも是非なし。ただいつも清風といふやつ。月といふやつ。水もよい、しかし更に陰がよい。影と陰のあるところにのみ人の頭は適する。そしてまはりには日光がたつぷりあつて、木の濤の音のするのもうれしいし、ふらりと出ても、決して驚くやうな風景の断面もなく、又晝になるやうなお詠への場所はなくともよい。居ながらに葉を打つ雨の音が聽かれ、東南の風が頬の感觸を弄ぶところ、枕にした本が時にひらくと吹かれて、無爲な時間が白い雲にひびくといふあたり、雜草の中にふしぎな科目のものが發見され、麥魚や蟲どもも、同じやうな調子で生の脈搏にのつてゐると感じられるところ、一人の存在はくつきりと地に印され、精神は漠々として天に懸る。個性もない。經驗もない。主張もない。只ほんのりとした淡い情熱と、夢ともうつともない感情がゆつとりとめぐり廻り、少しのおしやべりもよし、又世界を觀察するのよし、二三日を田舎の夜の色、木木の星に染める。心象の映畫はそこで新らしい廻轉を調節し、又品質のよい生のほのほを生むことが出来る。

殊に昔の人の夏斷といふものに似て、やや暫くは不犯の清節を保ちたいものだ。情火とは習癖である。欲望とは機縁である。何も佛くさくなる必要は毫もないが、水や風や光と遊ぶで頼を頼

飽いろに焦し、胃に清純な野菜を入れて、ぼかんと草臥れたまま寝てしまふといふことは、常に放縱な暮しをしてゐたものにとつて、清氣除來である、血を新らしく、呼吸を深くする。靴もぬぎ、洒落た首飾も失くしてしまひ、焼けた帽子を、天然の草木に代へるといふことは、その夏を美しくし、その精神の運動を、季節や日月の天然色に代へることである。

III

今年は情火もしづまり、氣芬が沈靜に傾いた故か、夏の火の巷の美しさも思はぬではないが、硬い袴やバントを締めるのが、しみじみ悲しくなつた。やつぱり一重の帯である。繩の帯である。あてな婦の聲も行々子ほどは感ぜられず、水盤の蘆に淺黄の搔卷もたへられぬ。その燃ゆるころ、暑い紅粧べんじょうが重くなつて來た。

只平々凡々、のそりとしてゐられたら、今の私には悟道に入つたことになる。一體に調子の高い面白い愉快な暮しも悪くはないが、どうも頭と四肢が不調和で、つい奇矯なものになり易い。なつたとて差支へもないのであるが、その生理的感觸がもの憂いのである。花を花とし、風を風として、あからさまな明るい生活といふものは、今の忙しい人には至難である。殊に頭に固疾があり、感情が奇に傾いてゐる私たちにとつて、それこそ日常事となつてしまつた。そこを又還元

する。もとの古いのんきさにかへる。それが水のやうに新らしいのだ。何も寂びをした風流を鳴らさうといふのではないのである。あらゆることが複雑すぎる。悲しすぎるといふのである。もつと単一に、のんきに、自分の軌道だけを歩きたいのだ。

すだれを一つ買った。そして月と風を愛する。茶碗一つ買った。冷いものと魚を思ふ。それでよい。力のいらぬ、ふんばることもいらぬ。宵の燈を淡くして、すぐ小兒のやうに眠られる。市井の隠れた暮しがよい。大旅行も願はず、色のついた怪談も感じねば、水團扇をはたくやつてまづ／＼青田の風をほめるくらゐが關の山、あとは繩帶のまゝふらりと釣りにでも行かうといふよりほか、何も社會と自己とに願はないことだ。

蘭科と百合科

幽かで涼やかな秋がやつてくると、わたしは風を美術化したやうな蘭がすきになる。蘭といふ常緑の草本はどこからやつて来たか、蘭を見ると深い谿や山奥の、どこかほの暗いやうな、凄艶とも幽寂ともつかぬ、つめたい霧をかんじ、水や氣流をかんじる。鉢に植ゑてあつても、そのふしぎな花のいろや花肉が、青くて艶むだ槍のやうな葉と對比され、氣高い一種の蕭條とした涼しさと寂しさをかんじる。蘭はわたし達の生活よりも、もういつそ高層的な、それでゐて巖や谿や苔を思はせる冷い世界から、自然の手によつて運ばれて来た。

支那の古い美術家は、蘭を四君子の一に編入し、その風韻と單純な條葉を匂ひのよい墨で畫くことを理想にしたといふ。その感情もほのかにわかつて来た。あの風蘭といふ蘭を見ると、その感じがうす／＼わかる。風に參差して、風と冷氣を支へてゐるやうな曲り方、颯として又蕭々と垂れてゐる葉のかず／＼が、噴水状をして氣中にひろがつてゐる。あれを見ると精神が靜まる、ちつとも感情もろいところのない、凜としてゐて又風情があるやうな、どこか老いても青いといふ達者な智慧がこもつてゐる。まるでさういふ深い自然の觀念といふものが葉化してゐるやうに

あの葉の風致といふものは蘭獨特である。

然し経験からゆくとわたしは、初夏の山に咲くえびねといふ花がすきである。葉が絹のやうに明るくつて、扇のやうな、それでゐて紫と白の燕がむらがつてゐるやうな花の莖。又えびねを大きくしたやうな熊谷草。中に母衣があつてそれが扇の笠でかこまれてゐるふしぎな形。又竹のやうに節があつて、珍奇な花をつける石櫛。それに名も知れぬ温室物のうつくしい異國の蘭、熱帯的な、珍奇で、一寸わたし達の感情の及ばないもの——すず蘭がわけもなく娘たちを喜ばせるやうな意味で、わたしは剪花屋の前に立つばかり、まだすきといつても本當でない、蘭がほんとうにすきになるには、もつと精神を要し、もつと花や感傷にあきて來ないうちは眞實でない。鉢のものにしても、自然の崖や庭のものにしても、萬年青づくりのやうにむづかしい氣がする。

そこへゆくと、蘭科のすぐ隣りにゐて、ある種のものには蘭科ではないかと思ふ百合科のものは、蘭に比してずつと樂天的で、意飾があり、花冠があり、若くつて自由で、蘭のやうに嚴冬的な、又深山熱帯といふやうな、わたし達の世界よりより深く厚いものでなくて、いかにもわたし達の日常生活と並行のできる感じをもつてゐる。

たとへばあの大きい白百合、あれは高根にあつて風と戦つてゐるのもよし、又をんな達の群がりの中に、鬱々ときんいろの匂ひをこめてゐるのもよい。夏の一夜、室内に百合をいつばい生け

て寝てしまつたら、その人はその匂ひで薰死してしまであらう。それにもうすぐ春をかんじて、田舎の藪の中にほつかりと癸く貝母、あのかるい花の編笠は——そして仲のよい姉妹のやうな鳴子ゆり。風に寂しがつてひらくする。

あの白馬から鎗の裏山に、傘のやうに群がり、頂天に白い花を挿す衣笠草、古い時代の夢を伏せてゐる黒百合、雪溪の狂兒……珍車百合。おいしい莖の石刀柏（おんたかやせ）、柏（かし）、アスバラガス（あすばら）、山蒜（さんじ）、阿弗利加趣味の蘆薈、支那美人の玉簪花、さらに波斯ごのみの鬱金香、色爛たるヒヤシンズ……そこまで行くと、もう百合科と名づけられてゐても一種の妖異である。そして、あの龍の髯の紫青の玉、葱や薤の白球が……それは只分類法であつて、百合科の精神ではない……。百合は愛らしい、感情が色づいて、空氣があまい。それでゐて又蘭の隣りにあるだけに、どこか印度や支那の、古い妃めいた妖氣をひいてゐる……と云へよう。それに植物誌を見ると——兩科とも花は兩性で、種子は肉質、稀に軟骨質の胚乳を含む——とある。

わたしは夏の百合科のはなやかな世界が去つて、秋の蘭科の世界へくると、わたし達の思想も感情も、或はその感覺でさへ、年をとつてくるにつれて、かれ等と同じやうになるのではないかと思ふ。百合科のものはどこか若い、どこか新らしい、しかし蘭科は年をとつてゐる。若く見え感じられても、それにはどこか星長的な年代が、何等かの反映としてあらはれてゐるやうに思

ふ。そして兩科ともどこか東洋の匂ひがするし、片々は肉質の葉をもつてゐるのに、片々は硬質の葉をもつてゐる、色にも濃淡がある、品位にも輕重がある。匂ひにも響きにも相違がある……。そこで、百合科から蘭科へ——自然わたし達の好みに移つてゆくといふ感情の根本の原因に、かれ等兩屬のふしぎな歴史が畫かれてはゐまいか……といふ。これはまあ詩的遊戯だ。が、然し、古い世界にある無言の秘密のうちにかずくの物語があるやうに、かれ等兩屬の分水嶺、さういふものがあるなら、そこから妖異をふくむだ植物の世界のふしぎな星絞と年輪があらはれて來よう。所詮、靜的なかれ等の世界は、その思想と模様と印象とによつて、わたし達の生活と交渉してゐるにすぎないけれども……。

然し……これは妄想だ。ただわたしは、百合よりも、少しく、少しく蘭がすきになつた。蘭を見るのはいいと思ふやうになつた——といふ意味だけ……。

月よし夜よし

青北風をめぐる——季よせにいふ雁のわたしといふやつであるか、漢土の鯉魚風といふのにはまだ早い。初あらしがすぎて初潮、その望の頃になると人は初めて中霄をわたる風の音に氣がつかう。その青北風といふやつ。まだ青芬ともえてゐた樹々の葉がやや確くなつて日にきら／＼。その針葉類の影のあひだから、清涼とした氣分がひろ／＼とでて、どこやら川魚の匂ひがする。まだ暑いですなあと人は喘いでゐる。がしかし、青栗はその針を強くし、胡瓜の最後の花が眞鍮のやうに硬い。もう秋だよ。秋は蝸の毒が天から雨るとの事ぢやといふ。その絲花の葉の音がこわくなり、柘榴がかつと紅玉をはいて、黄道がややうつりかはり、青空の色が心持ちうすく、亞熱帯のやうに夏はばやける。立秋はもうとうの昔、さう思へば二階からでもものを展望してゐると、まつ毛がつめたくなつて腫子がうすら青くなるやうな氣がしてくる。その青北風に洗はれると、花も硬くなる。をんなもうすら青くなる。幼い者は氣がつかないでゐるが、少し季節の色あひに注意してゐる者には、その青北風のくる窓や戸袋のあたりに、いつともなく昆蟲があつまり、ものの色艶がすくなくなつて、獨りで坐つてゐても、いつか手が瀬戸物のやうに心地よく膝

に置かれるのを發見する。その青北風が感情に吹いてくると、書く詩も色あひがかはり、文字が季節につれて清奇な聲をもつやうになる。その年齢の羽によつて秋の風物がさつとひらけ、つめたい細緻なものが眼に見え、ひびきのある、うすい匂ひのある、蘭科のもの、花がおもしろくなり、うす／＼と透明になつてくる自分の感情を、花が蔓を見兄が妹をみるやうに冷情的な愛感をもつて袖にしめる。

露寒み——その秋意は凝つて、いつともなく身に露霜をかんずるやうになる、十月の旦のうすら寒み又日の暮れの肌寒み、季節はあたりしく呼吸機關をかへる。そして霧をつくり風を刺し、草花をもつて雪線的な川を空中に劃かうとする。ごらん。さうなるとをんなの人はいちばんに露をかんじる。水からでもあがつて来たやうに空氣に刺戟され、肌を怖がり、あたらしい袖口をかへたり、猫のやうにやはらかい毛糸の編物にとりかゝる。男だつて市井の暗にゐるものは、早くもふんとよい匂ひのする黄金いろのお酒がほしくなつたり、鐵瓶からあがる湯の絲のやはらかな曲線から、ふと思ひだして、きから茶のご飯でも炊かないかと女房にいひつける。扇はどこかへやりばなし、葭戸をはづして、美濃紙の手觸りがうれしくなり、今まで寝そべつて散らかした座敷も、少しきちんとして、もう梅嫌ひは赤くなつたか知らん、山歸來でもとつて来てと、もの本にある宗匠めいた事がしたくなる。

秋夕夢——その秋の夕のほのくれ、鴉が枯枝にとまり、路に行く人があらうがなからうが、昔の人のいふやうに、それは一寸と怖い。非現代的な男は、いつも何かのものの調子から、ひよいと獨り置いてきぼりを喰つたやうに、どこかでそれを感じ、一年に一二度はそのつめたい味氣な秋夕夢に耽るやうな破目に陥る。それは料亭の庭のある離れであるか、人の下宿であるか、又今更顧みる自分の部屋であるか。ともかくもさういふ夕に限つて、春のやうな、水に映るやうなあかるい回想はなく、はつと振りかへるとうしろに虚無といふ奴が見えるやうな、巴を宇宙にぶらさげたやうな、手のやり場もなく、さりとて瞳人語の主人公のやうに瞳子が遊びにも出てくれず、何かぶつんと糸がきれて、やつと自分自身につかひ棒をあててゐるといふやうな時。いよいよたまらなくなつて、倦怠をぶらさげ、無目的の花を靴の先へつけてふらりとでる。さういふ時に本がよめたり、ものが考へられたり人と話しの出来る人は仕合せ、さもなければ無明の幽鬼に引さらはれて、自分の魂魄の行方も知れず、我れと我が姿を現象界に捜しもとめるやうな事になる。がしかし天然は有難い。都會へゆかず野原へゆくと、そして何か一つでも眼につくと、うつかり無我になる。ばつとして自然燦爛、光々しい夕に思はれたり、いやに物みなうつくしく、こんな世世があるのと思ひ、感情の鳥は草と水平線のあひだにとまる。感覺がうすく觸官を洗はれ、草の穂や實がへんにうつくしく、その機能にびつくりしたり、昆蟲や花の事が今更大變な

事のやうに感じられたりする。この穂の細工、この實の建築、この花の形、やあ、この中にこそ世界の祕密が一切完成され又調和されてゐるではないか、などと空想していつの間にか自分が大氣になり、透明な夕映えになつて、萬物に觸透する。秋夕夢そのものの容積になる。

が、失敗としたら、その気分はたうていをんなの人や單なる知己にあつたとて癒りはしない。退屈は人でまぎれる。しかし寂寥は寂寥そのものの自然の中でなくては癒らない。仕方なしに、趣味のあつた、性感も又氣分もあつた男と、何かしら悲しい玩具に倚らなければ癒らない。そこで其奴を誘ひだして、芝居でもなしシネマでもなし、さりとて阿嬌をといふのでない。古風なかれ野見物でもやらうとする。あてもなくふらりとでる。この頃のわたし達はさうして片田舎の、かう古い置きつばなしにされたやうな旅籠屋とか、めしと書いてある古風な立場茶屋、又は社や寺の近くで、一年に一二度しか忙しい日はないといふ講茶屋。それを八方捜しもとめて、こしきとか中汲みがあれば猶よし。煮ずるめに芋がら、杉の匂ひのする田舎酒をもとめ、すばらしいやと舌を鳴らす。さうだ。今夜は十六夜だと初めて氣がつき、そこでゆう／＼月の出を木と藪の中で待つことにする。

月よし、夜よし——さて夜である。秋は月である。いかに江畔初めて月を見しこのかたいくばくぞといひ、連俳詩戯に曲を盡しても、今人未だ月を否定せず。その若いいろの、玲瓏のまんま

るの、空中を航海する光りの羽で帆製したやつ。その光りの頭にしみる、その幻の燈明臺、信仰の帽子のやうにうつくしい。その月の出を幼いくらゐな感情をもつて仰ぎ迎へようとする。まつたく童だ。あたりはよし、月はよし、しかも夜の岸に立つとふしぎに清怪な感情があふれてくる。ものの中にふくまれてゐる彬かがさんらんとわかり、麥や葱の花ほどこまかな情奇も身にうつる。そのものの影繪は、又心の影繪のやうにちら／＼。心は又自然の清涼な藍やうすい青みをよくむで、つめたくはあるが、しかし水の深みのやうに靜まるので、青い竹へよりかかつたやうにおのれがよく解る。そこで回想もよし、漫談もよし輕口冗談さては思索もよいといふ事になる。そこで歩くのだ。月夜の濱を抱いたやうだといふ木棉畑もよし、又墨滴淋漓としたがさ藪もよい、泥繪いろの長屋もよし、顔のうつる川もよし時計のやうな池でもよい。くる／＼と歩くと、月も航路を高くする。ばさとしてさあ。露つぼい身になり、妙にきら／＼かがやいて、さて月の光は生理的にまで觸透する。その月の夜の味はたうてい藝術を天に昇華しても及ぶべくもない。やむを得ず、いい月だとほめる。川瀬のやうに雲がきら／＼するといふ。惜しいなあ。何が惜しいのかわからないが、あまりに惜しいといふ感じになる。あまりによい色の光りがたつぷりしてすき透つて、もう身も世もなく惜しいなあと思ふ。美人、花寶石、そんなものの比でない。あまりに近くもあるし又高遠すぎてもゐる。幽懷遂に空の空なる哉。やむを得ず首をたれて、草

の露をみる。樹を見る。小さいつめたくなつた身體と、その中に宿つてゐるとされてゐる思想とか感情とかを檢閲する。しかしそんなものが固まつてあるものでなし、いつか花やいだ情慾といふやうなものもみんな消えてしまつて、もう感管はただ蒼爽とすき透つてゐるばかり、すつかり洗ひ清められて、小さい哀れな動物になりすまし、一二正直な寫生のほくでも空中に書きすてふらりと家へかへる。寢ようとしてもまだ惜しい。二階から物干へでて、青い猫のやうにうづくまりながら又見上げる。どう凄じいくらゐ美々しいこと。とう／＼仰ぐに堪へられなくなつて寢てしまふ。十七日、十八日、二十日となると宵にもう月はないなあ。あとは又十三夜、青北風ももう西へまはり、秋刀魚のとれる、千鳥の大きくなる、蘆が花をつける時が来よう。さう思つて裕のがらを考へる。こほろぎに追はれて文債を考へる。それから女房の胴着を買つてやる心持を欲しいし、縫ひ直した羽織をださして、この羽織を仕立卸したのは、二十頃かなあと追憶する。

春風を祝ふ

生來の風狂、春がくると目的もなくかう出歩きたくなるのである。旅行といふほどの長距離のものでもなく、さりとては散歩といふほどのものとも異り、かう一日か二日目的もなく歩きたくなるのである。もちろん名のある所を選ぶのではなし、たとへば府中街道の大櫓を見ながら歩くとか、相模川のほとりとか、或は伊豆の山梨の花を見て歩くといった工合で、ただ美しい街道があればよし、なければ小さい村々を突ぬけて、平々凡々な田舎景色の切斷面色にふれ、春風に祝はれた氣持になつて、日常の環環を飛び出したいばかりである。

古くから街道は歩く人のものとされてゐる。その一步から世界は初まる。そして歩くことはこのテンポの早い都市生活から埒外へ出る事でもある。時代の廻轉の速力からぬけ出る。さういつた安逸な氣分が伴つてなるべく都會から離れた所を選ぶやうになる。ふしぎな事には電車や自動車を利用せず、半日なり一日なりの行程へ乗り出すと、日常生活のリズムがいつの間にかほどけてしまつて、調子のゆるい、恬淡としたのびやかなものになる。そして一段と調子のゆるい田舎

の風物に吹かれて歩くと、都會の生活などはいつの間にか夢のやうに天上へ飛んでしまふ。そこには街道の調律がある、田舎の時間がある。それに一致して歩かないでは、ちらほらする路上の人物も、垣の花も、鶏も、又田舎の人の聲や表情も解らない。先づその風を纏ふ、日の色に染まる。森閑とした天の時計にリズムを合はして、雲の形なり川の流れなり身を托す心持である。この忘我的な、安逸三昧の気分といふものは、大きく云へば自然の門に入ることであり、主観的には自己の騒音をふるひ落し、日と風に心を洗ふことである。もちろんそれは虚無的である。易々として無爲の境へまで達するの謂ひである。しかも今日こんな放心の徳を稱ふるまでに、我々の生活は苦しく悲しいのである。

然しそこには人生と自然の接觸點があり、人間の騒音から一步で無限の寂寥に踏み入るの門がある。街道にはその古い歴史があつて、歩く者の後ろから往古茫々たる陰影がついてくる。そこで我々は過去の自分に逢ひ、又それを振り棄て、未知の自然の路をゆく。そしていよく清新な自然の運動やあざやかな物質の生成を視る。地は花を生む氣温の飾りをつける。そこからこぼれてくる春風は、草も小鳥も一樣に、我々にまでいつも新しい生活の息吹きをもつて、この地のいつも健やかにして青々としてゐることを示してくれる。我々はそこで天を呼吸し、地を抱いて、遙か下方に蹴りすてて來た社會的な種々の妄想を洗濯するのだ。その境に至れば白日必ずし

も遠きにあらず、天も亦決して一つの丘より高いとは思へなくなる。

二

三月初めの田舎の、その幼い、あざやかな、自然の花文を見てあるくほど清らかなものはない。先づ佛の座が花をつける、梅が星をつける、木末がほろと赤くなる。キラリとしたもの、酔いやうなものが感じられる。冷く、強い、滲透したものが樹液のやうに身に沁みる。そこに無比の日光が群がる、匂ひのよい風が川から峽からやつて來て、うすい桃色のやうにはんなりしたものを立置める、さうした背景に身を擦り寄せて、我々は乞食のやうに風狂のやうに、街道へ乗つかつてゐると、もう何等の欲望もなく又期待もない。日のある限り、暇でも田舎町でもすた／＼と通りぬける。名所何するものぞ、遙かの街道のうねりと、天の弧線、それだけが淡い憧憬と深い吸引力である。さうしてゐる内に、行商人、馬子、乞食、子供、農夫、放浪者などといつしよになる。田舎茶屋で食事をする。蜜柑などを頬張つて、又早春の燈のつくところまで辿りつく。新しい土地がある、古い町がある、昔の什器がある、家の造り、橋の懸り、寺がある社がある、樹を見る、そこに春が幽かに纏ひ、いつもあたらしい感情を畫いてゐる。瑞木の花、胡夷、連翹などが燃えてくると、もう梅や梅が悲しくなる。その自然の繪模様を半面に映し、我々はより幼い感情にかへ

つて、鳥のやうに田舎を縫つてゆく。そこに村の年齢が感じられる。歴史の巻尾がチラと見える。日本の過去の生活の切口がまだ田舎には散在して、日の光を幽かに受けてゐる。社がそれである。神々の交會も感じられる。象徴文字が天然に發見される。しかし我々は考古者ではないし、句作者でもなく、又畫家でも寫眞師でもない、決して一つに拘泥してはゐない、ただ漂流する、氣分のままに會得する、そして美しい空氣の中に交差する萬象の本源に立入つて、天の頂點と地の極地をあるく。氣に入ればその町に泊る、いやになればすぐ汽車を利用して歸宅する。そして時間のあるかぎり、わづかな金をもつて歩く、私はいつも春がくると必ず二三回はこの行を繰り返すやうになつてしまつた。

こいつは何と名づけてよいか、旅の一步手前のもので先づ散策の延長にすぎない。かつては秩父、房州、伊豆、遠く飛驒、西近江路、大和、などを試みたが、それは又旅寢つづきになつて面白くない。最もよいのは矢張り、武藏野、相模野、千葉方面、八王子方面である。それから私の好きな東海道、そこに春を迎へて歩くのだ。どうも春は南へ向いた方がよい。修善寺から下田へ歩くのも非常によい。そして一日二日を費して、鬱積してゐた冬の感情をさつぱりと洗ふのだ。そして春といふ新しい認識をくりかへす。無學菲才、貧しい我々には、先づこんな調子で春風を祝ふことが何よりの情緒である。

海 扇 譜

二つの手をぐつとひらいたら海は扇に見える、青貝の扇になる。人は一點の要。何の色に塗つてもよい何を書いてよい。この自然の水の扇は泥藍の恐怖に搖れる。鹹のつよい呼吸に搖れる。それは激昂しやすい神の扇だ。外國を感受する發光體の扇だ。

人の耳は貝である——と謂はれる。つねに海の音を戀しがつてゐる。海の夏は波濤の祭り、ろん・ろんと樂器を鳴らしてゐる。海岸線は海の市場の入口。人は耳の貝をたててその祭りの太鼓をきいてゐる。

海の水はどうして鹽からい。あれは悲しい船員達の涙だとよ。

海にはどうして風がある。あれは世界を腐らせないやうに潮が身ぶるひしてゐるのだとよ。

陸から見た海の文學はたくさんあるが、海から見た海の文學は乏しい。海といふものはいつも

未完成で、初めの終りを象どつてゐるから、そしていつも激昂しやすいから、海から来た海の文學はなか／＼波止場へあがつては來ない。

日本人の文學は凡て海を恐怖してゐる。海は地獄であることを歌つてゐる。そして海に向つて八月精靈のための火を焚く。人の死を美しい海で洗禮する。小泉八雲は又それを褒めてゐる。

日本には純粹な海のジブシーがゐる。かれはいつも三日月形の青塗りの船にのつてゐる。赤い帆をはつてゐる。然し政府も普通人もそれを感じてはゐない。かれ等はいたるところの無人島に小屋をたてて妻子を養育してゐる。各地の漁港の人はかれ等を雇ふことを知つてゐる。かれ等は海へ潜入して、網の口を結んであがつてくる。その子は賣買されてゐる。夫妻は財産を別にしてゐる。かれ等は赤道直下からベレーリング海峡まで跳梁する。かれ等とは琉球の糸満人、偉大なる海の王族。

凡てのものの表情はやつぱり海から上つて來たやうに感じられる。ユーゴーは人の表情は牡蠣から驚に至ると書いてゐる。植物も海藻からやつて來たと謂はれてゐる。動物も爬蟲類から上昇

したと謂はれてゐる。

私はこの頃毎日海を漕いで釣りをしてゐるので、たまに都會のビルヂングなどにのぼると船に乗つてゐるやうな氣になる。窓の草の花がそよいでゐても太平洋の風を感じる。月の居所ですぐ潮の干満がわかつて來て、私達の運動が魚とちつとも違つてゐないやうに感じられる。

マゼラン海峡には岩で出來てゐて、誰もゐない海の郵便局があつたさうである。今は船中に郵便局がある。隣りに床屋がある。郵便局から床屋へ行つて、更に酒場へ出かけると恰度二三時間散歩が出来る。そこから手紙を出すのもうれしいことの一つであるが、むすめは軍艦へ手紙をだすのがうれしいと謂つてゐる。更に船の圖書館へ好きな本を寄贈するのがうれしいといつてゐる。

夜一夜岩壁によぢのぼつて釣をしてゐると、凡そ海くらゐ機嫌買ひな奴はないやうに感じられる。敏感で發光しやすくて、色を變へること、すぐ激昂すること、いやに黙つてしまふこと。どうも人間のせはしない五官では受けきれないやうな時がある。方に第七感以上の感覺を働かし

てゐなくては、たうてい海と格闘することも手をとることも出来ない。

海がどこまでも處女性を發揮するものであるといふことが解らなければ、涼しい星座の下にはたへられるものではない。戀の匂ひのするのは海岸で、海中に至るとただ男も永遠の處女性といふ觀念でゐないと、たうてい海とは一致しては行けない。すぐ上機嫌になり、すぐ激昂し、そしてろんろんと鳴つてゐる海、氣中にゐる鳥でない限り、地に足をたててゐる私達には、その鋭敏な感情の敵ではない。海といふものはたうてい書けぬ。

婦女歳事記

紫草がさびて、もうそろ／＼蕃椒、新綿に柚の香だ。俳句でゆくと北窓を塞いで、爐を開かうといふ。世事に敏な婦人が障子を張つて、部屋のうち膳のものに、秋を整へ、新しい袷に露を寒がる——さうした感じのするをんなの人は、何よりうれしいものである。

よし茸がどうで、又秋刀魚の價を知らないと云つても生れつきの天品で、季節に鋭敏なひとは戀しい。西洋ものも御存知ないといつても、烏瓜が化粧料になるくらゐの智識でよい。やつぱり炭のつぎ方の上手な耳と爪に垢をまたない婦人はよろしい。つく／＼ばうしから赤蜻蛉、雁が來て夜長のともしびの味ひ、蕎麥が新らしいといふくらゐのことを、わかい人にも感じてもらひたいのである。流行の鈴蘭はさて置き、道のべの花咲く秋に、雑草の美しい日本を感じ、蟲や花にも一寸と親しい挨拶をしてもらへたらそれでよい。何も舊にかへれといふのではない。古い婦人は全く駄目、お會式の櫻がどうの、よしこのがといつても、さてあとは又白銀の贖物である。私のお願ひしたいのはみづ／＼しい若い娘たちが、あたらしい郷土の歳事記を感じてもらひたい

ことだ。ほんとうにその感覚で、その觸手で、おいしい魚をもしろい蟲や花を、そして障子で張つた明るい家の中で、銀河のうつくしい、植物に彩られてゐる私たちの床を、青北風のやうに、時雨のふるやうにいそしみ悩むでもらひいことなのだ。

をんなの人に方位感覚がないといふのはよろしい。しかし季節の感じのうとい人は花を畫いて丹青を入れぬやうなもの、ただ艶冶で上品でといふのでは露がない。半襟好みの上手なその身の稿柄をよく知つてゐる上に、ものすさびの風韻を知つてもらひたい。酉の市の、べつたら市といふ柄でなしに、さりとて萬葉で來られても弱るが、ごく家常茶飯事でよろしい、日本の秋の、その匂ひが、そのひびきが、どこやらに身に應へる人であつてもらひたい。と、まづ謂ふところは、娘節用ならぬ、婦女歳事記の必要である。

洗耳記

一、文語人

G市の日刊新聞主筆O氏は、全くの聾者であつた。

——予は十三歳より單に世界と人間を觀つた。

彼の表情は語つてゐる。全く十三から聽覺を失つて、只好める文學によつて、文字と印刷の世界に閉ぢ籠つてしまつた。

——予は文學によつて世界と人間とを聽けり。

彼はその時代の文語調で世界を學び、又人間の葛藤を経験した。世界は印刷物によつて展望され、人間はその言論の文章化によつて彼と交際した。

——予は新聞業者なり。新聞は社會萬般の最新報知器であり、又人類の教科書なり。

彼の勤勉は語つてゐる。そして全市の報告を集め、文字によつて批判し論攷した。

——予に君の所感を語れ！

彼は紙と鉛筆を突出す。人はそれへ重要な單語をしるす。すると彼はそれを直覺で文章化し、

稻妻のやうに理解する。

——大によし、君の厚意を謝す。

彼は喋舌るのである。それが一切文語である。口語體の文章はくだく〜と重複するので彼は一切を文語で語る。それが簡單で、又迅速だといふ風に。

僕はこの人を見て、突如として一つの衝動に撃たれた。

O氏は常に絶對靜寂境にゐる。世界と人間とに透明な斬壕を隔ててゐる。通信は常に文字と印刷である。従つて彼の喋舌ることは必要でない。いかに文學が口語體の世界に進むでも、彼は口語を聴くことが出来ないで、又口語で答へる必要がない。口語とは耳のある世界のものである。耳がなければ音韻に責任がないし、又己れの聲をも聴かなくともよいのだ。

——予は常に文語を愛せり。

彼の經驗は語るものである。僕にはそれが痛ましくもあつた。がしかし又うらやましくもあつた。それでよいのではないか。僕達は一つの發想器を持てば、即ち一つの詩語を持てば他の器官は封じられても生きられなくてはならない筈だ。それが最も單純で、然うあるべきである。僕等は世界と人間を聴きすぎる。即ち音響に勞される。音樂に惱まされる。それが常に無意味に聴いてゐる時が多いのだ。O氏に對して恥づべきである。

——貴下は何をもつて最大の快樂となすや？

——文によつて世界と人間とに觸ることなり。即ち心の響きを聴くことなり。

——然し、毎時生活上に不自由なきや？

——大にあり。されど予はそれに屈せず。

僕が書いて、彼が喋舌るのである。それから彼はその不自由な經驗を語り、何人とも強い握手をかはして、その眞剣な飾りのない態度を示すのだ。

僕はG市に来て、このO氏といふ人の生涯を見、その生々しい心境にふれて、大に感動した。

——さう、世界と人間は線と色彩の運動だ。

文字と文章が響きであり、會話であり、又音樂でもあるのだ。

さう觀念しても生きられるのではないか。全く耳を洗へ、俗耳を斬り落せ、文には響きもある音樂もある。結局文人はそれによつて生きるより方法がないのではないか。

僕がこの耳の必要でないG市へ来てO氏と逢つたことが、二つの象徴劇を見るよりもより迫つた眞實感に撃たれる原因であつた。

むかし許由といふ男が隱棲してゐると、皇帝が来て政治を輔佐する役になつてくれないかと頼みに來た。許由は斷然それを拒絶した。皇帝は失望して歸る。その皇帝の白馬が隠れゆく林を見

送り乍ら、許由は悪い事を聞いたといつて、川へ出て自分の耳を洗つた。すると一人の隠者が現はれて、許由も未だ／＼人間臭いぞと嘲笑つた。

その嘶を僕は思ひ出した。そしてO氏に響者が聞えるといふ聴聲器が、阿米利加あたりで流行るといふことを知らせるのを躊躇した。何故つてその時の僕は、全く耳を洗つて、改めてO氏のお弟子になりたいほど、講演といふものなどに弱つてゐたからだ。

二、昆虫博物館

次の日、いよいよこのG市では耳が必要でないといふ、もう一つの理由になるものを僕は見た。

それは名物の昆虫館である。N翁個人で採集したものが、今は財團法人になつてゐる。外國に買ひとられないで幸である。これは日本の誇りだ。由來日本は昆虫に恵まれてゐるので、少し世界的といつても過言ではない。G市の停車場に名所案内欄を作つて、昆虫博物館を掲示するやうに、僕はその市の雑誌を通じて市長さんに願つて來たくらゐだ。

そのN翁の孫にあたる童謡作家N君の好意で、僕はその特別室の標本をもすつかり見せて貰ふことが出來た。僕は耳を失つて一心に二時間近くも千百の昆虫を凝視した。そして今更らフアブ

ルよりも驚き、昆虫學の本そのものよりも感動した。

——この思想と擬體はどこから來たか、更にこいつらの器官は何から來たか。

僕は昆虫どもの裝飾に驚き、その形態にすつかりまゐつた。そこには兵隊がゐる。騎兵も水兵もゐる。巫女もゐれば僧もゐる。火星人もゐれば土蜘蛛民族もゐる。翼をもつ奴、翅綱をもつ奴、足長、手長、大眼玉、細腰、壺形、飛行機形、タンク形、氣球形、箒形、紐形、花形、鳥形、爪形、犀形、熊形、魚形、こゝにない形態は、又この世界でも考へ得ることの出來ない形態である。借問す、君の詩形とは如何、君の文體、文脈のそれとは如何——さう昆虫どもは叫びでゐるやうだ。

殊に僕は自分の好きな蜂と虻と蟻とを、思ふ存分見た。蝶は蛾がまぎらはしく、甲裝類は動物的で重苦しい。やつぱり飛ぶ奴、螫す奴、きりりとした奴がたまらなくよい。その蜂の美少年振り、その虻の田舎ぶり、その蟻の工人風俗には、いかな夢想家も及ばない擬體と裝飾がある。みんな帽子に羽毛飾りをつけてゐる。身體に光粉をぬつてゐる。いかなる工藝美術も及ばない肢翼をそろへてゐる。こいつらが僕達の眼界を四季を通じて飛翔し駕走してゐるのだ。そしてどうです詩人諸君、貴郎のお作は——と云つてゐるのであるが誰も蝶か蜂か虻かぐらゐしか見てやらうとはしないのである。

——かうなると詩人たるもの愚弄されてゐる形だ。少々まわつた。まづ肩標をはずさなければ友人を顧みていふ。その友の顔が既に蟬であり源五郎であり、きりくすであつた。

——N君は毎日何をしてゐます。

——童謡と童謡踊を考案中です。

——モデルがこんなに豊富ぢやありませんか、負けないでやるべしですね。

——それが、どうも。……

少々N君がうらやましくなつた。昆虫詩集を編むにしても、二十四萬の數と二萬何千の科目がある。然も日本固有の産が又千種を下らないのだ。

ここでいよ／＼耳を洗ふどころか、耳の存在を失つた譯である。Y君もI君も少年時代によく昆虫を捕へて來ては、このN翁に一錢二錢で買つて貰つたさうである。この翁の遺業はこれだ。そして孫のN君が又詩文家である以上、この無聲の、運動を失つた千萬の昆虫に、その本然の聲と律動を興へたなら、すばらしからうと思ふ。

——あれに聲を吹き込むのだ。言葉を興へるのだ。それが僕達の義務であり仕事ではないか。博物館を出てから、僕は青空を仰いで唸つた理由である。

全くG市へ行つたら、O氏に逢つて、それからこの昆虫博物館に寄つて、一つづつ新しい詩形

でも文脈でも勉強してくることだ。そして大に俗耳を失つて、天來の聲をその名のある山川から聽いてくることだ。

治水の聖

一

美の神は川の泡沫から生れた——と古代から謂はれてゐる。海と山とをぬかして、どんな名のない村にも川はある。そして四季を通じて美しいものは雲と花と川だ。地圖の上に靜脈のやうに青く線描されてゐる川、私は子供の時分から妙にその川が好きだつた。どんな處へ旅行しても、私はまづ川を注意する。川によつて開展されてゆく風色を見る。地勢を按ずる。その上で地上の生きた搏脈ともいふべき川の瀬音を聴き、その村の地文の美と力を攷へる。海や山は人力の及びもつかぬものであるが、川は自然の力と人間の智慧が深い一線に於て合致してゐるやうに思へ、その土地の盛衰に重大な均勢を保つてゐるからだ。

川は自然が描いた自由自在な花文である。山を旅行して見ると解る。必ず川について道路が拓かれてゐる。即ち川の流に従つて路も流れてゐる。平野へ來ると川は地床の高低に就いて海に入るが、とても想像のつかない曲折をもつて流れてゐる。世界に於ける大河は知らず、一地方の、一部落の、その川の曲線を攷へ、その川の生命や美を發見するのは愉快なことである。以前から

私はよく多摩川や相模川を歩いた。今でも一竿を携へてよくその支流や野川を歩いてゐる。そして川にもいろ／＼變化があつて、死んでゐる川や生きてゐる川が歴としてゐるのに驚いてゐる。殊に冬は川が涸れる。石床を露はにして冬ざれ色を遺憾なく晒してゐるのもよいが、私には冬も曲折地帯に碧潭をもつてゐる川がたまらなくよい。より清くよりよく流れてゐる第一等の川もよいが、水清ければ魚がゐない。ところが川として第二三等に位する奴には、必ず瀬もあり曲折があつて、魚の巢もあるので更に面白い。然しそれは措くとして、川としてその使命をより美しく發揮してゐる奴には少々頭が下る。灌漑十里に及ぶものは二千町歩の水稲を利する。農事開墾の生命である。事實を事實以上に貫流してゐる。

川を美だ藝術的だとする見方から、更に一步深入すると、農政の水利、氾濫の水防、治水に依る川の開墾といふことが、又より自然の力を奉じた創作であるといふ考へが起る。新らしい川を創る奴は偉い。地に向つて天の文字を書くのだといふ氣がする。川床や護岸工事もむづかしいものであるが、新に要水を開墾して水利を運轉させることは難事である。さういふ川が私の知つてゐる限り、私の市に一つある。その川に就いて私の感心してゐる事を書きたいのだ。

二

夫は俗に稻毛川崎二個領用水と謂はれて、多摩川上流の稻田村から分岐し、市を貫いて八方へ灌漑し、延長支流を合して八里を算すといふ幅二間とはなぬ川である。私は此奴のよく流れるにはいつも驚いてゐる。これといつて堰もなく、又高低もないのに、巧みに多摩川の傍を本流よりも強い水勢で流れてゐる。全く土地の者でない限り、そんな川があるかと思ふやうに、藪をくぐり藪を貫いて、ある時は本流よりも高地を、ある時は全く一里近くも他へ分離して、冬も涼々といふより燥々といふほど流れてゐる。由來私の市は地下水が悪いので、この要水を既に二百年間も飲用とし、水道が完成されるまでは、この水を賣つて渡世にする者すらあつた。

その水賣が市中を歩いてゐた少年時代から、あの川は田中丘隅が掘つたのだといふ事を聞かされてゐた。そして私と小學の机をならべてゐた子が、その丘隅の子孫だといふので市の建碑のあつた時、その子が青漢をたらしめて參列したのを覚えてゐる。それに私の家が川崎の上本陣をしてゐたといふし、丘隅は下本陣の養子であつた。今もその死後二百年にして國家から表彰されたり、市誌に名を留めてゐるが、私は近頃になつてこの丘隅老人の偉さを感じた。一つは附近の村々の風致を破壊して、猶得々としてゐる耕地整理の縣の土木技師が、碁盤目に田や川を整理したのはよいが、その水が少しも流れず、又灌漑に何の役にも立たず果ては夏でも枯死してゐる小川を、あまりに見せつけられる故もあるが、老人が掘つた川は二百年後の今日と雖、何等の護岸工

事をせずとも、地味の悪い土地の上を隆々と流れてゐるからである。ふしぎによく流れる。ふしぎに埋れない。よく竹藪や雜草工事がしてあり、今日の技術や土木機具がなくとも、天然を利用してかつちりと出來上つてゐる。その自然を洞察した眼である。よく自然力を利用した智力である。老人は實によく觀察し、根氣よく地に天水の路を掘つた。水は少しも不平を云はない。降雨も猶老人の意に従ふかのやうに、りう／＼と自在にその行くべき所へゆく。彼は地と水とを知つて生かした。南方武藏の新田二千町歩を救つた。そしてよりよき水を町民に與へて死んでいつた。

三

この老人の事が、「先哲叢談」や「譚海」に載つてゐるといふ事を、市の人は近頃になつて知つた。略傳には——田中丘隅、武州八王子の人、後川崎の里正田中兵庫、請ふて嗣と爲し、妻に女を以てす。後義父に代りて里正となる。能く其任に稱ふ。閭郷其惠に頼る。正徳中江戸に遊び物徂徠の門に入り、後成島錦江に學び歴史を講習して止まず。邑中子弟に諭告し、勸るに孝悌力田を以てす。都令、奉行大岡忠相嘗て幕府に丘隅の用ふべきを言ひ、併て其著す治民策を上る。大に旨に愜ふ。享保癸卯召されて農政水利の要を問ふ。丘隅諱を避けず、忠告懇々皆時情に切な

り。荒川を治め、又酒匂川を漕はしむ——などとある。

彼は荒川の水防、多摩川、酒匂川、伊豆の狩野川等の水治に力を致した。酒匂川の護岸工事には最も努力したらしい。今でもその碑があり古く禹王を祭つた撰文が徂徠の手で残されてゐる。禹王水を治むるや塗山に娶り、啓（その子）呱呱として泣けども子とせず、外にある事八年、三度其門を過ぎて而して入らず股に肉なく脛に毛なし——などとある。その治水の聖禹王を念じて、彼は六十二歳にして起つたのだ。徂徠が二十五歳で有名である時代に、丘隅は白髪を振つて「民間肖要」や「民治策」を書き、腰を曲げて酒匂川や荒川の大事事を指揮してゐた。

後に帯刀を許され、吉宗の江戸入りの時から川崎の里正として驛遞の事に心を盡し、問屋場役人として交通に勉を致した。土地繁榮策として遊屋を置き、六郷川の永代渡船賃を町の爲めに建議し、義田を作つて飢餓の救済に力を盡したり、實によく働いた鋭い老爺であつたに違ひない。

大録の人、一步の人。

天を荷ふは一なり。

とその著の序に謂つてゐるさうである。その一步の民であり、又一部落の禹王である。そして股に肉なく脛に毛なき——如く働いて努めたかういふ老人によつて、あの美しく流れるよい川が創られたといふことは、全く頭が下る。川に向つて風景論をやつたり、釣魚の通をならべてゐるこ

とは恥しくなくなる。かういふ土木治水の天才があつて、荒地に生きた川をぐい／＼と割いてゆくといふことは、實利を離れても美である。海濱の防波工事や築港事業も妙に美しいが、名もない田舎の地に、それこそ甬を分けて、竹に足を傷けて、思ふがままに隠れた美しい川を割いてゆくといふことは、實に快心的な壯舉だ。

川のことからとんだ領分違ひの畑へはいりさうだ。ただ私の土地にかういふ川掘のよい老人がゐたといふ事を謂へば足りる。私は彼に感心してゐる。

春、鶯、閑談

わが家

市井の生活に喘いでゐるをんな達はよくこんな事なら、どこかかう人つ子一人ゐない奥山へ行つてしまひたいといふ。又ちつとばかりどうにかした男などは少年のやうに、遠い／＼のんきな島へでも行つてしまひたいといふ。全く思ふやうに行かないと生きてゐる事が否になつて、ちよつと遠離の情に憑れるのだ。どこかへ行つてしまつたら、何かしら安樂なところがあるかと思ひ、又そこへ行つたら生活感情が少しは新らしくなるだらうと空想するのだ。ところがその奥山へも分け入り、遠い島にも行つて来た者には、奥山も遠い島も決して異つてはゐず、むしろ山中の不自由さ、遠い島の不足さに弱つて、やはりおめ／＼と陋巷へ舞ひ戻つて来たのであるから、この市井の生活は、もうやむにやまれぬ絶對のものとして觀念するやうになる。もつとも初めはやはり奥山や遠い島へ行つたら、この世の幸福はないとしても靜寂とか平和や安靜があるかと思つて行つて見たのである。ところが寂寥や平和といふものが、決して精神的なものではなく、むしろ非人間的のものである事がわかると、眞の寂寥や平和といふものは、その心持次第でどこにゐて

も感じられるものであることが解り、別に奥山や遠い島へ行かなくともよいと思ふやうになる。さうなつてくると、やつぱり落ちてくるところは陋巷で、その中の行きどまりの我が家といふことになる。全くもつて我が家とは世界のどん底である。ここにあつて、奥山も遠い島をも想像が出来ぬ。そして眞の孤獨を感じ、運命と死をも感ずるところはこゝであると思ふと奥山も遠い島もものは、世にも寂びしく悲しく一切の深みにあるのはわが家である事に氣がつく。奥山にはさら／＼と木の葉が明るく、遠い島にはざあ／＼と波打つてゐるが、一切のものが暗い淵のやうにかかつてゐるのはわが家である。遠くになれば心に一縷の旅愁があつて故郷や家を多少美しく彩つてくれるが、わが家にあつて、わが家の現實そのものに桎梏をかけられては、もう人間たるものゝ絶對絶命で、空想も何も餘地がない。特に家族の者の中にあつて、遠離の感情にやられたら、眞の孤獨の影をつかんでふるへてゐなくてはならない。さうなつたら我家ほど寂びしく、行きどまりの、計算され、境遇づけられたところはない。そこで牢にもなる。陥穴にもなる。であるからそこを一つ突破しなくてはならない。わが家にあつて、頭に山中を入れ、眼に遠い島をもつて、おのれの影形の頂天に立つ。それこそ我家から雲の中がのぞける。そして世界の明るみへ出られる。私はやつとそのわが家が好きになつた。この子は家が嫌ひで困ります母がいふのも、そろ／＼聞かなくなつた。全くもつてわが家にあつて、やつと世界の孤獨と自分の行きどまりを

知つた。わが家といふものはよいものである。

戀人の完成

をんなが無意識のうちに永遠の人類を生むておくやうに、そしてどこかに眞の男性といふものを、その戀のうちに求めてゐるやうに、男は又永久に女性なるものを、その精神の原型に於て求め完成しようといふ傾向がある。私の感情からいふと、どうも男性といふものは、その人類としての原型保持者であつて、その天然の原型的幻想ををんなの人に植ゑつけようとし、その誰しもが周期的に生を享けて來たやうに思へる。をんなの人は單なる戀から所謂母性の愛に變型してゆくが、決して男に父性の愛といふ特別なものはなく、男はいかに老ゆるとも、ただその原型としての女性の美をつくる慾望のみであると云ひ得る。これは美術家や詩人でなくとも誰にしても無意識のうちにあるものであつて、この本能的要求は確かに雄としての機能のしからしめるところかも知れない。男といふものはその一生を費して、どうか永久のこひ人を完成しようとするものである。をんなの人はその戀人をつくるにしても、又結婚してしまふにしても、初めはためらつたり恥ぢらつてゐるが、一度決定してしまふと案外盲目的になつて、その性の柔和か、或は貪婪の故か、なか／＼に本性へまで喰ひ入り、決して批評や比較研究をするといふ事がない。かの

女は忙しいのである。よい血のあるうちに、その使命されたる小兒を生まなければならぬ。ところが男は、初めは矢鱈に誘惑に陥り、心にもなく結婚したり、又浮氣のかずをつくすけれども、案外醒めやすく、一人のをんなの人に満足はしてゐない。彼はうつり氣である。多淫である。一夫一婦では満足してゐない。よしどんな嚴肅な人であつても、それが未發に終ることがあつても、この傾向は否定されはしない。即ち知らず／＼の内に人類の原型たる戀人の幻を完成しようとするのである。初めは美しい戀人を望む。その戀人が肥つてゐれば次に瘦せた戀人を求むる。眼が美しければ次に唇の美しいひと、背が高ければこんどは低いひと、そして自身の生理的表象と相反したものを求めて、その二個にして一となる調和をさぐり求める。この傾向は實に明かであると思ふ。故に戀は眼一つ、唇一つ、表情一つからも起る。多くの浮氣な美術家や文學者の例をとつて見ても、大きな人物となつてもうその戀人を自然に完成せしめて立派な藝術としてしまつてゐる。特に美術家はその生涯の唯一であつた戀人の面影を骨子にして、チントレットやボッチェリのやうな傾向を示し、文學者はゲーテやバルザックのやうに、戀人が變る度びに又一人づつ美しい主人公がふえてゆく。かうして男はその永久の原型としての戀人の幻を完成しようとする。故に自然によつて生じた美人は世界的な植物と同じものであるが、藝術に生じた戀人は亦萬人の戀人でありその慾望の完成でもあるといふことが云へよう。

多少病氣をしたほどの人なら感じてゐるであらう。自分をよく知つてゐる健康醫は、やつぱり自分自身であつたことを。何しても永い間、この毀れやすい生きてゐる建物を、自ら運轉し、自ら保持して來たので、いかに無關心であつても、急に頼むで來た博士よりもよく知つてゐる。醫者は只相談相手である。故に病氣がよくなつても悪くなつても、醫者を恨むだり又頼りにしてはならない。主治醫は自分である。ところがこの主治醫たるや殆ど冒險家で自分の健康を勝手氣儘に放任することが多い。自分で自分の内部がまるで解らない、外部から聽診して貰はなくては病氣も氣がつかない。そして神經衰弱や不眠症になると、初めて自分に氣がついて恐れたり大事にしたり、殆ど狂氣のやうに自身たる患者に注意する。特に人は四十年もこの人體を持越してくると、かなり方々が古くなつて修繕も加へなくてはならないのを知る。二十代には矢鱈に用ひ三十代には盛んに活躍させ、その餘勢をもつて四十代にはいるから、うっかりするとやり損じてしまふ。何でも古大家の云つた頭寒足熱だ。そして小食することだ。宵寝早起だ。精神の過勞を恐れよといふ。ところがそんな事のみかまけてゐたらなか／＼生きてゐる感情を縦横に使驅することは出来ない。生きてゐても自身が預り物のやうで面白くない。酒をのむ、熱い戀をする、旅

をする、せつせと働く。何といつても自身の健康に注意しない時が一番幸福である。薬と苦痛を豫想もせず、一切生理的な不安を忘れてゐる時ほどよいものはない。私などは今迄どうにかそれを忘れてゐたので、すつかり健康を誇つてゐたが、もういけない。どうも生命の王心臟がよくない。神經衰弱も不眠症もやつた。恥しい病も神經痛もやつた。そして身體はもうかなり外傷的にも破損し、酒の量や歩行の行程が永續しなくなつた。腦も悪からう。中氣もやつて來よう。眼も齒もだん／＼悪くなる一方だ。そして根氣もつづかぬ。二十代には徹夜して六十枚を書き飛ばしたが、現在では十五枚書くともう心臟が波打つ。それに私は悪食だ、性急だ、飽き性だ、以前のやうに興奮はしなくなつたが、それでもぢつと落ついて明日の力を貯へるといふ事をあまりやらない。これではいつ致命の一撃がやつてくるか解りはしない。そこでやや心を用ひ、この頃は興奮することを避け、激することのないやう、暗く考へこむ事のないやう、至極樂天的に、平凡に暮さうと心掛けるやうになつた。全く文章といふ仕事のモチープといふものは大部分が生理的關係からくるので油断がならない。長いもの、熱烈なものが書けないのはそれが爲めだ。何しても心臟が悪いといふ事は、頭の活躍を主とする根氣仕事には大敵だ。どうもこの健康醫もあてにはならないが、少しく弱氣がさして來たことは確かである。

水火を経て来た人

水火の中をくぐりぬけて来たといふ人は、案外に多くゐるものである。そして大なり小なり八方を流浪して来てゐるから、その郷土の味もぬけ、云はば圓滑なコスモポリタンになつてゐる。その上割合ひと人がよく執着が少なく自由でのんきな暮しをしてゐるものである。尤も最初から多くは自發的にその生涯を踏み出しただけであつてどこかにとどまつてゐれば、もう一步で幸運が来たものを、その性質にまかして飛び出してしまつたので、たうとう人の一生の流轉ばかりを見て、恒産的な生活をつかまらずに了つたといふところがある。半生でここと思ふところに意識的に頑張つてゐた人は、大なり小なり成功するが、どこへ行つても青空と米の飯はあるといつた風味を知つてゐる者は、遂に萬能足りて一身足りずといふことになる。かういふ人が多く陋巷に住まつてゐる。そしてあらゆる職業を経て来たり、變つた境地も見て来て、人としての一生はもう充分といふところへ来て、さて恒産がない子供がない、故郷といつても歸るに家がないといふ調子で、避々他郷の陋巷で終つてしまふ。かういふ人の生涯といふものは全く小説的で巧みに自然と世の中の味が織り交り、時代といふものの支配と又その人の趣味といつたものがあつて、不幸と不運の原因が、必ずその人の性質の中に存在してゐるものである。女の人は又多くその境遇か

ら出發してゐるので自然的といふところは少ない代りに、又思ひもかけぬ社會へ足を入れたり、その時代の特殊な事々物々に必ず支配されて、娼婦的な生活をして来てゐるから、妙な信仰をもつたり、肉縁といふものに熱中したり、理解したがたい冷酷な味や、又想像外の諦めをもつてゐて、普通土着の波瀾もない人々とは雲泥の差が生じてくる。さういふ老人や中年の女の人の一つの市街の最下級な生活層にゐて、比較的直接社會と交渉のない職業をとるやうになる。たとへば放浪的な職業として、料理人、理髮師、何々技師、下足番、小使、門衛、といつたやうな仕事をし、女は音楽の心得があるとか、家政婦、洗濯掃除といふやうなものしか出来ず、藝人となり、娼婦となり、女中となつて、それ／＼隅に落付く。かういふ人達を見たり、又それと交際し、その話をさくのが、私は少年時代から好きであつた故か、頑固に家事を守り、又その境遇から一歩も出ずに、やむを得ず土着したり、結婚したりしてゐる人々より、何となくふしぎなものを持つてゐるやうで興味があつた。そしてかういふ隠れたる巷の人々を多少尊敬し驚嘆して見てゐたのである。私は初めこの人達から世界を教へられ、趣味を興へられ、又放浪癖を注がれたやうに思ふ。今にして思へば、人間といふものは決してその経験が尊いのではないが、「悪い仲間」といふものは只妙に興味があつたのである。

東京の味

この頃の東京の人は、その八割まで田舎の人である。田舎の健康な頭と腕とが、東京の主脳部を握り、又その基礎となり、新しい東京を創造しつつある。そこで舊東京人はだん／＼蹴落されて近郊へ散逸し、その父母を舊東京人の中に持つ者は數へるほどしなくなつてしまつた。都會はいつの世も田舎者の天下である。都會人は三代にして亡び、新しい田舎の血を必要とする。偉大なる人物は必ず兩親の片々なりとも田舎にもつ。都會に三代住むと腐るのだ。その血が汚れるのであらう。四代目の都會人にあまり優良な人物は生れない。しかし又一方から云はせると、一ト度び都會で腐つた血でなくてはほんとうにその都會の味は解らない。東京に二代わなくては東京の眞の味は味はれない。然らばその東京人とはどんな種類の人々かといふと、尠くとも東京の生活の二つ以上の様式を生きて來た人のことである。一代ではややむづかしい。親の代に生き、自分の代に生き、東京の頭と手足を生きて來た人のことである。東京の主脳部は山の手に移つた。所謂下町はその腹であり足である。そこで山の手と下町を経て來たんでないと東京の味は感じられないと思ふ。では東京の味などといふ特殊なものがあるかときかされると、私は明かにあると思ふ。事々物々々の裡に、生活の角度の端々に、その趣味の一々にあると思ふ。一見してそ

の人に東京の味があるか田舎の味があるか、少し話をして見たり、共に歩いて見たりすれば歴然とする。つまり日本に於ける都會趣味で、どこか洗練され、回顧的で、咏嘆的、耽美的な、ふしぎに過去の傳統をもつところの味がある。今日はもう古い江戸っ子といふやうな味はなくなつて、どこか明治趣味の、妙に新しい、性急な、氣の弱い、遊戯的な、保守氣味の、何とも云はれない趣味をもつた性質がある。この都會氣質、東京氣質といふものは單に土俗の味や傳統の味ばかりではなく、その過去をも巧みに織り交ぜたところの、所謂市民氣質である。そこで政治もあり音楽もあり、又演藝、趣味とあらゆるものが入亂れて居るが、概して季節を感じ易く、迷信や年中行事や、特殊の趣味に形どられてゐて、狭い東京の裡に、あらゆる世界を封じこめて暮してゐる人のことである。従つて言語に、風俗に、食物に、居住に、器具に、戀愛に、飲酒に、行樂に、どうしてもその東京の味といふものをはつきりさせないと承知が出来ない。大阪に大阪趣味があるやうに、この東京の味といふものは明かである。そしていかにも日本中部の氣温や天候や、又産物その他と密接に關係して、所謂市井生活の粹を蒐めようとするものである。その例は一つ／＼あげられないが私はあらゆるものにこの東京の味ひがだん／＼減じてゆくを見て、ふとそんな事を考へた。これは解つてくれる人には解る氣持だらうと思ふ。

薔薇の秋風

詩人の賈島が、その邸宅をうちこはし竹を植ゑたり池を掘りはじめたので、放埒で高邁なことの好きな友人は、賈島がへんに隠士をもつて任じるつもりか、又少しく老いばけ初めたのではないかと悪口した。

「おれがおれの家を叩き毀して、竹藪にしよすが、池にしてしまはうがおれの自由だ。おれは人を傷けたくはなし、又人からも傷けられたくないで、この地上に二三尺だけ樂に呼吸の出来るおれの領分をつくるだけだ。」

賈島は只せつせとその遣庭を急いだ。

「ほんとうの事をいふとおれはもう放埒にも飽きたし、所謂高古的な精神の空つばに愛憎がつきたのだ。おれの詩は肉情だ。精神と肉情が一つになつてこそ、おれは虚偽から遁れられるのだ。おれはもうおれがそれほど偉くないといふことを感じ初めたのだ。不惑に近づいて初めて自分の價打が解つたのだ。そこで生活の輪廓もさちんとし、おまへにもあくせくさせまいと思つて、まづ生活を單純にし、それから人並に仕官しようと思ふのだ。いかにおれが古人の糟糠を舐めて、

頭ばかり高くなつた夢を弄むでゐるといつたつて、普通の高級官吏ぐらゐにはいつでもなれるのだ。」

彼はその妻によく納得させてから、時の科擧に應じ、受験の發表を待つてゐた。

「執政はきつとおれを第一に通過させるさ。おれの名と仕事がもうそのくらゐな事をさせるだけの價打はある。」

「でもうまく上第するとよいと思ひますわ。」

「おまへは不安なのか。」

「大丈夫とは思ひますが、でも……。」

「馬鹿、自信のないくらゐ人間悲惨なものはない。おれはどんなになつても、自分を悲惨だとだけは思はないつもりだ。」

友人は執政に逢つて誣告した。

「賈島の自惚れは絶頂に達してゐます。かれは市井の隠をもつて任じ、官を輕蔑しながら科擧に應じてゐます。」

「よろしい。わしは彼の輕蔑に對して無視といふ寛大をもつて應じようよ。」
執政はさういつて、うふ／＼と無形の嘲弄を敢てした。

賈島の庭が出来上つて、友人でもあつめて詩薈でもやらうといふ時に、登第した人々の名が發表された。

彼は故意にそれを見に行かぬ。すると友人の一人が、彼の名が發表されてゐないことを知らしてよこした。妻が心配して、夫の氣を兼ねながら走つて見に見つたが、全く賈島の名は發見されなかつた。

「あなたが登第しなかつたのは、あのお友達が執政に悪く誣告したためださうですわ。執政はそれを知つてゐながら、わざとあなたを下第したのですつて、まあ、何といふことでせう。」

「よし、よし。」賈島はいつた。「おれが傲慢だとか猖介だとかいふのだな。いいよ、おれだつてさうなれば節を曲げるものぢやない。おれの氣魄にどんなものかはいつてゐるか知らしてやらう。」

彼は翌日から庭の竹を引抜いて大路へ棄ててしまつた。近所の子供はその竹をかついでわいわいと遊び歩いた。

「賈島の奴、とう／＼世間體がはづかしいので、庭をこはし初めたな」

友人達はささやいた。

「詩はものにならないし、下第するし、彼奴の財産ももう池といつしよに涸渴するのだ。」

賈島は何を思つたか、竹を引抜いた跡へ薔薇を植ゑ初めた。しかもそれは貴重な書籍を賣拂つた金である。

「あの茅屋に薔薇が癸いたよ。」

「まあ、不吉な家だ。」

近所の人は覗きこんだ。

「薔薇とは面白いぬ。波斯趣味だよ。一つ西教的な詩でも拜見したいね。」

「薔薇も悪くないものだ。かう一面に癸き誇つたところは美だね。匂ひもあるし、はんなりと花瓣が落ちるところは、又海棠にもないところだね。」

友人達は聞えよがしに垣の外で批評した。

「油蟲奴、よけいな事をいふな。この薔薇は天にある太陽と地にあるおれとが獨りたのしむところだ。」

賈島はとう／＼門をあけなかつた。

「でもさうしてお友達がなくなつてゆくのはお氣の毒ですわ。あなたがお淋しからうと思ふと。」

「馬鹿、おれは彼奴がきらひだ。薔薇だつて油蟲は大きいらひだ。」

「かうして貧乏してゆくのはちつともかまひませんけれど、あなたが昔とちがつて、妙にとげと

げしくなつてゆくのをみると、わたくしも淋しくなりますわ。」

「薔薇はとげ／＼しくなつてゆくほどよい花が咲くものだ。」

夫妻は庭で毎日そんな會話をとりかはした。

手紙がくると賈島は、薔薇の花をつめてそれを突返した。

「訪ねて来る奴があつたらこれを見せろ。そして主人は草木よりほかに友人を持ちませんと云へ。それでもおれはおれの詩を生かしてゆけるのだ。」

賈島は一枚の詩箋を妻にわたした。紙には一篇の詩が題してあつた。

千家を破却して一池を作り

桃李を栽えずして薔薇を植う

薔薇花落つ秋風の後

荆棘庭に滿ち、君始めて知る。

妻はそれを讀むで凄然としたものを感じた。そして貧しくなつてゆく生活そのものよりも、その猖介な夫の性格が、いよ／＼鋭くなつてゆくのに少しく恐怖をかんじ初めた。

舊横濱立版子圖

聖代明治二十有歳、横濱は停車場も羅馬字綴りの赤煉瓦、異人の馬車に相乗りの人力、車力の腕の兒雷也と鬼神のお松の刺青が色を競ひ、廣場の噴水は玻璃の獨樂、植込の赤いつづじが野毛の大神宮の遠眼鏡の日和に曇るその下がお妾町、葉櫻の朝湯にばつと仇めくのが雲見橋介隈だといふ。そこから所謂弗旦フムツが通ふのが關内、菊の御紋の税關に縣廳北仲通り辨天通りの絹店や賈物骨董商の色の振袖や青銅の觀世音像に莫大の紙幣を拂ひ、案外本物の歌麿清長春信を小銀貨で愛嬌買ひに浚つて行つたのは英佛人、生絲と眞田で儲け綿と砂糖で損をして、二十番の露臺から米國獨立祭の花火に青いサイホンの喇叭飲みをやる貿易商が、二次を「海港」か「金田」で瓜や茄子の花盛りをやれば、蝶襟飾の店員が「チャップ」あたりで假名垣魯文の「安愚樂鍋」うしの嫌ひな女房は賑座の立見、大島小伯が演ずる「横濱五人男」の亞刺比亞小僧の三吉に片戀「太田」の隠居は丸竹富竹、圓朝の焼直し物を権現様時代の艶話として凄いと云ふ。高橋お傳も死刑になりましたと云へば、蔦座でベストの芝居がありますといふ。支那人と毒婦が出で書生芝居は風船乗とピストルが呼物、團菊が來たといふと先づ神風か富貴樓の總見、縞子の帯に如源と書い

たサントメ物の着流し、吾妻コートを脱いで手提鞆の中から岩谷天狗を出して一服、クリームがシモン會社、香水がRU、パイオレット流行だ。雲井の玉白粉は用ひず、イギリス巻に南京の玉色眼鏡で覗くのが悪い墨で刷つた三錢の大番附。有平糖と龜樂煎餅は離さず、紅毛の旦那が鶴へは椅子を持たせて水團扇をひら／＼。外では土耳其と印度の火夫が亂闘を演ずれば仲へはいるのは綱島一家の若い者、魚釣り玉轉しをしてさて芭蕉の實の味のついた冷水が五厘、吹矢と射的場の女に源氏節を説いてゐる船員の背後には、「さくら」の男が眼をひかり／＼。おまはりさんは腰に摺粉木、瓦斯燈を点火する男が脚立をかついで走り、早い新聞紙に團圓珍聞の反古はいり立て豆の袋であつた。子供は陳皮梅に肉桂を嚙り、辻に卵入氷菓子が出来、山下の海水浴に通ふやうになると、公園でクリケットが初まる。自轉車乗りは競馬の騎手より幅がきいた。チャブ屋の姐さんと自轉車の選手、理髮職人と外人下婢、ニコラス三世が彫千代を訪れ、萬國銀行の鐘にお茶場の唄は居留地の二部曲、關羽様の阿片の煙が立てば大同學校の爆竹、南京正月の香橋、仲秋の月餅、メロンとマンゴが人肉臭いとして鳳梨の砂糖漬、そこで東雲のストライキがくると大火、勸工場も娘手跡もなくなつた。東京へ行つて鐵道馬車へ乗つたのが二十年代の終り。横濱はうし鍋全盛、さらさらした夜の空には電氣のオールドの看板の辨慶が成田屋ア。(醉筆戲書)

少年事物談奇

行燈

僕は幼時曾祖母と寝た。其枕元にはいつも大型の行燈がともつてゐた。萬物に目鼻があるといふやうに見える幼児は、いつもこの行燈がほうとした一個のをんなに見えた。雪女のやうに感じられた。その燈心がチイと油を吸ふ音のする夜半、蒲團は又唐草模様の野山であつた。年経て老いたる下女が、よく事物の口説きを口誦してくれた。そしていつも行燈の口説きといふのを、因縁深さうに口誦すると、僕には行燈といふものが、一個の白い女に想像された。

テレグラフ

人は汽車を蒸汽といひ、ミルクをメリキ、日曜をドンタク、犬をカメ、といった時代であつた。ある日、叔母がテレグラフを打つたり受取つたりしたのを見て、この世には「電」の支配者があるといふことを感じた。そしてその支配者はわれ／＼一年生のやうに、アイウエオを書くといふことを信じてゐた。僕は電報によつて現在でも有機體の奥底のものを神と信じてゐるに變り

はない。

日清戦争

叔父の家へ来る支那の貿易商が、戦争で歸國してしまつたので、毎年くれる香橘マンダリンをくれなくなつてしまつた。日清戦争は僕から大好きな蜜柑をすくなくとも三四個だけ奪つたことになる。

スペンサーとチャリネ

上野に於けるスペンサーの風船乗りは見に行けなかつたが、第二回渡來のチャリネは見に行つた。馬がカードを拾つた。獅子が娘と接吻した。象がシンバルを叩いた。僕は家に歸つて來て木に物を云つて見た。野原で蛙に煙草を吸はして見た。

競馬と皇帝

根岸の競馬へ御幸になつた、明治大帝を僕は遙拜した。競馬が初まつてからも、僕は御座所の方を見て、涙をためて萬歳を三唱してゐた。皇帝の金モールが僕を熱狂せしめたのである。

相乗傳

小兒は常に叔母か母か又は祖母か従妹と傳で相乗りであつた。然したつた一度僕は父と母が相乗傳で外から歸つて來たのを見た。その傳には金で牡丹の蒔繪がしてあつた。(成島柳北の紀行を見ると相乗傳が静岡では不流行であつたことが記されてある。)

邏卒の棒

居留地で印度人がマンゴを行商してゐた時、巡査はまだ邏卒といつて、腰にバットのやうな摺粉木棒を下げてゐた。その先を今の美爪術師か、中年の日本婦人が洋妾顔をして、革の鞆をぶら下げて、東下駄で歩いてゐた。

銀座と萬世橋

銀座は誰もみな「煉瓦」といつた。萬世橋は「眼鏡橋」か、よろづよばしと謂つたやうに記憶する。僕は煉瓦から眼鏡橋まで傳に乗つて、大雷雨に逢つたことを覚えてゐる。三越が三井呉服店で、「いらつしやい、毎度有難うムいます。」と二三十人の小僧が暖簾の影を往來してゐた時代で

ある。(煉瓦のことは、芥川氏が書いてゐた。文藝春秋参照)

明治春宵

をんな達がイギリス巻に結び小町水といふのをぬつて、オーデコロンを注ぎ、「如源」と書いた黒縹子の帯で、高橋お傳が人を殺したといふ跡の横濱の丸竹といふ席へ川上音次郎のオッペケペーを見に行つた。

八幡の藪不知

八幡の藪不知といふ興行物にはいつて、出ることが出来なくなつて泣き出した。後年にはナイフであのよしずの垣を切つて裏面から逃げ出した。今でも夢に見てさへあれは出られない。故に僕は俳諧八重櫻とか、又野馬臺詩のやうなものはさらひである。

徳川の何日

田舎では徳川の何日とかぞへる。それが又種蒔きにも潮時にも又年中行事にもびつたりするの、いかに新暦が流行つても、「徳川の何日」は廢されない。僕は今釣りをするので特に舊暦で月

と潮の關係を見なければならぬ。そしてやつとそれを習得出来るやうになつた。新暦では花も月も潮もまだはつきりとは断定出来ないではないか。それだけ祖父や曾祖母は僕達より天象などにくはしかつた。

石井ブラック

アダムスの昔は知らず、僕は歸化人といふものを初めて見た。それは石井ブラックといふ男で後には高座へも出た。この男が初めてシネマの説明をした。「佛蘭西エクレール會社の製造にかゝる、瑞西儀仗兵の訓練の光景……。」やナイヤガラを見せた。又催眠術をもやつて見せた。

毒婦妖婦

高橋お傳が人を殺した宿屋を見た。嫂のお政が懺悔をする興業物を見た。花井お梅の經營するお汁粉屋へもたべに行つたことがある。その他自轉車お玉、女警部と、明治にはだいぶ毒婦・妖婦がでた。その中で僕は千阪光子といふのが、俾へ乗つてゐたところを一度見た。華族の令嬢で、又毒婦であつたといふ有名な女である。そして氣の故か現代の美人より、當時の有名な女の方が遙かに美人であつたやうに思ふのは、あながち僕一人か。その他名のあつた清元お葉、初代

ぼんた、久米八、米坡など全く大風で、整つて一枚繪にしてもよい典型的な顔をしてゐた。

アラビヤ小僧の三吉

明治初年の横濱元町は、意気な馬丁の巢窟であつたといふ。當時阿蘭陀公使を殺したアラビヤ小僧の三吉といふのは、その代表的な馬丁のやうな氣がするが、僕等が馬丁を知つてゐるのは後年で、それでもマントルを三段に裁つて、赤や青のビラ／＼をつけて、饅頭笠で幌馬車のうしろへツンと立つてゐた意気な姿は忘れられない。

俳 優

團十郎は二度、五代目菊五郎を一度、芝翫團藏も一度、齋入も一度、先代左團次、荒次郎、夜嵐お絹の権十郎、小團次などはよく見た。門十郎といふ人はどこがよいのかわからない。新藏といふ人は子供にもうれしかつた。

新派では福井茂兵衛、山口定雄、後藤良介、高田實、そして初めて新派劇を見たのは圓朝の「黄薔薇」で、確か荒木清といふ俳優だと思つた。(蜷川一夕話)

味覺に就ての論理

味覺の尖端——といつてもむづかしい。うつかりするとそれは單なるイカモノ食ひか惡食になる傾向があるからだ。今日われ／＼は昔と違つて少く食べて廣く食ふ。場所と時間を巧みに組み合はして、古人の想像もしなかつた味覺的收穫に馴れきつてゐる。そしていつの間にか尖端を元へ戻して、原始生物的な欲求さへ持ち初めてゐるのである。

飲食有節——といふ譯にゆかない。多種多元に食ふ。居ながらにして南北の珍味佳肴に馴れてゐる。東京に在つては印度、中華、回教、コレア、シヤム、英佛、ヤンキーの料理が食べられる。故に料理としては單に類別にすぎない。その結果われ／＼に起る欲求はどうしても文化と反比例した原生動物的な美味求真となるのだ。

昔から初ものと何とかいふ——初物はよい。然し今日では初物のケジメが解らなくなつてゐる。冬日に西瓜、葡萄を噛み、夏日に凍魚を啖ふ。胡瓜、冬瓜は必ずしも夏に限らない。生薑や實芭蕉はいつでもある。

して見ると味覺の尖端とは、イカモノ、惡食を避ける事にしても、やつぱり原生動物的になら

ざるを得ない。味覺の進歩は料理でなくて原始の生ものにあるといふ事になる。何故なら料理には飽きるが食欲に飽きないのは人類の本能だからだ。

そこで小作農的食物をとつてゐる部門の人をもつて飲食有節の東洋的賢人派とする。

文化的小手先料理に舌鼓をうつてゐる部門の人をもつて、今日の社會層を支持する田舎的都會人とする。

何でも御座れで食つてゐる人をプロレタリア人とする。

イカモノ、悪食を目的としてゐる人を舊時代の浪漫派とする。

生新に、原生動物的に攝食してゐる人を今日の文化の尖端人とする。

尖端人は廣く尠く食ふ。

主として季節的變化に處して、生新、豊熟なるものを選ぶ。

魚を見よ。獸肉を見よ。果實を見よ。中華は味の交響樂だと謂はれる。然し主として乾物料理だ。新味に乏しい。

日本は、精進料理だ。然し料理外の料理に原生動物味がある。たとへば貝類について、小鳥についで、腸についで、鹽物について、蔬菜、野草についで。

そこで私は主張する。

原生動物的に生ものを喰へ。

すくなく、ひろく、齒に美しく、胃に軽く、頭に強く。

主として眼より鼻で、嗅覺で、肺臟で、あたらしき、季節的の、シユンのものを喰へ。

偽物の洋酒、料理、菓子喰ふな。

原産地の原生動物的味覺を尊重せよ。